

---

# 魔法少女リリカルなのは 闇孕む聖母

天ノ刃羽斬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 闇孕む聖母

### 【Nコード】

N7743N

### 【作者名】

天ノ刃羽斬

### 【あらすじ】

火事によって両親を失った主人公、悠斗は妹たちと4人で生活する。

ある日、変な大人に絡まれてる二人の少女を見つけた。悠斗はその大人の態度がムカついて殴り飛ばす。それが、この物語の始まり。

## オリジナルキャラ紹介

まずはオリジナルキャラ紹介から

日向悠斗（主人公）  
ヒュウガ ユウト

年齢 15歳

好きなもの 孤独 昼寝 世羅  
嫌いなもの 燃える臭い 雪  
趣味 絵を描くこと 歌うこと  
デバイス コンチエルト

シンフォニー  
カノン

先天資質 変換資質『暗黒』  
希少技能『時止める瞳』  
『救世主の雷』

### 解説

むかし両親が死んで妹の世羅とシンフォニー、カノンの4人で住んでいる。

髪は灰色に近く鈍くしか光らない。瞳は普通に黒。

過去の産物から他人に関わり合うことは嫌いで、平穏な生活をした  
いと思っている。だから平穏が乱れるときは戦うことも辞さない。  
年齢詐称してバイトしていることもあって、多岐に渡る経験を  
もつ。

変換資質『暗黒』は全てを消滅させる特徴を持つ母親譲りの能力。  
心の中に潜む闇が深いほど、消滅させるのにかかる時間が短縮され、

効果範囲も広がる。

『時止める瞳』は視界に入れた対象の時を止める。

日向世羅

ヒュウガ セラ

年齢 14歳

好きなもの 兄 兄の作る料理

嫌いなもの 炎の出るもの 血

趣味 母の遺品のピアノを弾くこと

デバイス ゼルダ

先天資質

希少技能

『スノーホワイト氷結の媛』

解説

悠斗の妹でブラコン気味。両親が死んだ火事を魔法だと知っているから魔法を嫌う。

火事の事件から魔法を嫌い、前では毎日のように使っていたゼルダも、今では話し相手になるだけ。火事の後から一切魔法を使っていない。

シンフォニーとカノンも嫌っている。

甘えたい盛りに両親を失ったので悠斗もいつか消えるんじゃないかと思い、ブラコン化した。

希少技能『氷結の媛』は全てを凍らせ、砕くレアスキル。危険度が高すぎて制御できない

コンチエルト

契約者 悠斗

タイプ ???式インテリジェントデバイス

解説

ミッド式でもベルカ式でもない魔法を使えるデバイス。それ以外の詳細は不明。

悠斗と波長がかなり合う。

待機モードは青いプレスレットで1stモードは片手剣、2ndモードは双大剣、3rdモードは翼、4thモードは双剣双銃

シンフォニー

契約者 悠斗

タイプ 古代ベルカ式ユニゾンデバイス

解説

亡くなる前に父親からもらっていた融合騎<sup>ユニゾンデバイス</sup>で今は家族の一員。世羅に嫌われていることを知りつつ、明るく振る舞う。

瞳の色は白で、髪は水色。肌が少し色黒いのもあって白服を着ている。

得意魔法は結界や治療系。悠斗とユニゾンすると悠斗の髪と眼が白く染まる。

カノン

契約者 悠斗

タイプ ???式ユニゾンデバイス

解説

両親が亡くなって数年後に日向家にやってきた少女。悠斗に懐いてそのまま家族に。

瞳の色は蒼で、髪は金色。着ている服は空色に朱色のラインが入った服

ユニゾンデバイスとしての性能が非常に高く、それと同時に身体能力も高い。それゆえにカノンと融合するとコンチェルトの力が増幅される。

得意魔法は攻撃魔法。ただし、防御、結界、治療系は人並み以上に行える。悠斗とユニゾンすると髪が黒く染まり、地面に着くまで伸びる。瞳は血に染まったように紅くなる。

ゼルダ

契約者 世羅

タイプ 古代ベルカ式アームドデバイス

解説

亡くなる前に母親からデバイスで昔はよくゼルダを使って魔法の練習をしていた。だが火事の事件から

最近では世羅の話し相手。1ndモードは槍、2ndモードは戦斧、3rdモードは斬馬刀

## 第0章 それは運命の出会いなの

雪の降る寒い夜、オレの目の前にあるホテルが炎に包まれ、燃え上っている。

中にいた人はかなりいるが、オレだけじゃもうどうしようもなかった。消防員の手が回り切れず逃げ遅れている人もいる。

その絶対にありえない光景に消防員も自分の目を疑いながら消火しようとする。

不意に、オレの袖が引つ張られる感覚がする。そちらを向くと、妹の世羅がいた。

「お兄ちゃん、お母さんは？」

世羅は母さんの姿が見えないことに不安を感じ、オレに向かってそう聞いてくる。

(世羅の『氷結の媛』スノーホワイトで消火をさせるか?)

オレは不穏なことを考えたが、すぐに振りかぶってその案を消した。

(世羅はまだ、希少技能を制御できないんだ。父さんごと殺してしまっ)

大切な妹に親殺しの経験なんてさせてたまるか)

「母さんたちは見てないけど、魔法が使えるんだからきつとどこかに避難してるよ」

「そつだよね！」

世羅の無邪気な笑顔に深い罪悪感を感じた。

「お兄ちゃんはお母さんが死んでいたことを知らないんだよね？だから罪悪感を感じてないよね？」

いきなり世羅の目がうつろになり、変なニタニタ笑いを浮かべる。

「お母さんを見捨てたりしてないよね？自分だけ助かろうと思ったんじゃないよね？」

世羅はまだ問い詰める。答えようにも黒い霧がオレの口を塞いで喋れない。体を動かそうにも霧はオレの体を縛り付けて動かさない。

「ねえ、どうなの、お兄ちゃん」

オレは世羅を怖く思って飛び起きた。

さっきの光景とは一転してオレの視界に広がるのは質素な自分の部屋。

外は晴れやかな太陽が昇っているし、気温も梅雨に入りだしていて、雪の時のように凍える感覚ではない。

「……………って、夢かい!!!」

なんかどつと疲れた。起きた瞬間にこんだけ疲れるなんてどうよ?」

くだらない自問をしつつ自分のベッドから降りる。

目覚めの悪さから眠気が尾を引いているが無視してた。

「悠斗、うなされてたけど大丈夫?」

ドアからカノンが顔を覗かせて聞く。

「大丈夫大丈夫。世羅に弄られる夢を見ただけだから」

「そう、なら良かったけど。それより朝ごはん作って。時間が時間だからお腹が空いちゃって」

時間?

悠斗はカノンの言葉に嫌な予感を持ちつつ部屋にある時計を見る。

「悪い!!! 急いで作る!!!」

普通なら何も問題もない時間だが、オレには遅刻確定の時間だった。

オレの家は学校から30分ぐらいかかるところにある。

だから、ある場所に行くためにはかなり朝早く起きないといけない。まあ新聞配達の仕事をした時があったから辛いとは特に感じないが。

普段は朝食を食べる前に行くのだが、寝坊したせいで行くことができず、学校に行く前のある場所に行くことにした。

「カノン、ジャスト20分経ったらシンフォニーを起こせ」

悠斗はカノンにそう言い残して朝食を作り始めた。

悠斗は宣言通り20分で作り終え、世羅を起こす。

急いである場所に行こうとして足をとめた。

普段は使わない自然公園を横切る道（この道がかなりのショートカットになる）で大学生みたいな大人8人に囲まれている2人の少女を見つけた。

というか、柄の悪そうな男達のほうがでかくて小さくしか見えなかった。

垣間見えた姿は2人とも悠斗と同じ私立聖祥大附属中学の制服を着て、片方がたれ目な顔で茶色の髪の毛のサイドポニーテール。

もう片方がキリツとした顔で金髪のロングストレート

リボンが赤いから同じ一年生だけど、2人とも美少女というには十分だった。

「ねえねえ君たちかわいいね。俺らと楽しい事して一緒に遊ばない？」

「君たちかわいいからきつといろんなこと楽しめるよ」

俗に言うナンパというやつだろうか？

悠斗はめんどくさがって少女2人を見捨て急ごうとする。

「親なんてほっとけば勝手にくたばるんだ。一緒に行こうぜ」

大人の中の誰かが言っただけなのだろうが、悠斗の逆鱗に触れるのには十分な言葉だった。

(そういえば、あんな夢を見たことの鬱憤を晴らしてなかったな。)

それはやつあたりというひどい行為だった。

悠斗は背後から男の1人を殴り飛ばして宙に打ち上げ、口を開く。

「お前らムカつくからここで殺すね」

タイミングよく宙に飛ばされた男が地面に落下したので大人たちは逃げるように去って行った。

「まったく、時間無駄にした。サッサと行こ」

結局1人しか殴れず、うっ憤が更に溜まった悠斗は進もうとする。

「待って!!!」

走ろうとした瞬間、サイドポニーテールの少女に呼び止められた。

「用事があるから手短かに」

「助けてくれてありがとう」

悠斗が言い終わる前に感謝の言葉を言われた。

「気にすんな。投げられれば誰でも良かったんだから」

「いいの。それでもありがとね、日向君」

その言葉に悠斗は困惑した。

「名前教えてないはずなのに、なんで？」

悠斗がそう聞いた瞬間、サイドポニーテールの少女は前のめりに  
転びかけた。

悠斗はとっさに体を掴んで転ぶのを止める。

「自分のクラスメイトの名前ぐらいは普通に覚えるよ」

サイドポニーテールの少女はそう言ってゆっくりと立ち上がる。

(それは納得。オレの場合、人と関わりたくないから嫌われる程度  
にしか覚えてないしな)

「それは申し訳ない。えっと、……………田村ゆ〇りさん」

「なんでそっち!!!????」

(名前を知らないんで適当に言ってみただけだが、何かまずかった  
か?)

悠斗の言葉に隣の金髪少女も苦笑いをしている。サイドポニーテールの少女は呆れたように深いため息をついて自分の名前を言う。

「わたしの名前はなのは。高町なのは。で、こっちは」

「同じクラスのフェイト・テストロッサ・ハラウン。よろしく、悠斗」

(アイヤー、そりやまずったアルネ)

なぜかエセ中国人風につぶやく悠斗は

「明日になったら忘れる」

と言ってその場を去った。

「遅れてごめんね、父さん、母さん」

悠斗は目的の場所についてそう言った。

悠斗が毎朝やっているのは墓参りだ。さすがに新聞配達人のバイトをしていた時は来れなかったけど。

「はい。いつも通り父さんと母さんが大好きなジュース持ってきた

「よ

悠斗はそう言ってFANTTAを置く。

「じゃあ、あんまり遅くなるのもあれなんでもう帰るね」

悠斗はそう言って自分の鞆を掴み、学校に行く。もう二時間目が終わったところだが、気にすることではなかった。

そして昼休み、いつも通り屋上で妹と一緒に弁当を食べている。

別に一人で食べてもいいのだが、世羅が追い掛け回してくるので一緒になっただけだ。ちなみに屋上なのは空が好きだから。

だが、今日ばかりは違った。

「へえ。いつもこんなところで食べてんだ」

そんな声とともに、今朝出会ったサイドポニーテールの少女が来た。

ついでに4人の少女も引き連れて。(うち一人は今朝の金髪少女)

「今度は一体なん用だ？ えっと、高町なんとか」

「なのはだつてば！！！！ な・の・は！！！！」

「出会つて4時間で名前をつる覚えつてある意味すごい才能ね」

「たしかに。一遍に言われでもしない限り、ある程度は覚えられるのに」

「わたしの名前、どれだけひどい状態になつてるのかな？」

「ひどかったら、ウチが慰めてあげるで」

「……だれ？」

屋上で対面したとき、そんな会話になった。

「で、結局高町なんとかとファイト・ハラロッサは何しに来たんだ？」

「いい加減名前覚えて！！」

「ファイトじゃなくてフェイトだよ」

悠斗は泣き出している2人の言葉を見殺して他の3人に目を向け

た。

「なのはちゃんたちが助けてもらったって聞いてな、それでうちらもお礼を言おうかと」

「一応自己紹介もするつもりだったんだけど、なのはちゃんとフェイトちゃんの名前が悲惨な状態になってるから」

「じつくりと名前を覚えてあげるわよ」

「わかったよ。八神はやてさん、月村すずかさん、アリサ・バニンクスさん」

悠斗がそう言うとなのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかの5人は固まった。

(あつ、このハウレンソウちょっと醤油が強すぎだな)

悠斗は自分の弁当の感想考えている。

「もしかして、最初っから知ってた？」

「一応、かな？ 4時間目が始まるときに私立聖祥大附属中学の五大美少女の話が聞こえて、その中に高町なんとかの名前もあったから、一緒にいた子たちの名前も聞いた」

アリスが聞いたことに悠斗はあっさりと答える。

「もしかして、なのはの名前を『高町なんか』でポケ通したのっ  
て」

「反応が面白かったから貫いてみた」

「はーなーしーてーっ」

「なのは、ストップ。気持ちわかるけど堪えて」

悠斗の言葉になのはは殴りかかろうとするが、フェイトが止める。

「別に放していいぞ。避けれるし」

悠斗はそう言ってなのはの怒りに油を注ぐ。

はやてはどうか止めようと考えて話題を振る。

「そ、そういえば、この子って誰なん？」

「……愛人」

世羅がそう言った瞬間、五人は遠ざかった。

「お前はどこでそう言う言葉を覚えるんだ？」

「……この前読んだ漫画」

「そ、そうか。まあいいや。名前を覚えられない作戦は失敗したし、このままほったらかしておくか」

実は、悠斗は入学式の日クラスメイトどころか全校生徒の名前を覚えた。

それは、さっきのようにわざと間違えて仲良くなれないと思わせるためである。

小学校の時も名前を覚えられない作戦で孤立することに成功した。

だから中学でもいける、と思っていたのだが

「やっぱり慣れない人助けなんてするんじゃないよ」

悠斗は自分の愚かな行動に後悔しつつ、残りの弁当も食べて教室に戻る。

「それと、お兄ちゃんが最初からかった人達の事だけど、」

「ああ。魔力を持つてる、ってことだろ。大丈夫。いくら何でもそこまで鈍ってないよ」

教室に戻ったらクラスメイトから白い目で見られたが気にせず今日のことを考える。

そして放課後、バイトがなぜか休みになったので世羅と一緒に帰ろうとするとはやてがいた。

「こんどは何の用？ 神谷ひなた」

「ううう、うちの名前はそれに変わるか」

悠斗がそう言つとはやては泣き出した。

と思つたら泣きやんでまた口を開く。

「悠斗君の妹は預かつ」

はやてが言い終わる前に悠斗ははやての首を掴んで聞き出そうとする。

「ギブギブ。冗談やから放して」

はやてはすまなさそうに言うからとりあえず放してみた。

「別にちよつとした鎌かけや。悠斗君が愛人を作るような人に見えへんから妹やないか思つてな。

それなら小学生が中学の校舎に入れたんも納得できる」

「名前を偽ってる可能性は？」

「その質問で無くなつたよ」

（何気に勘が鋭いな。しかも魔導師とくれば、知つたら世羅が殺しそつだな）

「分つたよ。アイツ、世羅はオレの妹だ。愛人なんかじゃ決してない」

「ほんとにはやての推理通り!!!?」

いつからいたのかアリサが顔を出す。そして開き直つたようにならずか、フェイト、なのはも顔を出す。

（フェイトとなのはは魔力を持つてるから気付いたはずだ。今度から気配感知の練習もしよ）

悠斗はそんなことを考えながらはやてと向き合う。

「用事はそれだけ？　じゃあオレは世羅を迎えに行くね」

「ちよお待って。うちらも一緒に行く」

悠斗は一瞬自分の耳を疑った。

「聞こえんかったみたいやからもう一回言っな。うちらもあの子と仲良くなるために一緒に行く」

どうやってはやて達を止めるか考えた。

オレも魔導師って説明して引かせるか。だが、もしそれをやった  
らオレ達の平穩は崩れさる。

かと言って、説明しなかったらバレた時世羅がはやて達を殺すの  
も目に見えている。

悠斗は深く迷い、両方とも和平解決できる策をとる。

「止めてくれ。これ以上オレ達のいる平穩を壊さないでくれ」

悠斗は冷たい視線で5人を見て、なのは達はその視線に怯んでいる。

(頼むからこれで諦めて帰ってくれよ)

悠斗のそんな思惑をよそに懸念している人物が現れた。

まさに最悪のタイミングだった。

「お兄ちゃん、まだいる？」

世羅がそんな声とともに現れた。

「ねえねえ、今日からわたし達も一緒に帰っていい？」

悠斗が何か言う前になのはが世羅に聞いた。

世羅は少し迷って頷いた。これで、一緒に帰ることは確定だった。

ただ、普段だったら絶対に嫌がるはずなのに頷いたことが不思議でしょうがなかった。それに、態度にも何か違和感がある。

「一体何考えてるんだ？」

「いつまでも、お兄ちゃんに甘えては、いられないから。」

だから今回は自分から動くよ。もし魔導師だったら殺すからね」

（ようは敵の懐に潜り込んで正体を見極めようってことか。

しょうがない。なのは達が殺されないようにオレも少しは手伝いますか）

悠斗は勝手になのは達を守ることに決め、歩き出す。

（これで少しは魔法嫌いが治ればいいけど）

## 第0章 それは運命の出会いなの（後書き）

一度消えてしまったもの、やっと復元できました。

最初に考えてたのと若干話の運びが変わったけど、ストーリー的には問題ない

はず。

悠斗「こんなにトロい作者は史上初だろうな」

自分でもトロいって分かってるんですから塩を刷り込まないで！！！！

カノン「じゃあ塩の代わりに魔力を入れてあげますよ」

あの、背後にあるブラックオーラは消して頂けないでしょうか？

カノン「私のシーンを増やしてもらえるのなら考えなくもありませんよ」



## 第1章 日常の日々

2年後の桜舞う季節、なのは達は3年に進級して、世羅は2年に進級した。

今は桜舞う季節の昼休み

悠斗が懸念していた事態にはギリギリでなっておらず、世羅もだ  
いぶなのは達に心を開くようになった。

「月日が経つのは早いな」

「何老人みたいなこと言ってるねん」

悠斗のつぶやきにはやてがツツコム。

「だってさ、オレ達が知り合ってからもう2年経ったろ。世羅が危  
険だったか内心ドキドキだったし」

「そっか。知り合ったのが1年生の時だからもう2年近くだったん  
だね」

「色々な事があったからもっと長く感じたよ」

悠斗の言葉になのはとフェイトが同意する。

「ホント、色々あったよ。あまり悠斗達は自分の事喋ろつとしないけどね」

「悪い。両親がいないこととかに関してあまり触れ欲しくないんだ」

アリサの責めるような言葉に悠斗は居心地が悪そうに言う。

「それは前にも聞いた。誰もそこを穿り返そうとはしないでしょ。何で世羅が『魔法』って単語に過剰反応するのもかも聞いてないし。わたしが言ってるのは別のことよ。たとえば家の中をみして欲しいとか」

「……………うん。見せたくないとか一回も言っていない」

「だよな。オレも言った覚えなかったし」

世羅と悠斗がじっくりと記憶を探ってそんなこと言った覚えが無いのを主張した。

「……………はい?」「……………」

5人の声が見事に八モった。

(そういえば、来ていいよ。とも言ってなかったな。それで勘違い

したのか)

悠斗は変に自己完結して世羅の後に続く。

「ウチの場合質素だけど、近い内に遊びに来る？」

「『『『『今日行きたい！！』『』『』『』』』』」

5人はまたしてもハモってそう言った。

と言うわけで、放課後の日向家に遊びに来た5人。

「質素にも限度ってもんがあんでしょ」

家の中を見て、開口一番にそんな言葉が聞こえた。

リビングには飾りと言う飾りは一切無く、テーブルの上に親子4人で写った写真立てがあるだけ。

一応3人がけソファアが2つあるが、カバーやクッションは一切置かれてない。

ここだけ見たら、ホントに人間が生活しているのか？と聞きたくなる。自分でも2日に1回は思うくらいだし。

あまりに質素すぎてなのは聞いてくる。

「これ、どうやって生活しているの？」

「リビングにはあんまり居ないからな。広すぎて逆に落ちつかなくなるんだ」

「……だからここは食事をするための場所」

「ってことは、2人ともどこにおるん？」

「自分の部屋か世羅（お兄ちゃん）の部屋」

「お互いに入り浸ってるんだね」

はやての質問に世羅と同時に答えるとさすががそつ言ってため息をついた。

「さすがにプライバシーに関しては配慮してるよ。大抵は駄弁りとか、お願いとかだけだ」

「お願いって世羅ちゃんに？」

「ああ。オレの趣味は前にも言ったけど歌うこと。だから歌う曲は自分で作ったやつが多いんだ。

だけどオレはピアノが弾けないからどんな曲になるか分かり辛い

面があるからな。だから世羅に演奏してもらって音合わせをするんだ」

「悠斗君が作った曲か。聴いてみたいな」

「いいよ。世羅、母さんの部屋でピアノの準備をしてくんない？ オレは自分の部屋から適当なもん持ってくつから」

なのはがそう言ったので、悠斗はあっさりと了承し、世羅にお願いした。世羅は何も言わずとてと母さんの部屋に行った。

なのは達も世羅についていく。

悠斗はいそいで自分の部屋に行き、ある人物を見つけた。

その人物は人形サイズの体で悠斗のベッドの上で寝っ転がっていて、スヤスヤと寝息を立てている。

（シンフォニーめ、またオレのベッドで寝てるのか。じゃあカノンは、ってヤバイ！！！！）

悠斗は口実に適当な譜面を持って母の部屋に行く。なぜなら、そこがカノンの寝室になっているから。

悠斗はいそいで念話でカノンにコンタクトを取ろうとした。

「カノン、今どこにいる？」

「ドコって、スーパーだよ。食材が足りないんだから当然じゃん」

「そ、そう言えばそうだったな。とりあえずいろんな意味で助かった。

じゃあそのまましばらく時間をつぶしててくれ。お客さんが来るから会わないように気を。一応オレの部屋の窓は開けておく」

カノンの答えに一瞬こけそうになったが、悠斗はそれだけ伝えて念話を切った。

直後にカノンから念話が届く。

「お客さんたち含めてあと1、2時間ぐらい軟禁出来る？そしたら食材も腐らずに済むし」

「1、2時間なら大丈夫だ。母さんの部屋に軟禁しておくけど気をつけてくれ。それと、」

「それと、何？」

悠斗はカノンと物騒な会話して、そこでいったん止め、なんて言うべきか迷った。でも純粹な気持ちを言うことにした。

「こんな不憫な生活をさせたり、気を使わせたりして本当にスマンな」

「別にいいよ。私のマスターは悠斗なんだから」

そこまで言って念話を切った。

(じゃ、1、2時間がんばりますか)

悠斗は母の部屋の扉を開けて中に入った。

「悪い。適当に選んでるからいい物は期待するなよ」

悠斗はそう言って持ってきた譜面を見せる。

「これが悠斗の書いた譜面ね。世羅、まずはこの曲を弾いて」

フェイトがそう言って譜面のひとつを手に取り、世羅に見せながら頼む。題名は『月光華』タイトル

「……私もその曲は好きだからいいよ」

世羅はそう言って慣れた手つきでピアノを弾きだす。

夜の月と星をイメージした曲で、歌詞は孤独な月に星が慰める感じで作った。

曲調は寂しさを、切なさを前に出しつつ、星の明るさも出した。

世羅の演奏が終わると5人は涙ぐんで、声を出して泣いているのがなのはとフェイトの二人。

「なんとなくか、オレが泣かしたみたいな状況になったな。

世羅、今度はこの曲を頼む」

悠斗はそう言って持ってきた譜面を差し出す。

今度の曲は明るめで踊る少女をイメージした曲。歌詞も少女がネガティブを吹き飛ばす感じで作った。

曲調は常にテンポ良く、<sup>たと</sup>譬えるならサンバみたいな感じだ。

今度は曲の元気さにあてられ、泣きやんで楽しく笑っていた。

悠斗は基本的に悲しい曲が好きで、こついった異色もあるが、5人は泣き状態に近かった。

「……この曲弾いてみていい？」

だいぶ演奏会が終わると世羅が譜面の中から一つの楽譜を手に取り

り、悠斗にそう聞いた。

(ソレ、一応新曲なんだけどな。ま、いつか。音合わせには丁度いいし)

悠斗は頷いて世羅のリクエストにこたえる。

世羅が弾きたいといった曲、『禁愛』はなのはとフェイトを見て思いついた曲で禁断の恋をイメージしている。歌詞はまだ作ってなくて、すれ違う思い、相手を救いたい、悲しませたくない、そんな思いを聴く人に訴えそうな曲にしてみた。

世羅は、そんな思いをしたことがあるのか、途中から泣きながら弾き続ける。

体も大胆に動かし、鍵盤に感情を込めるように指で弾く。

(この曲は、世羅には似合い過ぎてるな)

「……これもいい曲。」

「……楽しそうなの、……グスッ……少なすぎる、よ……」

世羅が楽しそうに笑って、なのはが涙声で文句を言う。

(オレはこういった感じが好きなんだけどな。あとは、勇ましい曲調とか)

悠斗はそんなことを考えながら口では別のことを言う。

「未熟者だからこれが限界なんだ。悪いな。」

「（未熟者の領域でコレ？

案外こっちの才能ってすごいのかもね）」

アリサがそんなことを考えているとも露知らず、悠斗は言葉を続ける。

「結局演奏会で終わったけど、もうこんな時間だし食べて帰る？」

（食材はカノンが買い足したと思うし、7人分くらいはあるよね？）

悠斗は聞きながら食材が減っていたことを思い出して冷蔵庫に向かっていく。

（うん。これなら大丈夫だな）

悠斗が冷蔵庫の中身を確認していると5人がやってきて、さすがが代表して言う。

「もうこんな時間だし、今日は家に帰るよ。」

「そっか。じゃあ送ってくよ」

「いいよ。そこまでしなくて」

「別にこっちがよくないの。女の子を夜道に出歩かせたくないだけだから」

「じゃあ自然公園まで送って。わたしとアリサちゃんはそこに車を呼ぶから」

「それならいつか」

悠斗はさすがとそんな話し合いをして自然公園まで送ることにした。

「じゃ〜ね〜」

「さよなら〜」

そんな言葉とともにアリサ、さすがと別れた。

悠斗も二人に挨拶を返す。

「楽しい1日だった。ありがとな!〜!」

そうして5人を見送り、声を大にして言う。

「助かったよ。なのは達の前で戦うことは出来ても魔法なしで勝つことは難しそうだったから」

「感謝しなくていいぜ。これから地獄に変わるんだからな」

そんなことをいう男が水銀灯の上に立っていた。

「誰だ、お前？」

「ムシケラに名乗る名はねえよ、バカ」

男のその言葉に軽くイラッとしたが、抑え込んで放置した理由を言う。

「いくらなんでもオレの平穩を壊したら文字通り消すからな」

「魔力を持つてる感覚がしないのに俺を殺すか。面白い餓鬼だな。ま、いいぜ。今日のところは退いてやら」

水銀灯の上に立っていた男はそう言って姿を消した。

(今日のところは、か。じゃあ明日も来るんだろっな。なのは達に  
教えておくべきか)

悠斗はそう考えて自分の家に戻って行った。

## 第1章 日常の日々（後書き）

悠斗「やっと更新、か」

世羅「……何か弁解はある？」

なのは「聞く気はないけど一応聞いておくよ」

悠斗はコンチエルトを作者の首筋に立てながら、世羅は氷結の媛で作った氷塊を作者の頭上に作りながら、なのはは世羅と悠斗の放つ魔力を利用して直径4メートルほどもあるスターライトブレイカーを作者に向けながら聞く。

作者「何の弁解もございません。此度は難なく進んだのですが、途中で他の小説にハマってしまっただけでございます。はい」

フェイト「そっかそっか。貴方にとって私たちはその程度だったのね」

はやて「ほんまやな。まともに進んでもないくせに、ウチらと見て



## 第2話 日常の争いと非日常の争い

翌朝、日課をこなして自然公園に集まった。

仲良くなつてから皆で登校するようになって、悠斗の名前を覚え  
ないイメージも払拭された。ついでに愛人の噂も。

最近のこの時間の悩みといえば、

「日向悠斗！！ 全校男子の恨み、思い知れ！！！」

こつこつバカが絶えず喧嘩を売ってくることだろう。

一緒に登校しているのは私立聖翔大付属中学の五大美女＋。他  
の男子に恨むなつて方が難しいのかもしれない。

(普通に話しかければ仲良くなれるのに何でしないんだろう)

それはモテる男の考え方だ。という冗談はさておき、毎朝3回、  
下手すれば10回襲ってくる男子たちに悠斗は呆れてきている。

「今日こそキサマに引ボオッ！！！！！」

悠斗は持っている鞆の角が男子の顔面に当たるよう投げ、最初の  
1人を撃沈させた。

「毎朝毎朝よく懲りずにやってくるわね。学習しても知らないのかしら?」

原因の一角であるアリサがそんなことをつぶやく。

(かわいいそんな男子衆だな。お前らの行動は一切報われそうにないぞ)

悠斗はそこまで思ってた気がしたものがあつた。

(ついに本気になったってわけか。じゃあ危ないな)

「ごめんけどさ、皆だけで先に行ってくれない? ちょっと外せない用事が出来て」

悠斗はそう言って6人から離れた。世羅は気づいた様子だったが、問題ないだろう

そして悠斗は突き刺さるような3百の視線のもとに向かう。

「日向悠斗、用件はわかってるな?」

「毎日襲われてたら、イヤでもわかるだろ。なのは達に近いくな、だろ?」

「「「「「その、通りだあああああああ!?!?!?!?!」」」」」

やかましいことこの上ない大きさで言われ、男子は襲ってくる。

(バレない程度に『メシア』を使うか？ いや、『メシア』がバレないって絶対ないな。しょうがない、素手でやるか)

その日の昼休み、いつもどおり屋上にオレ、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、世羅が集まった。

「そついえばさ、朝は見かけた男子がお昼にはほとんど見なかったんだけど、何か知ってる？」

「全然。フェイトちゃんは？」

「わたしもだよ。ほんとにどこ行ったんだらうね？」

アリサの質問になのはとフェイトがそう答える。

(よかったな、男子ども。大怪我を負った姿なんて見られなくて)

「お兄ちゃん、どこにやったの？」

悠斗が男子たちに同情していると世羅が念話で話しかけてきた。

「保健室送りでとどめた」

「じゃあ殺しはしてないんだ」

「殺して、お前ほど危険人物になった覚えはないよ」

念話でそう返すと世羅は脹れて悠斗に抱きついた。

「世羅、あんたいきなり何やってんの!!?」

「そっだよ、世羅ちゃん。離れて」

「悠斗君、あとでOHANA SHIよっか」

「ちよっと待てええ!」

「待つわけないやんか」

「わたしもOHANA SHIに参加する!」

アリサ、すずか、なのは、悠斗、はやて、フェイトの順にそう言った。

世羅がにこやかな笑顔で悠斗から離れていく。その笑顔に悠斗は行動の意味を悟った。

(コレが狙いかあああ!!!)

悠斗は世羅が離れた直後になのはとフェイトの手によって O H  
A N A S H I I された。

(お兄ちゃんに抱きつけたし、ひどいこと言った罰も与えられたし、大満足だよ)

世羅がそんなことを考えているなんて誰も知る由は無い。

オハナシされて復活したあと、変な男について話題を振る。

「そういえばさ、昨日の放課後からなのは達をストーカーしている男が居たぞ」

「何で捕まえないのよ!!!」

「だってさ、何気に強そうだったし、魔力がどうのこうので頭が逝ってそうだったし」

アリサの反撃にさらりと返してなのは達に警告しておく。

悠斗は流し目でなのは、フェイト、はやての3人を見る。3人は深刻そうに顔をうつむかせていた。

(それに、この話をしたら世羅が一番食い付きそうだしな)

悠斗の目論見どおり世羅の瞳には殺意の色が伺えた。

(さて、『スノー・ホワイト氷結の媛』からどうやって逃げられるか。見物だな)

不穏なことを考えているとさすがに切り出した。

「じゃあ今日も、悠斗くんの家に遊びに行く？」

「……今日は出かけたところがあるからやめる」

悠斗の予想どおりに世羅はそう言った。

「さすが、今日ってわたし達ってバイオリンの塾なかった？」

「あつ、そういえばあつたね、塾」

アリサがそう聞いてさすがが思い出したように言った。

というわけでアリサとすすかも消えることになった。

その時、ちょうどいいタイミングで予鈴が鳴り、皆消えるように移動した。

だけど、悠斗だけははやてを呼び止めたまま動かなかった。

「悠斗くん、これ以上居たら授業に遅れてしまつて」

「すぐに済むからいいよ。」

もし、自分たちに付き纏うストーカーを自分たちで退治したかったら自然公園に行くといい。あそこは人目に付かないからストーカーも姿を現すだろ」

「なんで、それをウチに？」

「なんとなくだが、お前が一番危なくなりそうだったから、だ。話はコレで終わりだ。もう行こうぜ。ホントに遅れちまつ」

悠斗はそう言ってはやての手を握り走った。

その後、はやてが念話で悠斗が言ったことを伝えたらしく、なのはとフェイトの顔には戦う意思がありありと見えた。

だから、悠斗も用事があったことを思い出したフリをして3人だけにさせた。

3人は悠斗が言ったとおりに自然公園に来ていた。

「じゃあいくよ。レイジンググハートエクセリオン」

『Yes, My Master』

「バルディッシュユアサルト」

『Yes, Sir』

「リインフォース」

『はいです、はやてちゃん!』

「セーット、アープ」

3人は自分の愛機にそう言い、服装がバリアジャケットに変わった。

「もう出てきていいですよ」

「ウチらが目的何やる？」

なのはとはやてがそう言つと男が出てきた。

男は黒服に大槍とありえない装備をしていた。

「昨日の餓鬼の差し金か。まあ、この状況なら誰にも文句は言われんだろ」

男はそう言つて大槍を構え、なのはに向かって突く！

「なっ！！ レイジングハート」

『protection』

「お前の相手はこつちだ！！」

「相手にすらなんねえよ!!」

なのはの前に防御魔法が張られるが、またたくまにプロテクションにヒビが入っていく。

とっさにフェイトが男の背後を取るが、男は槍を突きながら回し蹴りの要領でフェイトを蹴る。

「フェイトちゃん!!」

『master!!』

なのはが叫んだ直後にプロテクションが破られ、大槍がなのはに直撃した。

「なのはちゃん!!! フェイトちゃん!!! こっの、穿て、ブラッディダガー」

はやては真紅のダガーを何十本と男に向かって放つ。

だが、男は消えるように移動して、はやてが放った真紅のダガーは男が消えたせいで目標を失い、当たらなかつた。

はやてはすぐに男の居場所を捜す。

「どこ行った!？」

「上だ、カスめ」

男は大槍を大きく振りかぶってはやてに向かって振り下ろす。

はやては強い衝撃から意識が朦朧とした。

「全員一撃か。呆気ねえ、もっと強いやつは居ないのか？  
まあいい。とりあえず、リンカーコアを奪って退散するか」

男はそう言い、3人の胸から強い光を放つ珠を出させた。  
そして男は魔力を奪う



作者「プビイイイイイイイイツ!」

悠斗「史上初だよ、この馬鹿にこんなに殺意が湧いたのは」

### 第3話 危険な世羅の氷

はずだったが、いきなりリンカーコアが消えて奪えなかった。

不意打ちで白いダガーが男を襲ってきたので男はリンカーコアを奪うことを中断し、避けた。

「誰だ!???」

男はそう叫び、辺りを回す。

そして、いつの間にかフェイトとはやてを背負って、なのはの所に来ている白髪の男を見つけた。

「……………あなたは……………だれ……………?……………」

「あまり喋らないほうがいい。……………ダメージがひどいようだな。シンフォニー、ユニゾンアウトして回復を頼めるか?」

『分かりました。……………いえ、前言を撤回します。鬼が来たので自らやったほうがいいでしょう』

「鬼？……納得」

白髪の男、つまりシンフォニーとユニゾンした悠斗は気配で鬼の居場所を知り、なのは達に回復魔法をかける。

「おら、邪魔してんじゃねえぞ！！ お前のリンカーコアも奪ってやる」

男はキレて悠斗に襲いかかろうとしたが、止められた。

「……その前に殺つてあげる。氷結の媛」  
スノーホワイト

悠斗たちの言う鬼、世羅が男を一瞬で氷付けにした。

と思つたら氷の中には何もなかった。

「天災型の希少技能か。レアスキル初めて見たが、デタラメ過ぎるだろ」

男はかなり離れた場所に居ながら呟く。氷を避け切れなかったのか腕が凍っている。

(クソがア、天災型がいるなんて予想外すぎる。しかも、補助であんな範囲なんて、まさしく天災だな)

世羅が放った氷の息吹は自然公園を軽く呑み込み公園外にまで効果を及ぼした。最早避けられたことが奇跡に近かった。悠斗はアイシクルシールドを10層張って効果から逃れた。

「……じゃあ今度はもっと範囲を広げて」

「次は流石に避けきれない。さっさと逃げるに限る」

「男はそう言っただけで逃げようとする。」

「……逃がすと思う?」

世羅は逃がす気がないようにどこかで拾った枝にスノーホワイトを纏わせ、男に向かって飛んだ。

男は大槍で枝を受け止める。が、纏っている氷に触れて大槍が凍り、砕けた。同時に世羅の持つ枝も砕ける。

「お前の希少<sup>レアスキル</sup>技能は凍らせること。それと同時に耐久度を土くれ並みにすることか。クロスレンジは危険だな」

「安心して。デバイスを失ったら遠距離なんてまともに使えないから」

「この槍はデバイスじゃないぜ。『ギャラル』」

男はそう言っただけからか槍を出し、世羅に向ける。そしてさらにもう一本やりを取り出し、

「だが、コイツだけじゃあ心許無いからな。『ホルニカ』も出してやる。」

見せる、お前らの真の姿、デバイス融合『ギャラホルン』」

同じ槍のデバイス同士を融合させた。男の言う真の姿とはDNAみたいに2本の細い棒が螺旋を描いて間に更に細い棒が数百本ぐらいで刃のある場所が唯一槍の形になっていた。

「『バウフアング』」

ギャラホルンから黒い輝きを放つ光が飛び、世羅に向かっていく。

世羅は宙に氷の槍を4本作って思いつ切り投げた。

黒い光は氷の槍とぶつかる、と思ったが黒い光は氷の槍をすり抜け、世羅に飛んでいく。

「くっ!!!」

世羅は相殺されると油断していたせいで反応が遅れ、黒い光の直撃を受けた。

男は普通に避けている。

「残念だったな。バウフアングは透過能力を持ってんだよ。希少技能持ちだし、リンカーコアも大きいんだろうな」

男はそう言ってなぜか体が動かない世羅からもリンカーコアを奪おうとする。が、途中でその手を止めた。

「そういえば、もう一人いたんだよな。ここは引き上げる」

「多分、これが世羅を殺す最後の機会になるのか？」

悠斗はゆっくりと歩き、おどけたように男に聞く。

ちなみに3人の怪我は完治させて悠斗の後ろに立っている。

「そんなことをしようとした瞬間、お前がこの罠を使って攻撃し始めるだろ。」

生憎、絶対に勝てない戦いには手を出さない主義なんだ」

「それなりに隠蔽工作はしてたんだけどな。勘が鋭いのか」

「だろうな。オレの名はコルギア。次会った時にお前を殺す者の名だ」

「そうか。嫌がらせ程度に覚えておくよ」

悠斗はそう返してコルギアを見逃した。

コルギアが逃げてしばらく経つとはやてが口を開いた。

「何で逃がしたん!？」

「世羅が自分の手でやりたいだろうし、今から世羅を相手にすんのにあんま疲れたくない」

「「「はあ???'」」」

悠斗は意味不明なことを言っではやてに返した。その答えになのはとフェイトも首をかしげる。

その瞬間に氷がなのは達を襲いかけた。

### 第3話 危険な世羅の氷（後書き）

悠斗「なんで敵がまだ残ってたんだ？」

作者「やったな〜！！ちよ〜と考えると誰が氷を放ったのかなんてすぐにわかるじゃん」

世羅「私がやったよ。一撃で息の根を止めるつもりで」

作者「そこー、ネタばれしない。「冗談で区切ったのに」

悠斗「冗談でなのは達が死にかけるのもか？」

作者「おうさっ！！！！」

悠斗「いつペン死んでこいつ!!」『蒼雷一閃・徒桜』」

作者「ウイイイイイイイツ!!!」

世羅「次回、『第4章 最悪な兄妹喧嘩』  
take off  
今度は私に殺らせて」

#### 第4話 最悪な兄妹喧嘩（前書き）

すみません。一章はやめて話にします

#### 第4話 最悪な兄妹喧嘩

「シンフォニー、アイシクルシールド」

直撃を受けなかったのはまたしても悠斗のアイシクルシールドに守られたから。

「……お兄ちゃん、そこを退いて」

「退いた瞬間になのは達を殺すからヤダ」

「…お兄ちゃん、退いて」

「ヤダ」

「退いて」

「だからヤダだったって、危な!!!!!!」

悠斗は言ってる最中に飛んできた氷を避ける。

悠斗は世羅を一瞥して、意思が変らなさそうだった事に落胆した。

「殺す気満々そうさ。仕方ない。シンフォニー、『テンペスタターン』のあとに『ブレスダガー』を」

『はいはい』

悠斗はテンペスターンで一瞬にして世羅の背後に回り、白く小さなダガーを数本当てようとした。非殺傷設定中だからダメージはあっても怪我はない。

世羅は全身に氷を纏わせてブレスダガーを防ぎ、纏っていた氷を四散させて悠斗を攻撃する。

「アイシクルシールドがなかったら直撃だな」

悠斗はボルテッカーで世羅から離れ、氷結封じの楯で四散した氷を防ぐ。

余裕の態度を崩さない悠斗に世羅は猛攻を開始する。

世羅は悠斗の周りも巻き込んで氷結させようとしたが、悠斗はテンペスターンで世羅の背後を取り氷らせるのを封じる。ついでとばかりにブレスダガーを48本創造して全部世羅に向かって飛ばす。

世羅はまた氷の鎧を纏い、ブレスダガーの直撃を防いだが、ブレスダガーは困だったらしく悠斗は砲撃を放つ。

「ダークバスターツ!!!!」

ブレスダガーに気をとられて世羅はダークバスターの直撃を受ける。

ダークバスターの直撃を受けた世羅は爆煙に包まれながら落下していくが、悠斗は世羅の強さを知っているから追い討ちをかける。

「ブラックハーケン。世羅を狙って」

左腕を振って黒いブーメランを4つ飛ばし、世羅に向かわせる。

世羅は悠斗が近付いてこないと分かるとすぐに体勢を立て直しブラックハーケンを氷付けにする。そして完全に氷付けにしたらまた砕いて今度はスノーホワイトの力をフルに使って氷の破片全部を悠斗に向けて飛ばす。

「これはちょっとマズイか。シンフォニー、ダークスファイアプロテクション」

スファイアプロテクションの強度を上昇させた防御壁を展開し、氷を受け止める。

ダークスファイアプロテクションは世羅の氷をよく防いでいたが、いかんせん出力が違いすぎた。

ダークスファイアプロテクションはあくまで人間の力で、スノーホ  
ワイトはその惑星の力。範囲も及ぼす効果もスノーホワイトの方が  
はるかに上だった。

黒い球体の障壁に段々とヒビが入っていき、

バリイイイン！！

ついにダークスファイアプロテクションが壊れ、氷が障壁の中を襲  
う。

「いくらお兄ちゃんでも、これで気絶したよね」

世羅は死んでる可能性を一切考慮せず、追い討ち用に巨大な氷塊  
を悠斗がいた場所の頭上に作るが、

「ッ！！！！！！」

ヒュンッ！

不意に感じた危険から氷塊の制御を離し、頭を下げる。世羅が頭  
を下げたのは正解らしく、首を狙って何かが通り過ぎた。

世羅が頭を下げながら通り過ぎたものを見ると誰かの手刀だった。

世羅は誰かが一瞬で分かかってとっさにその場所から離れた。

「おっしい！ あとちょっとのところで気付かれた」

手刀を放った張本人の悠斗は軽く地団太を踏むが、すぐに気を取り直して世羅の方を向く。

悠斗は無傷で立っているので世羅は若干いぶかしみ、つぶやく。

「逃げ場を作ったつもりはなかったんだけど」

「おう。逃げ場がなかったから転移魔法で抜け出したよ」

悠斗の余裕そうな言葉に世羅は時間を掛けた失敗を悔やみ、後ろに下がる。

（世羅のやつ、何考えてんだ？）

遠距離攻撃が避けられると示した今、距離をとるのは意味が分からない。

（大規模と遠距離砲撃なんてゼルダを使わない世羅に出来るはずないし。……………大規模？）

その瞬間悠斗は世羅が何をしようとしているのか理解して血の気が引いた。

悠斗はなのは達の元に行って防御をするか、世羅の元に行って発動を止めさせるか迷ったが、周囲の状態を考えて止めさせる方に行った。

「シンフォニー、ボルテッカーズ!!!」

『了解!!! 1秒間だけですよ!!!』

「言われなくても分かってる!」

シンフォニーの言葉に悠斗はそう返したあと世羅の元へ走る。ちよちよちよち

ボルテッカーはオレの最強最悪の移動魔法。空間跳躍みたいに長距離を瞬く間に移動し、障害物を通り抜け、走るように何時間でも維持できる。なぜか最初の一撃に補助魔法破壊能力がついているから連携攻撃や複数のバリアを一気に破壊したいときに重宝できる。ただ、使用時間に比例して内臓にひどい負担を掛けるのであまり多用したくない。

一瞬で世羅の元に移動して、

(やっぱりなのはごと凍らすつもりだったか)

世羅がやるうとしていた空間氷結の術式を補助魔法破壊能力で破壊する。ついでに拳が世羅に直撃したが、お仕置きだと考えていいだろう。

一発とはいえ、光速で繰り出された一撃はかなり堪えたらしくうつ伏せでうずくまっている。

(さて、もう立つのはやめてほしいな。もう一回世羅を殴るのは良心的にかなり痛いし)

悠斗のそんな思いを裏切ってしばらくしたら世羅はフラフラしながら立ち上がる。ただ、まだ痛いのか殴られた場所を手で押さええている。

「いい加減諦める。なのは達が殺したわけじゃないだろ」

悠斗は小さい感情にとらわれた復讐を止めさせようとするが世羅はやめる気がないようになのは達がいる方向をにらみつける。

(やっぱり、力づくじゃないとダメか?)

悠斗の思いに応えるように世羅は強い信念を持って返した。

「たとえ殺してなくても、いつかは人を殺す。それが魔法だよ!!!」  
『悠久なる凍土 凍てつく枢の地にて 永遠とわへの静寂を与える

そが答えるは昇らぬ太陽の静の世界　いと小さき雫は眠れる大地の  
果てで大いなる結晶へ変わり　静寂を破るものに永遠の眠りを与え  
よう

『コキュートス・ゼロ・フォール』

世羅はスノーホワイトを使いながら氷結魔法に氷結魔法を重ね、  
大きな氷結魔法を使う。

(これは、簡単に防げそうもないし、相殺させるしかないか)

そう思って悠斗も自分の稀少技能を使おうとした。

だが横やりで放たれた魔法が世羅の魔法とぶつかり合う。

「史上最強のユニゾンデバイス、カノンの力をなめるんじゃない！  
！！」

『グラビティ・バベル』 『クエイカーズ・ゲヘナ』 『ドラゴンズ  
ロア』

なのは達の救助に入る前に呼んでおいたカノンが詠唱を完了させ  
た魔法を放ってコキュートス・ゼロ・フォールにぶつけたのだ。

『グラビティ・バベル』で範囲が広がらないように強力な重力界  
を発生させ、地割れができて穴から地獄の炎が現れ凍てつく空気と  
氷を壊し、ドラゴンを形どった空気の塊が氷を粉々に噛み砕き爆発

する。

予想できなかった援軍に世羅は目を丸くしたが、悠斗はコレ以上ない隙だと思いコンチエルトを剣に変えて、

「蒼雷一閃ッ！！！」

得意の斬撃を放つ。

油断していた世羅は蒼雷一閃の直撃を受け、意識を手放した。

悠斗は生きてることと気を失ってることを確認して世羅をおんぶする。

「さて。聞きたいことがあるだろうから家に来るか？」

事態の展開の速さについていけないだろうから3人にそう聞いてみた。

3人は戸惑いながら頷いて悠斗の後を着いて行く。

ちなみに世羅が凍らした大地はカノンの『クエイカースゲヘナ』の熱気を受けて融けました。

「まずひとつ聞いていい？」

悠斗は自分の家に到着して世羅に手錠を嵌めているとフェイトに聞かれた。

「勝手に」

「なら、何で着いた場所が悠斗の家？」

「……………まだ気付いてなかったのかよ。シンフォニー、ユニゾンアウトしてくれ」  
『了解です』

悠斗はそう言ってシンフォニーとのユニゾンを解除した。白髪は灰色に戻り、瞳も元の色に戻った。

そして近くには肌が色黒い水色の髪のユニゾンデバイスがいる。

ユニゾンが解けた姿になのは達は驚いた顔をして、はやてが最初に口を開いた。

「悠斗君が助けてくれたんか！！」

「追い詰めた、と言った方が正しいかも。リンカーコアが奪われる直前まで静観してたし」

「結果的に助けしてくれたからそこは置いといて、魔法って使えたの？」

「ああ。両親が一線を退いても魔導師だったから世羅もオレも魔法を使えるよ。」

どうせだし、シンフォニー、2人掛かりでバインドかけよっか」

『了解です』

悠斗は答えてる最中にシンフォニーに話しかけ、シンフォニーと同時に世羅にバインドをかけた。ついでにとばかりにクリスタルゲージとリストロック、

自分の妹に向かっての嚴重さになのは達は軽くヒイた。そして、フェイトが代表して悠斗に聞く。

「えっと、何でそこまで強く縛り付けてるの？」

「スノーホワイトの威力がどれくらいあるのか分からないから。もし解けたらなのは達が死ぬしな」

「そつえばさつきもウチらを殺そうとしてたな。なんでなん？」

悠斗の言葉やセラの行動が分からなくて、はやてが聞いてくる。

(面倒だし、アリサやすずかも魔法を知ってたな。じゃあまた今度にするか)

悠斗はそう考えてなのはに引き延ばしを頼む。

「アリサ達にも話しておきたいし、明日でいいか？  
この話は、オレ達の過去に係わってるから」

「分かった。絶対明日だよ」

「明日までに世羅が暴れない程度に治まったら話す」

悠斗はそう言い逃れ、はやてが次に聞く。

「あのコルギアって男や悠斗くんの言葉に上るスノーホワイトって何？」

「世羅の持つ稀少技能<sup>レアスキル</sup>。補助機能がさっきの一定範囲の氷結、そして氷結した対象の耐久度を0にする。攻撃機能としては持った物に氷結能力を与えるってとこ。枝に氷を纏わせたのがこの例。

あとは、天災型共通の能力として回り込みが強力で球体か半球体じゃないと直撃と同じダメージを負うってこと」

「まさしく天災なんやね」

は yet は呆れた目で世羅を見ると世羅がもぞもぞと動き、起き上がろうとしていた。

「んっ、おはよ。……………殺す！　って嚴重に縛られてる……！  
お兄ちゃん、解いて」

世羅は寝ぼけた状態だったが、途中で覚醒して縛られていることに気付いた。

その様子になのはとフェイトが深いため息をついた。

「この状態じゃ、明日も聞けそうにないかな？」

(返す言葉もなさ過ぎる)

悠斗も心の中で深いため息をついた。

「じゃあまた明日ここに来るね。その時はアリサとすすかも連れて来る」

「助かる。じゃあ家まで送ろうか？」

「ええで。悠斗くんは世羅ちゃんの方に集中してて」

「別にかまわない。縛るだけならシンフォニーだけでも出来るし、

「コルギアにやられた怪我の経過も知っておきたいし」

「せやけど体に何も異常なんてあらへんし、ひとりで居たいし」

「そっか。それに世羅が相手ならひとりじゃ厳しいかもな。ワガママ言っ**て**悪かった」

はやての言葉に悠斗は前言を翻して世羅の元に駆けて行く。

(今回は、相手が強かった。なのは達にとって悔しい敗北なんだろうな。オレでも勝てたかどうか)

(もっと守る力があつたら、わたしはあの人を足止めできた。もっと練習しておけば)

(あの人の動きはわたしに追いついたんじゃないなくて、わたしの動きを予想してた動きだった。もっと多彩に攻めれるようになっておけば)

(なのはちゃんのシールドが壊れ始めたときからかなり動揺して、動くタイミングを間違えてた。しかもブラッディダガーまで外して)

悠斗、なのは、フェイト、はやては心の中で反省をする。そして、同時にあることを思った。

(( (強く、なりたい! )) ))

4人の長い夜はそれぞれの道を巡り、更けていく。

#### 第4話 最悪な兄妹喧嘩（後書き）

悠斗「何気にオレ凄い移動魔法使ってるな」

作者「一応破り方はあるけど破らせる気は一切ない」

世羅「ちなみに破り方は？」

作者「光（魔力除く）や電気なんかの光速で飛ぶ存在に関しては通り抜けることができない、通り抜けてる最中に反撃を食らったら空間の狭間に飛ばされて即死。

この程度かな？ああ、あと本編に書いたとおり体の負担の問題があるから持久力も弱点か」

悠斗「2つ目の弱点がなんか怖い。どうにかならんのか？」

作者「なりません！！ まあ反撃できるのは1つ目の弱点のみだから安心していいよ」

悠斗「じゃあいいか。反撃できそうなのはフェイトだけって事みた  
いだし」

作者「ザツツライツ！！にしても後書き飽きたから…」

悠斗「外道作者は沈んでやがれ！！！」

ぐふおおおお！！！！

作者「い、良いパンチだった、ぜ（ガクッ）」

悠斗「まったく、まだ今回使った魔法が残ってるだろ。飽きたならオレが説明するよ」

グラビティオブバベル

強力な重力球を発生させ、何でもかんでも巻き込んで押しつぶす魔法。

威力と範囲が常軌を逸してるから広域空間殲滅魔法に登録させている。ちなみに巻き込まれたら防ぐ方法はない。

クエイカーズゲヘナ

地面にヒビを入れて、炎を吹き出させる。業炎ゲヘナの名の如くかなりの高温で鉄も触れただけでドロドロに溶ける。

ただし、地上40メートル以内じゃないと当たらない

ドラゴンズロア

大気を高密度に圧縮して竜の形を作り、相手にぶつける。対象に噛あたってみつけたら圧縮が解かれてその影響で圧縮された大気が飛び散る。

誘導性も高く、発射速度も速いから逃げることは難しい。

悠斗「こんなものか。それじゃ予告に行くか。」

次回『第5話 血塗られた追想』 陰惨な過去をバネにして

take off

## 第5話 血塗られた追想（前書き）

玄武の使者様、僕のお願いを受け入れてくださってありがとうございます。

かなりハチャメチャ状態で使うことになりそうですけどよろしくお願ひします

## 第5話 血塗られた追想

翌日、悠斗と世羅は学校を休み、なのは達が悠斗の家に向かうことになった。

当然塾もないアリサとすずかも一緒だ。

「ほとんど教えようとしなかった悠斗達の過去か。知らないのにちよつとだけ怖いわ」

「私怨が色々混ざった人殺しの過去だぞ。怖いことなんてほとんどない」

悠斗はそう言いながらなのは達の前にお茶を置く。世羅は未だに縛られている。訂正。昨日より猿轡と亀甲縛りが追加されていた。

「世羅に関しては気にしないでくれ。なのは達が帰った後にでも解放するから」

悠斗はなのは達が真っ先に聞きそうなることを前もって言うておいておく。

アリサとすずかは世羅の状態に絶句し、なのはとフェイトとはやては落胆した。

( そんなにわたし達って信用してなかったんだ。 )

フェイトの考えていることが悠斗には分かったのか、無理やり本題を切り出す。

「さて、と。グダグダ引き延ばしてもしょうがないし、さっさと言うか。

アレは11年ぐらい前か。……………」

悠斗はいつもどおり魔法の練習をしていた。

昔は悠斗も魔法が好きだったので、ほったらかしておけば3日くらい食事を取らず、眠らずで魔法の練習をした。

そんな事が何十回とあってから両親も見兼ねて悠斗を外に連れ出そうとした。

「悠斗、今度の休みは遊園地に行こう!」

「え〜。スキーに行ってみたいよ」

悠斗の父親・鉢康はちちやすが言ってきたけど、悠斗は遊園地に飽きていて前にスキー行きたいなという言葉を出してそう言ってみた。

「スキーか。よく知ってな。でも初めてじゃないか。お前がわがママを言うなんて。いっつもこっちが勝手に決めていやな顔せずに着いて来るのに」

「もしかしてダメだった？」

「いや、まさか。じゃ、今度の休みに行こう。その時は」

「人目があるから魔法の練習は禁止、でしょ。分かってるよ」

そんな事があつて悠斗の初めてのわがママは徹り、スキーに行くことになった。

そして、2泊3日のスキー旅行当日  
シンフォニーも子供サイズになってスキーをする。この時にはまだカノンはいなかった。

「まったく、子供は元気があつていいな。悠斗の初めてのワガママだったけど、また来させたいと思えてくる」

鉢康は初めてにもかかわらず、かなり飛ばして滑る悠斗を微笑ましく見ながら小さくつぶやく。

世羅と一緒に滑っている悠斗の母親・椛<sup>もみじ</sup>も悠斗を楽しげに見てい

る。

「お母さん！ お兄ちゃんばかり見ないですよ！！」

世羅は椛が生きてた時はまだ明るく、よく悠斗に嫉妬する性格だった。だからこそ、ちょっとだけ悠斗を嫌う傾向があった。椛は「はいはい」と言って世羅を宥め、スキーを教える。

世羅も初めてスキーをしたので上手に滑れてない。でも、たまにわざと転んで椛に心配をかけ、抱きついたりしている

椛も鉢康もそんなことは承知だが、幼い子供だからと悠斗の自立心も相まって容認していた。

「悠斗みたいに自立心が強いのもどうかと思うが、世羅みたいに依存心が強いのもどうかと思うな。足して2で割ったら丁度いいのに」

世羅が椛に甘える姿を見て鉢康はそうつぶやいた。

悠斗にとってその光景は日常。だから絵に描きとめようとも思わなかったし、自分の気持ちを歌に乗せようとも思わなかった。

辺りが暗くなったので悠斗もホテルに戻った。スキー場から車で30分くらい掛かるところにあるのでログハウスではない。

このホテルは一風変わったホテルらしくて、各部屋にキッチン・

調理道具・冷蔵庫・洗濯機が付いている。夕食はホテルが出してくれるが、小腹が空いたりした時に自分が用意した材料で料理が出来るようにしてあるのだ。

悠斗は借りた14階の部屋で料理を教えてもらっていると不意に外の様子を気付いた。

「あつ、雪だ。ア痛っ!!！」

雪の様子を見ているといきなり拳骨が飛んできて、悠斗は頭を抱え、転げ回った。

「料理中に気を逸らすんじゃない!! 一瞬の迷いが料理の味を台無しにしたりするんだからね!!！」

オーバーすぎる表現だが、言ってることはまあ正しいので悠斗は何も言わず料理に目を戻す。

椀の職業は高級レストランのシェフ（料理する人の一番偉い地位）で料理にはかなり厳しい。だから悠斗は経験者の言うことをよく聴いた。

悠斗は視線をフライパンのほうに戻し、料理に集中する。

「そついえば世羅と父さんおわっ!!！」

悠斗は無意識に2人の姿が見えなかったことを聞いて、椀に拳骨

を食らった。

「だから料理中に気を逸らすんじゃない!! 世羅はキッズルームで遊ばせてる。父さんはコーヒーを買いに行ってたわ」

「ふーん。あつ、音が変わった。そろそろ丁度いいかな」

「そうね。ここまで上手になるなんて。教えた甲斐があったわ。」

「それはありがとうございます。っと、コレで完成かな?」

悠斗が聞くと椀は頷く。そしてちょうどいいタイミングで鉢康も帰って来た。

「父さん、お帰り〜 料理はもう出来たよ」

「世羅を拾ってから食べましょうか」

「シンフォニー、ユニゾンするから起きて」

「はふうう。 まだ眠いですうう。 ユニゾンイ〜ン」

シンフォニーは寝ぼけた状態で悠斗とユニゾンした。ついでに眠気が移ったのか悠斗まで大きなあくびをする。

そして、世羅の元に向かおうと扉を開けると扉の前には一人の男がいた。

鉢康と椀が不審な目を向けていると男が自己紹介する。

「日向鉢康とモミジ・ランスターだNA。俺の名はアストン・マーティン。盗賊団『シャードキャスター』の一人DA」

ランスターは椀の旧姓で、椀は知ってることに驚いて記憶の中から『シャードキャスター』の名前を探した。

「シャードキャスター？ あなた、聞いたことある？」

「ない。だが盗賊団なら倒したほうがいいだろ」

椀の言葉を肯定するように鉢康は言い、2人ともデバイスを構えた。ついでに悠斗もコンチエルトを構える。

「待てよ。まずはフィールドを作らせてもらおうZE」

アストンはそう言って牧草を掴むフォークみたいなデバイスを取り出し、床に突き刺す。

誰もがこの様子を不思議に思っているといきなり床が崩れ落ちた。

「他の人間は邪魔なんで消えてもらおうZE」

アストンはフォークを器用に使って他の場所も壊していく。

「あいつ!! 椛は僕と一緒にあいつをぶん殴ろう。悪いが悠斗は一人で他の人を助けてくれないか?」

「了解!! / 分かった」

鉢康は二人のそう指示を出してアストンの元に向かって飛んでいく。椛も鉢康の後を追って飛んでいく。

悠斗は崩れていくホテルの中に潜って上から要救助者を求めて飛んで行った。

そして、上空では

「こんな事をする目的は何だ!?!??」

「魔力をチマチマかけて集めるのは性に合わな過ぎRU。だから、強力な魔導師を殺して魔力を奪うんだYO」

「そんな事の為だけにこのホテルを破壊して、民間人の命を奪おうと言っのか!?!」

「この計画は俺が戦いを楽しめる利点もあるZE」

「それこそふざけるな!?! 戦いを楽しみたいなら仲間にも喧嘩を吹っかければいいだろう!?! そんなことに余計な危険を持

ち込むな!!!」

鉢康とアストンはそう言い合いながら打ち合っていく。

互いにかんりの実力者で椀が手を出せる隙がほとんどない。それでも、押されているのは鉢康だったから救助にも回れなかった。

そして1時間も戦い続け、互いに疲労の色が見え、ついに決定打が鉢康に入った。

鉢康の一撃は空を切り、アストンの持つフォークの先端が鉢康の体を貫いていた。

アストンをすぐにフォークを抜いて止めを刺そうとする。

「十分楽しめたZ E。これで終わりD A!!!!!!」

アストンはフォークを大きく振りかぶった。

「ダメエエエエエエエエエエツ!!!!!!」

ブシュッ

だが、椀が2人の間に体を挟み込み、フォークは鉢康の体ではなく、椀の体を貫く。

「モミジイイイイイイイイツ!!!!!!」

鉢康は椀の体に駆け寄り、椀を受け止めようとする。だが、別の魔法が動きを封じた。

『スプレッドショット』

光の拡散弾がアストンに直撃し、鉢康と同じぐらいのダメージを与える。

問題はほとんど魔導師がいない異世界でスプレッドショットを使える人がいるのかだった。

鉢康は無意識に飛んできた方向を見ると元気な姿の椀がいた。

「えっ、じゃあこっちは」

「僕が変身魔法で化けてたんだよ。幻影も加えてたから迫真の演技だったでしょ」

そう言って椀の姿が解け、悠斗に変わった。

「悠斗、コレ終わったら O S I O K I ね」

椀はそう言いながら鉢康の元に来る。

「せっかく世羅にバレない様に援護しに来たのにアンマリだよ」

「そうだぞ。君が頼んだんじゃないのか？」

鉢康がそう言って悠斗の援護をするが、

「頼んでないわ。悠斗が勝手にやったのよ。わたしは流れ上、参加せざるを得なかっただけ」

「それなら悠斗が悪い。変身魔法で人に化けるなって前から言ってたもんな」

椀の言葉に前言を翻して悠斗に O S I O K I することになった。

「くそガキがつ!!! 今すぐ邪魔できないように殺してやるYO。エス、パイク、『デバイス融合』と『フォルダウン』だ」

アストンはそう言って突撃槍も出して二つの武器を融合させる。出てきたのは3又の突撃槍と異形の怪物。

怪物はアストンの体に取り込まれ、アストンの姿が変わり始める。

「何、アレ？」

悠斗は目の前の光景を信じられず、無意識につぶやいた。  
どうやら鉢康と椀も同じらしい。

アストンだったものは鋭い牙と爪を持ち、曲がった角、黒い巨体を持つ存在。口の中からは炎が揺らめいていた。

もう、バフオメットとしか言いようがない存在だった。

「俺にこの姿をとらせたんだ。代償を払ってもらおうZE!!!!!!」

アストンだったものはそう言って口から炎を吐く。

鉢康達はその炎を簡単に避けたが、炎はホテルに直撃してホテルが炎に包まれた。

その光景に鉢康は息を呑み、悠斗に命令する。

「悠斗、お前はもう下に降りろ!!! ここにいたって出来ることなんて何もない!!! それより、逃げ遅れた人を助けに、世羅をこの危険から遠ざけてくれ!!!!!!!!!!」

鉢康の言葉に悠斗は泣きながら下に降りていく。

自分の無力さに、幼さに、スキー旅行なんて提案したことに、すべての後悔に押しつぶされながら降りていく。

途中で頬に液体が掛かる感覚がした。悠斗がその液体に触つてみると、赤黒く、錆びた鉄の臭い。

悠斗がいやな考えとともに上を向くと、

「あっ、あっ、あっ、あっ、うああああああああ」

首と体がバラバラに落ちてくる椀の姿があった。

悠斗はもう、何も考えずに地面に向かう。

降りたあとは何食わぬ顔で世羅の元に歩き、世羅まで死地に行かないように作り笑いを浮かべ、知らないフリをして押さえた。

## 第5話 血塗られた追想（後書き）

なのは「世羅ちゃん、過去ときは明るい性格だ」

作者「元々こつちが本当の性格だから。今の性格がかなり歪んでるだけ」

悠斗「あんなになるまで歪むって、かなり依存してたんだな」

作者「と言っか、わざと転んで自分に注目させる時点でもかなり歪んでる。」

「どんな育て方したらこんな一人になるわけ？」

はやて「ウチみたいに悠斗君は一人が多くてこんな性格に、

逆に世羅ちゃんはベタベタと甘やかされて育ったんやない

？」

悠斗「あー、確かにそんなことがあったような気がしないでもないな」

世羅「いくらお兄ちゃん相手でも私だって怒る時は怒るんだからね」



## 第6話 取る道

「……………とまあ大体こんな経緯いきまつだ。  
ってなんで皆泣きそうなんだ？ 世羅はバインドが6個と猿轡いんずが  
壊されてるし」

「上空での経緯は聞いてなかった」

悠斗の言葉に世羅は額に何十個も怒りマークを浮かべて返す。

(そういえば、黙っていた方が魔法嫌いも軽度で済むかな？なんて  
思ってた言わなかったっけ？)

「もしかして、ケッコー怒っていらっしやいますか？」

悠斗はあまりの恐ろしさから敬語で自分の妹に聞く。

「もしかしなくても！！」

バチンッ！……………！！

ついに世羅が自分の力でバインドを壊したから解放され、悠斗の  
命がけの鬼ごっこが始まった。

「心の拠り所だった母親を魔法の力で殺された。確かにそれなら魔導師を殺したくなるのも分かる。わたしもそんな状況だったら、魔法を憎まずにはいられない」

「ウチは似たような思いを闇の書の防衛プログラムの時に経験してる」

フェイト、はやての順でそうつぶやき、重く受け止めた。

フェイトは魔法実験で姉を失い、母が壊れてしまった様子を思い出して。はやては偽者のなのはとフェイトに家族を殺された瞬間に家族を殺した魔法をにくいと思ってしまったことがあった。

なのはは2人の事件を知っているから二人がどんな気持ちで世羅に同情しているのか痛いほど分かる。

「それで魔法って単語を言うなって言ったんだね。嫌な記憶を思い出してしまうから」

「それもあるけど、世羅は魔力で出来た炎が母さん達を殺したとして教えてなかったから、魔導師を見つけたら誰であろうと殺しそうな雰囲気もあったからだよ。」

ちなみに初対面の時はなのは達の魔力に反応して殺意を持ってた」

世羅から逃げながら悠斗は言う。

5人は予想を飛び越えた事実に関く驚く。悠斗はその姿を悲しうな目で見ろ。

(やっぱこの話は重たすぎたかな?)

それでも、悠斗は言葉を続ける。

「そんな状態から始まつてるんだからもしバレたら本気で殺すかな、つて思つて魔法という単語を出すなつて言つたんだ」

「悠斗、あなたは魔法を憎いと思わなかつたの?」

どこからそう思つたのかフェイトがそう聞く。

悠斗はその疑問に自嘲的な笑みを浮かべ、自分の思つたことを言葉として紡ぎだす。

「憎い、と思つたことはないな。殺されたのは自分の無力さが理由だし、子供だけで生き抜くには魔法が必要だつたからな。」

オレは、殺した奴を憎いと思つことはあつても、魔法を憎いと思えなかつた。復讐さえできない、そんな半端モノなんだよ」

「そんな事ない!!!」

悠斗の言葉に涙を浮かべながらなのはが叫ぶよつに言つ。

「復讐なんて。そんなことしても誰も喜ばない！！　ただ悲しみが続くだけで誰も笑顔になつたりしない！！」

「だから、だから復讐なんてしない方がいいよ！！！！」

「理性では分かつてるよ。だけど、人間は本能的に復讐をしたがる生き物なんだ。」

「なのに、オレはその復讐が出来ないでいる。だから、半端モノなんだ」

まるで、自分が人間じゃない、と言っているように聞こえるほど、深い怨嗟と締め付けられた孤独を感じた。

（実際、父さん達が殺された数カ月は狂いたって思えても、狂うことなんて出来なかったしな。」

「それどころか、世羅を理由に今までのうのうと生き続けている。我ながら最低な人間だ）」

悠斗が思考の海に埋もれているとフェイトとすずかが慰めの言葉を言った。

「悠斗は半端モノなんかじゃないよ」

「そうだよ。両親を失って、ずっと苦しみ続けてきてたんでしょ。だったら復讐する相手が自分になつてから復讐したい気持ち薄れちゃつてるんだよ」

「そっか。ありがとな」

悠斗はちょっとだけ吹っ切れた様な優しい顔でフェイトとすずかに謝った。

そんな悠斗を見て、フェイトとすずかは顔を赤くした。

その時、悠斗はある意味忘れてはならない者を忘れていた。

グワシッ！

そんな音とともに悠斗の服が引っ張られ、世羅が余った手で悠斗の首を鷲掴みする。

「世羅、空気読んで……………ギブギブ。  
放して」

「放すと思っ？」

「かけらも思わない。なのは、助けて」

悠斗はなのはに助けを求めたが、なのはは目を逸らして見えないフリをした。

「うかつに手え出したらウチらが殺されそっやし」

「わたし達の分も頑張って受け止めて」

「裏切りモノオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!」

はやて、フェイトの言い草に悠斗は泣き叫びながら世羅の折檻を受けた。

その時に、なのは達が思ったこと。それは、見なかったことにしよう、だった。

「うううう、ちょっとだけ事実を捏造してただけなのにひどい目にあったよ」

「あの子の性格から考えたら隠された真実はかなり怒りたくなると思っわよ」

世羅の折檻から命辛々逃げてきた悠斗にアリサが鞭を打った。

「だってえ、言ったらアストンを殺しに行こうとして返り討ちに会

うのは簡単に想像できたんだもん」

「ぶりっ子しない!!!」

アリスが遊ぶように言った悠斗の頭を殴る。

その言葉にはやてがある提案を出した。

「じゃあさ、世羅ちゃんと悠斗くん、管理局に会いへん？ そこなら後ろ楯も出来るから返り討ちにはされにくくなるで」

「……やめておく」

「えー何で何で!?!」

「世羅の希少技能<sup>レアスキル</sup>って天災型だからさ、一歩間違えば管理世界だろうと壊せるんだよね。しかもあの日以来魔法なんて一回も使おうとしなかったから暴走する確率は高まってるだろうからね。

だから組織の属したら変なことに使われそうでオレが駄目だって言ってるんだよ」

(ついでに父さん達も元職場の管理局を嫌っていたし)

なのはが聞いてきたので世羅が断った理由を悠斗が話し始めた。

なのはは納得したように手をポンツとたたいた後、なぜか笑顔になって口を開いた。

「そしたらわたしが教えるよ。わたしは時空管理局 武装隊 戦技教官だから」

「希少技能の戦技教官なんて聞いたことないぞ。……………」

「……………もしかして、そっちの2人も時管？」

(いまさっき、時空、管理、局って言ったよな?)

悠斗は呆れるように言ったが、途中で紛れ込んでいた時空管理局の名に汗をたらたらと流しながらはやとフェイトに聞く。

「わたしは時空管理局 本局 執務官」

「ウチは時空管理局 特別捜査官や」

2人がそう言った瞬間、いきなり悠斗が意識を失ったように倒れた。

「ちよっ、何でいきなり倒れるん!!??」

「悠斗、しっかりして!!!!」

「……………気にしなくていい。オーバーに驚くのはお兄ちゃんのクセ」

はやてとフェイトが悠斗を受け止めるために駆け寄ろうとしたが、世羅が止めた。

悠斗は頭を打ち付けたが、何事もなかったように立ち上がって世羅に文句を言った。

「そりゃあ、自分でも大袈裟過ぎると思ったが、仕方ないだろ。やりにもよって時管にバレるなんて」

「なのはちゃん達がいる場所にバレると何が起こるの?」

さすがが聞いてきたのでフェイト達に説明してもらおうとそつちを向いたが、

(分かって無さそうだ。仕方ない自分で言っか)

悠斗は諦めてフェイトを恨めがましく見つつ、倒れた理由を言った。

「別に。何も起こらないよ。ただ、管理局に登録してないデバイスを使ってるから色々と問題があるんだよ。もともと禁止されている分、性質たちの悪い問題が、ね」

「あつ!!!!!!　　そういえばそうだったね」

悠斗の言葉にやっと思い出したのかフェイトが大きな声を出した後、恥ずかしそうにつぶやいた。

「執務官殿、そういうことを忘れてたらダメだよ。これ陸と空は関係ないんだから知らない人が多いし」

「あははは、ごめん。でも悠斗って念話も使えるんだね」

「使えなきゃ世羅を暴走直前に止めることなんて出来ないよ」

「結構苦勞してるんだね。クロノが提督だってことも教えないほうが良さそうだね」

「はっ!? あのシスコン2号が提督!?!?!?」

驚愕の事実から悠斗は念話していたことも忘れて叫ぶように言った。

一瞬で注目が悠斗に注がれたが、悠斗に気にしている暇はない。

「シスコン2号が提督って管理局のやつら頭おかしいんじゃない!?!」

「シスコン2号って確かクロノ君の事だったよね? 知らなかったの?」

なのはが知ってるものと思って聞いたが悠斗は否定の言葉を返した。

「知るわけないだろ。フェイトの家族はエイミー以外魔力があることは知っていたけどドコ所属のドレほど偉いのかとか。

海関係は冷酷さも求められるから絶対無理だろ。温和な性格のフェイトは特に」

「し、失礼だよ！！一応エースの自覚はあるんだから！！」

「って何で仕事内容まで知ってるの！？デバイスのことは親に聞いた、なら分かるけど執務官の仕事なんて聞く意味ほとんどないと思うよ！！」

「その話は脇に置いて、もしかしてフェイトのお母さんも管理職員？」

「そやで。リンディさんもクロノくんと同じ提督や」

悠斗はフェイトに聞いたはずだが、はやてが答えてくれた。

「殺しに「行くな！！」イタイ」

悠斗は出掛けようとした世羅の頭をたたいて世羅を制した。

(油断も隙もあったものじゃないな)

「しょうがない。時空管理局にハッキング……ダメだよ！！／止めてっ！！／すんなやっ！！」「」「ズッ」

「……ザマーミロ」

「「あ、あははは」「」

悠斗が犯罪をしようとしたところをなのは、フェイト、はやての3人がドコからか持って来たハリセンで悠斗の顔面をたたいた。その様子を見て世羅がつぶやき、アリサとすすかは苦笑するしかなかった。

「ハッキング以外にどうしろって言うんだよ。はっきり言うておくれが、オレは世羅のような危険分子をほっとけるほど楽天的な性格じゃないぞ」

「だったら囑託魔導師はどうか？ そしたら世羅ちゃんを放っておかずに済むし」

悠斗はなのはの言った“囑託魔導師”の仕事を記憶の中から検索して、深く悩みこんだ。

「……………それならいいか。でも囑託魔導師だけだよ」

悠斗は受けることを決め、思わぬ声も上がった。

「……私もその試験受ける」

「そついう寝言は寝てから言つて」

天地がひっくり返つても言いそうになかった言葉を世羅が言った。だからこそ悠斗は信じられず冷たく返した。

「……酷い。受けたらいけない？」

「いけないはないが、」

「世羅ちゃんが嫌つてる魔法を受け入れないといけないんだよ」

「悠斗が言つてたけど、事件の後からこの前まで一回も魔法使つてないんですよ」

「せやからこの程度のことを受け入れられる、なんてことが信じられへん、やないんかな？」

現に昨日はウチらも殺そうとしたし」

悠斗の言葉を継いでなのは、フェイト、はやてが言つ。アリサとすずかははやての言葉に驚きを隠せなかった。

「…………うん。本当は受け入れたくない。…………でも、お兄ちゃんの翼を縛る鳥籠にはなりたくない。お兄ちゃんは今まで自分を殺して生きてきたんだから、いい加減鳥籠から飛び立って欲しかったの」

世羅が言ってるとき、悠斗には世羅が一人の大人とした強い意志を感じた。

（そうだよな。世羅だっていつまでも護って貰うばかりじゃないんだ。いつの間にか成長を見逃してみたいだな）

「うん、その気持ちは痛いほど分かる。悠斗も、もう世羅から目を背けようとしなくていいよ」

世羅の強い感情のこもった言葉にフェイトは同情しながら悠斗に強く言う。

「そう、だな。もし背けてたらフェイトが見てあげてくれ」

悠斗は笑いながらフェイトに向かってそう言い、問題を挙げた。

「囑託魔導師試験の過去問なんて持ってないから落ちかもしれんし」

日向家の地下には母さんが生きてた時に溜めてた色々な魔導師試験の過去問が20年分溜まっているけど、それは執務官やら、ヘリパイロットやらで囑託の過去問はなかったはずだ。溜めてた理由は悠斗と世羅に色々な仕事と資格を持って欲しかったから。

悠斗がそこまで言うのと、なのは達は呆れた顔をした。フェイトから言わせれば20年分は溜めすぎらしい。

そんなこんななのは、フェイト、はやてが教えることになった。

「試験内容は筆記、儀式魔法、戦闘技能だけで、わたしが戦闘技能を教える」

「ほんならウチは儀式魔法やな」

「覚えてるからいらない」

「そうか」

「じゃあわたしが筆記だね」

なのは、はやて、フェイトはそう言って教官が決まった。余談だが、一瞬にして教えることがなくなったのははやては部屋の隅でイジけた。

## 第6話 取る道(後書き)

作者「世羅、健気だね。お兄ちゃんのためにだいいいい嫌いの魔道師に自ら歩みよるなんて」

悠斗「確かに。悪いな、世良。お前まで巻き込んでしまった」

世羅「……別にいい。お兄ちゃんが離れないためなら何でもするか」

作者「(ヤンデレ?)」

世羅「……お兄ちゃん、この人殺していい?」

作者「とか言いながら首から下もっ氷漬けだよ!?!?!?!?!」

悠斗「血が飛び散らないように殺せよ」

作者「いやあああ!?!?!」

そこはお兄ちゃんだから止めてよ!?!?!?!?!?」

世羅「凍ったままらな蹴り飛ばせば殺せる」

バリーーーーーーーーンッ!!!!!!

作者「いやあああああ!!!!!!

眼が、眼が!!!!!!!!!!!!」

悠斗「ウルサイ。ドラゴニックインパクト!!!!!!」

作者「イヤアアアアアアアアアアアン!!!!!!」

世羅「今度は徹底した抹殺がいんじゃない?」

悠斗「激しく同感だ。まあいいや、次回予告

次回『第6.5話 囑託試験 試験勉強』オレの平和に向か  
ってtake off」

## 第6・5話 囑託試験 試験勉強

- - 悠斗side - -

「デイベインバスターツ!!!!!!」

「その砲撃は死ぬって」

『デیفエンサー』

悠斗はなのはの桜色の閃光をバリアで受け止め、砲撃に耐えた。

閃光がやんだ直後にタイマーが鳴り、時間が終わったことを知らせてくれた。

「よし。今日もオレの勝ち!!」

「悠斗君が変則的過ぎるんだよ。もっと手加減して」

なのはは脹れて言うが、悠斗は適当に聞き流した。

最近、なのはと悠斗はあるルールで戦闘技能の訓練をしていた。

それは、なのはは何を使ってもいいので時間内にまともな一撃を当てることが出来たらオレが何でも言うことを聞く。出来なかったらオレ分のケーキを1個増やす。

このルールの時はオレは魔力とデバイス以外使ったらダメで、何かを壁にするのもなし、反撃するのもなし、訓練場から逃げるのも

なしだ。

（最後のはちょっとヤバかったな。ディバインバスターのせいで魔力がだいぶ削られてた。タイムアップが来てよかったよ）

悠斗は今後の心配をしながら笑顔で翠屋に行く。

フェイトが勉強場所に選んだのはなぜか喫茶・翠屋だったからだ

「次こそ絶対勝つツ！！」

「まだ勝ちを譲る気はないよ」

『私もですよ』

『それに関してわたしもですよ』

なのは、オレ、シンフォニー、レイジングハートはそんなことを言い合いながらなのはと一緒に翠屋に向かって行く。

そして、翠屋の扉を開けた瞬間、木刀が飛んできた。ご丁寧に俺の首を狙って。

すぐに気付いて首を逸らす。その時にゴキユッなんて音がしたが気にしない方がいいだろう。というか、気にしたくない。

「シスコニー号、いきなり何しやる」

「悪い虫が入ってこようとしたので殺そうとしたまでだ」

オレに向かつて木刀を投げた張本人、シスコン1号、こと高町恭也がそう言った。恭也はなのはの実の兄だ。

よく見ると後ろにシスコン2号、ことクロノ・ハラウンもいた。オレへの対応がかなりひどいので敬語を使うなんてことが出来ない二人だ。

「手荒い歓迎はこの際無視するとして、なのはに当たったらどうするつもりだったんだ？」

「怪我させたお前を殺す」

「その場合怪我させたのお前だろ！！」

とりあえず聞いてみると何バカなこと言ってるんだ、みたいな態度で威張って言う恭也。

むかついて言い返してみたが、「守れなかった虫が悪いだろ」なんて普通に返された。

「おにいちゃん、ちょっとO H A N A S H I I しよっか」

会話に参加してないはずなのはが黒いオーラをまとって恭也に言う。

黒いオーラはオレの背中に焼けつくような痛みを与えていく。

(なんとというか、黒すぎないか?)

オレはなのはのオーラが怖かったので恭也を無視して世羅の元に行く。

「フェイト、世羅のほうは大丈夫？ ってそのプリントの山って何？」

疲れたのか世羅は寝ていたが、世羅の近くにあるプリントの山を見て唾然とした。執務官試験15年分はありそうなプリントの量。

(オレが言うのもなんだけど、多すぎない?)

そんな心情が分かったのかフェイトが口を開いた。

「嘱託魔導師試験3年分の過去問だよ」

「嘱託魔導師って執務官試験のときより多いのかよ」

「執務官試験は年2回しかないから年単位で見れば少ないよ。嘱託魔導師試験は範囲がものすごく狭いから年でやる回数も多くなってるの。過去最多が………うん。20回かな」

(20回か。月2回ぐらいのペースでやったのかな。いや、そんなに多いんだっいたら1年分だけで良かった気がする)

悠斗は現実逃避しながら心の中でつぶやく。

「悠斗って執務官試験受けたことあるの?」

「地下にある過去問をコピーして答えあわせしながら解いただけ。実際に受けたことはないよ」

「あの、その時って何点ぐらい解けた?」

「最初にテストしたときには5割ぐらいと低かったよ。合格し始めたのはしばらく経ってから」

「そ、そうなんだ。よかった。わたしって執務官試験2回落ちてるから」

その言葉で3年分も持つてきた理由が大雑把に把握できた。

(執務官試験に落ちた時のことを思い出して3年分にしたんだな。世羅には丁度いいからこのまま押し通しておこ)

オレがそんな事を考えているとなのはがやってきた。手に赤い液体がついているのは……………ケチャップとでも思っておこう。

なのはも世羅の周りに積み上げられたプリントの山に驚いている。

「フェイトちゃん、執務官試験じゃないんだからこんなに多くなくていいんじゃない？」

「ううう、やっぱり3年分は多すぎた？」

（フェイトが軽くなみだ目になり出したし、ちょっとだけフォローしておくか）

「フェイトがオレ達を思ってこの分を課したんだろ。だったらオレは泣き言言わずにやりこなすさ」

「え？………あ、ありがとう」

フェイトは赤くなってうつむき、そう言った。

（こんな顔をしてたら勘違いするやつも多いだろうな。さすが私立聖翔大付属中学の五大美女だ）

「そつえば、はやてはどうしたんだ？」

五大美女の最後の魔導師が来てない事に気付いてなのはに聞く。

フェイトは真っ赤になりすぎて喋れそうになかったから聞かなかった。

「シグナムさんが悠斗君に模擬戦を挑もうとするからはやてちゃんが抑えようとして」

「来てないわけだ。別に適当に逃げ回るから別に良かったのに」

「逃げ回るって、シグナムさん結構強いんだよ」

なのはが心配そうに言うが、聞く気はなかった。オレはフェイトが持ってきた過去問を開きながら言う。

「大丈夫だよ。だってシグナムさんってベルカの剣士でしょ。だってら得意の搦め手で攻めればいいし。」

それはなのはが一撃も当てれないってことで証明してるでしょ」

「うっ、確かに。はやてちゃん以外悠斗君に一撃を与えるなんて難しそう」

「はやてってそんなに強いのか？」

「戦い次第では最弱。だけど悠斗君にとったら一番相性が悪い相手」

（それはちょっと興味あるな。オレの魔法をどんな方法で破るのか）

はやての実力に期待しながらなのはとフェイトの頭を撫でた。2人は顔を赤く染めて大人しく撫でられた。



作者「きゃびいいいいいいいいいいいいいいん！……！」

悠斗「いつその事このバカしないかな？」

なのは「えつと、と、とりあえず次回予告

『第7話 試験開始 初戦の相手はヴァイター！！？！？』

（前編）『』

世羅「魔法への憎悪を胸に抱いてtake off」

第7話 試験開始 初戦の相手はヴィータ！！？！？ (前編)

- - 試験当日 - -

時空管理局本局のとある一室にて囑託魔導師試験を受けることになった。

と言っても、今は時間が早すぎるので適当に本局内をぐるつき回っていた。

「管理局って初めて来たけど、中は意外と面白そうなところだな」

「……私もそう思う」

「本局の外は殺風景だけだね」

悠斗と世羅が自分の感想を言っていると、フェイトがツッコんだ。

今この場にいるのはオレと、世羅とフェイトだけで、なのははオレ達の書類を持って行きに、はやては試験内容の打ち合わせらしい。シンフォニーとカノンは連れてこなかった。

「一応母さんから聞いたことあったから期待はしてなかったよ。とか考えてるうちに、なのはが戻ってきたよ」

オレはそう言いながら走ってくるのはに向かって手を振った。  
かなり慌ててたのか止まったら肩を上下させている。

「……………はあ、はあ、はあ……………悠斗…君達…の試験…は、…2時  
…間後…にする…って。…それまでは…自由に……………しろとも……………」

「了解。でもあと2時間することなんてないな」

「……………じゃあ殺す?」

「殺さない。殺すのは腹の腐った狸にして」

「誰も殺しちゃダメだよ!!」

オレと世羅のオチのない会話にフェイトがツッコんだ。

その後もやつと呼吸を整えたなのはも交えて談笑しあい、2時間を簡単につぶした。

その後はなのはに連れられて筆記試験の会場に行った。

今回囑託魔導師試験を受けるのはオレ達2人だけらしく、他は試験監督を残して誰もいなかった。

「悠斗くん、世羅ちゃん、久しぶり」

「お久しぶりです、シャマルさん」

「……久しぶり」

部屋に入った瞬間に挨拶してきたのははやての守護騎士の一人、シャマルだった。

彼女ははやての母親的存在で金色の髪に黄緑の服を着ている。

「今回の筆記試験の試験官を務めます、シャマルです。」

試験時間は50分で、くれぐれも不正行為はしないでください、なんて悠斗君たちならしそつにないですけど。………では始めます。用ゝ意、スタート」

なんか掛け声が違うような

オレと世羅はシャマルの言葉を合図に筆記試験を解き始めた。

(これは、フェイトのお陰で助かったな。いくつかひねくれた問題があるけどフェイトのお陰で分かるや)

そんなこんなで試験問題を簡単に解いていき、30分で筆記試験を終わらせた。見直し？んなもん一度もやったことないから別いいよ

「さて。次は儀式魔法だ。しっかりとしたものを見せてくれよ」

そう言って儀式魔法の試験官であるシスコン2号が待っていた。

儀式魔法とは召喚や天候操作、遠距離転送などの複雑な術式を使う魔法らしく、世羅は氷結スノーホワイトの媛を使うことにした。

（儀式魔法じゃなくて希少技能じゃん、なんてツツコミはなしにして）

「……私が先にやる。」

いと白き雪の姫 汝の力を持って平穏なる台地を凍土と変えよ」

世羅がスノーホワイトの呪文を唱え終わった瞬間、世羅から冷たい空気が流れ込む。

冷たい空気は地面を氷で包み、木を凍らせ、空気を霜と変えた。

「さっすがスノーホワイト。前もって準備してなかったら雪だるまの仲間入りだな」

オレはスノーホワイトが起こした光景に舌を巻いた。

オレが張ったアイシクルシールドに護られているのは、フェイト、シヤマルも天災型の恐ろしさに言葉を失っている。

クロノは油断していたせいか、スノーホワイトの回り込みを受け、プロテクションを使いながら口が開きっぱなしで固まった。

「護り方が違ったらこんなに醜態を晒すんだ。確かに危険としか言いようがないね」

オレが張ったアイシクルシールドが崩れ落ちながら解放されていくのはが密かに呟いた。

「氷付けになったのはシスコン2号だけだし、気にすんな。それより、オレはドコで試験をやればいいのか、それが問題だ。スノーホワイトで氷ったものは砂礫のように脆くなる性質があるから穴が簡単に開きそうだ」

「あの、それってもしかして、迂闊に触れると碎けて死ぬのでは？」

シヤマルがおずおずと聞いてきたからゆっくりとうなずいた。

(思い出してみたら自然解凍とあの方法以外で溶けた例もなかつた  
な)

悠斗は心の中で深いため息をついてから気持ちを入れ替える。

「仕方ないからこのまま放置しておくか。

契約の元、我が元に来たれ。天地守り抜く星光の息吹、静寂なる聖夜の永遠とわの護り手、輝く光闇こうあんの夜天の守護者。龍鬼召喚・ドラグニール」

悠斗が周りを気にせず召喚の呪文を唱え続け、地面に漆黒色の巨大な魔法陣が現れる。

魔法陣からは40メートルくらいの巨大な体躯、黒い肌に白い鎧、白と黒のコウモリのような羽が3対、黄色く鋭い眼をした竜人が現れた。

悠斗が召喚した竜人の大きさになのはとフェイトが思考を止め、固まった。

『悠斗よ、今回はなぜ呼んだのだ』

「儀式魔法をしろ、って言われたから冗談で呼んでみた。久しぶりの外の空気も悪くないだろ」

『確かに悪くはないが、モミジの言うことを聞かなくてよかったのか?』

「生きてたら半殺しにされるくらいまずいかもね。」

悠斗はばつが悪そうに苦笑し、あさつての方向を見る。

その表情には悲しみと困惑と、憎しみが浮かんでいた。世羅は何でそんな表情をするのか分かっていなかったから瞳に嫉妬の炎を燃やす。

悠斗は不意に元の表情に戻してなのはに聞く。

「試験官が氷付けになってるからなのはが代理の試験官になってもらうていい？」

「あ、うん。分かった」

なのははまだ驚きが抜けず、生返事で返して点数をつけ始めた。

意外と様になってるな

一瞬そんな事を思ったが、フェイトの件もあって口には出さなかった。

そして全員弁当を持ってきたから、みんなで弁当を広げ食べていた。

「竜召喚って珍しい魔法を覚えてるね」

「そうか？ 使い魔の方がもっと珍しいと思うけど」

なのはの質問に適当に返すと、フェイトが説明してくれた。

「いや、結構珍しよ。使い魔を持ってる人は何人かいるけど、召喚魔法が使える人は少ないし、竜族となったらさらにだよ」

「ほ〜。ドラグニールとは偶然会ったようなものだったから知らなかった」

「もしかしてまだ召喚できる子いるの？」

「一応。神狼や麒麟も呼べるし、危険だけど竜がもう一匹。あとは不特定多数の翼竜か」

「」「多過ぎ！」「」

なのはの質問に思い出しながら答えると、なのは、フェイト、世羅にツッコまれた。

「しょうがないだろ、得意魔法で翻弄してたらいつの間にか増えてんだから」

「いや、そんな簡単に増えない気が」

「現に増えたんだからしょうがない。神狼とは追いかけてここに付き合ったら契約してくれたし」

「なんかどうツツコんだらいいか分からなくなるね」

なのはは呆れたようなため息をついてそう言い、その後も談笑しながら弁当を食べあった。

第7話 試験開始 初戦の相手はヴィータ!?!???

(前編) (後書き)

悠斗「オレ、凄そうな奴召喚したな。」

作者「実際凄いよ。キャラのヴォルテールより守護範囲が広い分強い。」

並みの  
問題点はどんなに手加減してもなのはダイバインバスター

破壊力を持つてることだけ。」

フェイト「なのはのダイバインバスターって。強すぎる」

はやて「あれはもう軍事魔法やもんな」

なのは「ちよつと!?!?!?!?! はやてちゃんにそこまで言われる  
筋合い

ないよ!?!?!?!?!

はやてちゃんの方が威力あるじゃない!?!?!?!?!」

作者「確かにはやての方が威力あるね。でも、その分発射は遅いよ。そしてなのははあんなに短い時間でかなりの破壊力を出す。つまり総合的にはなのはの方が強いのだ!?!?!」

なのは「わたしそんなに強くないよ……!!」

悠斗「いや、フェイトと同時とはいえ街中で次元震を起こしたやつが  
言える言葉じゃないからな」

作者「ついでに言えばトリプルブレイカーで闇の書の闇のリンカー  
コアを

露出させたし」

なのは「それでもわたしは強くないもん……!!」

作者「弄りすぎてなのはが駄々っ子になったところで次回予告

『第8話 試験開始 初戦の相手はヴィータ!?!?!?』

後編)』

紅き守護騎士は自分の命を守ることができるのか……!!」

第7話 試験開始 初戦の相手はヴィータ!?!???

(後編)

次の試験会場には八神家メンバーが勢揃いしていた。

いたのははやてとシヤマル、そして赤い髪に紅いゴスロリ服の少女・ヴィータ、桃色の髪に鎧を纏った剣士風の女性・シグナム、蒼い狼の姿をしているザフィーラだ。

そして、はやてが試験内容を説明し始めた。

「ほんなら試験内容を説明しよか。試験は実戦形式で世羅ちゃんはヴィータと1on1、悠斗くんはシグナムとウチの2人相手の1on2で戦ってもらいます。」

あくまで戦闘能力を見るだけやからウチ等に無理やり勝とうとせんでええよ。聞いた話やとフェイトちゃんは勘違いしてクロノくんは無理やり勝とうとしたらしいし」

「はやて!何で知ってるの?!?!」

「エイミイから聞いたんや」

「エイミイ、何で言いふらすの?? あ、あれだよ!ち、ちよつと失敗しただけなんだからね」

はやては楽しそうに答え、フェイトは涙目になりながら言い訳した。が、

(フェイトのやつ、なにに向かって言い訳してんだ?)

悠斗はフェイトの心情にまったく気付かず、世羅は興味ないので無視した。そして、悠斗は言うてはならない事を言った。

「フェイトがドジな事は昔からだろ。今更そんな失敗聞かされてもそんな事したんだ、程度にしか思わないよ」

「うわああああああ!!!!!!」

悠斗の言葉にフェイトは泣きながら部屋を出て行く。

「あれ?なんかオレ、まずいこと言った?」

「自分で考えてな」「知るかつ!!」「テストロッサもかわいそうに」

はやては呆れたように、ヴィータはキレたように、シグナムは哀れむように言い、悠斗は更に困惑した。

「とりあえず、オレが泣かしたみたいだしフェイトを探しにいくか。ごめんけど先に世羅だけ試験しておいて」

「ちょっと待って!!」

悠斗はそう言ってフェイトの後を追いかけていく。ちなみなのは制止の声は聞こえていなかった。

〳〳なのはside〳〳

「ちょっと待って!!」

悠斗くんがフェイトちゃんを追いかけて部屋を出て行った。悠斗くんを呼び止めようとしたが悠斗くんは聞こえてなかったのかわたしの声を無視して出て行く。

「あいつは自分が試験を受けていることをすっかり忘れてるな」

「ま、しばらく経ったらフェイトを連れて戻ってくんだろ」

シグナムさんとヴェータちゃんはそう言ってフェイトちゃんと悠斗君の走り去った跡を見る。

「……試験を始めよう。お兄ちゃんの邪魔したくない」

「そうだな。全力で来いよ！」

世羅ちゃんが試験を始めるように言い、ヴィータちゃんが気合を入れるように答えた。

「……もう、落とされる気はない。ゼルダ、一緒に戦って」  
『Yes, sir』

世羅ちゃんがそう言って自分のデバイス・ゼルダを起動させた。

ゼルダは槍の形に変わり、刃先が地面につきそうなほど深く下段に構える。それに合わせてヴィータちゃんも鉄槌のデバイス・グラーファイゼンを構える。

「はああっ！！！！」

先に仕掛けた世羅ちゃんが切り上げながら突進する。一拍遅れて気付いたヴィータちゃんは慌てて横に移動した。

「その程度じゃ甘いよ」

世羅ちゃんはそう言いながらも自分の動きを変えようとしていな

い。

ヴィータちゃんは不審に思ってわずかに動きを止め、反撃しようとした瞬間、

「っ！！！」

ヴィータちゃんはゼルダが突き刺さる軌道に移動して刺突を体で受けた。

「槍のときは範囲内にいるものを槍の軌道上に移動させて攻撃できる機能がついている。だから、あんな避け方じゃ避けれない」

なんで槍が直撃したのか世羅ちゃんが説明するとヴィータちゃん  
は不敵な笑みを浮かべ、グラーファイゼンを握りなおす。

「だったら、攻め続けて反撃する暇を与えねエ！！ ほえろ、グラーファイゼン」  
『シュワルベフリーゲン』

ヴィータちゃんはそう言い放って鉄球をハンマーで打ち、鉄球は世羅に向かっていく。

世羅ちゃんはゼルダを振り回して鉄球を一撃で粉碎する。

全部壊したらまたヴィータちゃんの方に走り出したら、途中で槍を地面に引っ掛けてしまった。一瞬ミスかと思ったたら世羅ちゃんは走ってた勢いを利用してとび蹴りをする。

ヴィータちゃんはギリギリのところまで気付いて横に移動する。ついでにグラーファイゼンを2ndフォルムのラケ・テンフォルムに変えて返り討ちにしようとする。

(世羅ちゃんにこの反撃は厳しいよね。)

わたしはそう考えて早くに決着がついたと思ったが世羅ちゃんはグラーファイゼンの軌道をわずかに逸らしてゼルダを振り下ろす。ヴィータちゃんはすぐに離れ、世羅ちゃんから間合いを取る。

「くっ、今のはかなり危なかった。なんか意地でも勝ちたくなる」

「このままじゃ負けるかな。ゼルダ、モード2」

『Yes, sir. battle fierce form』

ヴィータちゃんは悔しそうに顔をゆがめてハンマーを構えなおし、カートリッジをロードする。世羅ちゃんは槍じゃ勝ち目がないと思いい、槍の柄が短くなって刃から斧の刃が出てくる。しばらくするとゼルダは戦斧に変わった。

戦斧を背中に構えて走り出す。

ヴィータちゃんもラケーテンフォームのブースターで飛ぶ。

「はああっ!!」

「やああっ!!」

2人は同時に走り出し、刃(?)を交えあう。互いのデバイスがぶつかり合った衝撃がわたし達まで。

そんな衝撃の中でも2人は力を緩めようとしなない。思ったたら世羅ちゃんが腕を引いてグラーフアイゼンを空振りさせる。世羅ちゃんの予想外の行動にわたし達含めて全員驚き、世羅ちゃんは体をひねって逆方向からゼルダを振るう。

ヴィータちゃんは驚いた硬直からすぐさま抜け出し後ろに下がって世羅ちゃんの攻撃を避ける。

だが世羅ちゃんは自分のペースを取り戻したのかゼルダを左手で振り回しながらヴィータちゃんを追いかけ、また体をひねって戦斧を打ち下ろす。

「クソッ!! やるぞ、アイゼン」

『ロードカートリッジ フランメシユラーク』

ヴィータちゃんは魔法を使ってギリギリ受け止め、ぶつかり合った瞬間爆発した。爆発を受けた世羅ちゃんは吹っ飛ばされ炎に包ま

れている。

(フランメシユラークって着弾点に燃烧を追加する魔法だったよね？ 世羅ちゃん大丈夫かな？)

わたしが世羅ちゃんの心配をしていると炎の中から声が聞こえた。

「ゼルダ、やるよ」

『Yes, sir “氷牙”』

「『一閃』」

炎の中から一本の青白い螺旋の光がヴィータちゃんに向かって飛んでいく。ヴィータちゃんはすぐに気付いて跳躍して避けたが、

「炎のお返し。“氷牙刃”」

いつの間にか世羅ちゃんがヴィータちゃんの背後を奪っていて槍での一撃を与えた。

ヴィータちゃんは何も出来ず地面にたたきつけられた。

地面にたたき落とされたヴィータちゃんはふらふらしながら炎に包まれても無傷だった世羅ちゃんを見据える。

「かすり傷すら負わないって化け物かよ」

「流石にスノーホワイトがなかったら火傷は負ったよ。今のは氷の壁を溶かす事が出来なかっただけ」

「それが天災型希少技能、か。相手にするとこれ以上ないくらいいやな能力だな」

「じゃあさつさと負けてよ」

世羅ちゃんはそう言ってゼルダを槍にしたまま飛び出す。

「あたしは鉄鎧の騎士、ヴィータ！！ 15年も生きてない小娘に負けるわけにはいかねエエエツ！！！！」

ヴィータちゃんもそう言って飛び出す。ついでにグラーフアイゼンはカートリッジを2発ロードした。

（と言うか、わたしはヴィータちゃんと引き分けが続いてるけどそれはどうなのかな？）

なのははヴィータの言葉に苦笑を浮かべながら横を見るとはやてちゃんとシグナムさんも苦笑を浮かべている。

そしてわたしは諦めのため息をついて目の前で繰り広げられている戦いに集中する。

ハンマーとピッケルハンマー、槍と戦斧で行われる戦いはどんどん佳境に入っていく、ついに2人は離れた状態で動きを止めた。

〳〳世羅 side 〳〳

(この子、結構強い。最初はいい運動にしかならないと思ったけど、打たれ強さと粘り強さがかなりあった。私の体力も限界に近いし、次で勝負かな)

やっぱり鈍った感覚を取り戻そうとしてよかった)

私は槍を構えながらそう考え、息を整えていく。少しでもすばやく動けるように。

(コイツ、すごく強い。希少技能に縋ってるアマちゃんかと思ったけど、能力面はあたしと同じか、ちょっと下だ。残り魔力もかなり少ないし、次が最後の攻撃だな)

ヴィータは世羅を心の中では認めながらグラーファイゼンにカートリッジを詰め込む。次の一撃に全力を尽くすため。

「ヴィータ、もう体力も魔力も限界が近いし、全力の一撃をぶつけ合って立ってた方を勝者にしない？」

「それが一番いいな。グラーファイゼンの力ですべてをぶっ壊してやるっ！！」

私はそう言い終った後観戦している皆に確認を取る。全員がしっかりと頷いたのを確認してゼルダを強く握る。

「ゼルダ、フルドライブいける？」

『Yes, Sir. Full Drive. Blazing form』

ガシャンガシャンガシャンガシャン

フルドライブの起動と同時にカートリッジが4発消費された。

なんでカートリッジシステムを使わなかったのかって？ゼルダに内蔵されているカートリッジシステムは普通のと違って威力制限が出来ないから。フルドライブに4発も使うのがいい例。それに自分の感覚がまだ戻せてなかった。

ゼルダは斬馬刀のブレイジングフォームに変わり、頭上に構える。

「こっちも行くぞ。アイゼン、フルドライブ」

『G i g a n t f o r m』

グラーファイゼンも巨大な鉄鎚へ変わり、頭上に構えられた。

「いくよ！！！！ 氷牙一閃・コキュートスブレイザー！！！！！」

「轟天爆砕 ギガントシュラークッ！！！！！」

私のコキュートスブレイザーとヴィータのギガントシュラークはぶつかり合い、周囲に強い衝撃波を放つ。力の拮抗が力の続く限り続くと思っただが途中で衝撃は爆発し、私達も吹き飛ばした。

爆煙が包む中、立ち上がったのは、

私だけだった。

こうして鈍った感覚を取り戻すために希少技能とカートリッジシステムの封印と言う条件の中で得た勝利を噛み締め意識を手放した。

ここまで弱くなってたんだ。ショックだな

第7話 試験開始 初戦の相手はヴィータ!?!???

(後編) (後書き)

作者「いや、念願の2話更新成功」

悠斗「この作者は(怒)」

作者「な、な、何を怒っていらっしやるのでしょうか?」

悠斗「なんでオレだけ1on2なんだよ!」

世羅「……なんで私があんなに弱くなってるの!」

作者「あゝ。納得いかない?」

悠斗&世羅「当然!」

作者「じゃあ説明。悠斗が1on2なのははやてだけじゃ心許無「こころもとない」いから。

悠斗に唯一勝機がありそうなのははやてだけなんだよね。でも、はやては

クロスレンジが大の苦手。つまり前衛役が必要になるんだ。



作者「これはさすがに死んだ!!! 助けて!!!」

作者は悠斗に助けを求めたが、悠斗は見ないふりをし、悲鳴を出せず碎け散った。

悠斗「さて。平穩になったところで次回予告

『第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力（前編）』

烈火の騎士にオレは勝てるのか！」

第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力（前編）

悠悠斗side

時間を世羅とヴィータが戦う前に戻しまして

フェイトを探して本局内をがむしゃらに走っているとホールみたいな場所で腰掛けているフェイトを見つけた。

「やっと見つけた。本局は広すぎだよ」

オレはフェイトに近寄りながら聞こえないようにつぶやく。

オレの呟きが聞こえたのかフェイトはパッとオレの方を振り向きまた逃げようとする。だが、フェイトの行動は遅かった。逃げようとする前にリングバインドがフェイトの右足を捕らえ、フェイトは地面とこんにちはした。

「今回は逃がすつもりはないぞ」

かなり泣きそうになっているフェイトに向かって冷たく言い放つ。フェイトは上目遣いで悠斗を見上げるが悠斗は視線を逸らしたままフェイトに近付く。

本音を言えばかわいいと思ったので、理性を保つためになるべくフェイトの顔を見ようとしてないのだ。ついでに冷たく言ったのも

同じ理由。

「その、悪かったな。フェイトでもプライドはあるだろうし他人に『ドジっ子』なんて思われたくないよな」

「わたしでもってまたひどい事言ってる」

悠斗の謝罪(?)にフェイトは更に涙し、悠斗は更に戸惑った。

「すまん、何でもするから泣き止んでくれ」

「本当に何でも？」

「出来る範囲でなら」

悠斗は自分の失言に後悔してちょっとだけ条件を付け足してフェイトに返した。その言葉にフェイトは顔を赤く染めながらも笑顔になり悠斗にして欲しいことを言う。

「わかった。じゃあ今度の日曜空けておいてね」

「??? 分かった」

悠斗は意味が分からなかったがとりあえず頷いた。

「じゃあ戻ろつか。悠斗が最初だから試験の進行が滞っちゃうよ」  
「世羅が先にやってくれてると思うけど、確かにもう終わったかな」

練習したいからなるべくスノーホワイトは使わないって言ったが、それでもSSランクに匹敵するからヴィータじゃ相手にならないかもしれない。いや、ランクがかなり長いからヴィータとは互角かもな。

さすがに試験に合格しないと3人に迷惑が掛かるので急いで試験場に向かう。

「あれ？急ごうとするのはいいけど、悠斗は試験場がどこにあるか分かるの？」

決まってるじゃないですか。……………全然分かりませんよ。

結局フェイトに先導されて試験場に行った。

試験会場では世羅とヴィータが2人ともノックダウンしているの  
でなのは達に聞いてみたところ、2人の戦いは引き分けらしい。カ  
ートリッジを殆ど使わずに引き分けとは、予想よりランクの影響  
はなかったみたいだな。ちなみにオレとフェイトが着いたのは2人

の決着がついてから5分後のことだったそうさ。

「さて。悠斗君が来たところで試験を始めよか」

「悠斗、今回は逃げるなよ」

はやての言葉にシグナムが怖い雰囲気を放ちながら言う。

(あの時逃げた事まだ根に持ってたのかよ)

オレは1年前の試合の事が思い浮かべたため息をついた。

「あの時の恨みと失望感、ここで晴らしてやる!!!!」

「悠斗君何やったの？」

シグナムの態度がおかしいと思ったのかなのはがオレに聞いたのでオレはあっさりと答えた。

「シグナムに早朝練習している光景を見られて勝負をよく申し込まれてたんだ。で、観念して一回だけ勝負を受ける事にしたんだよ」

「ほう、貴様はアレで勝負を受けたと言っのか」

「やだな、こっちで場所を指定して待ち惚け食らわして不戦勝させたじゃん」

オレはシグナムに苦笑して手を振りながら対応すると他のメンバーから冷たい視線で見られた。

「悠斗君、それは人としてどうかと思うよ」

「……それは酷い」

「だからシグナムが一番張り切っていたのか。超納得した」

「悠斗、待ち惚けは最低だよ」

「せめて手を抜くでもして戦ってやれ」

なのは、世羅、ヴィータ、フェイト、いつの間にか復活したクロノの順にボロクソ言われた。

（だって面倒だったし、勝つとまた再戦、負けたら大怪我、な雰囲気だったし）

悠斗は心の中で拗ねるが、当然誰も耳にも入らない。

「はいはい、悪うござんした。そんな代わりシグナムに対しては剣術オンリーで戦うよ」

オレは投げやりに言い放ち、コンチエルトをソードフォームにする。ついでに纏う空気に刃のような鋭さも追加する。

俺の空気に当てられたのかシグナムも剣を構えた。

そしてフェイトが試合開始の合図をしようとする。

「じゃあ試験を開始するね。試験時間は30分、時間をすぎたら評価の対象にはならないからね。試合……」

「幻影の覇者・悠斗と無限の剣聖コンチエルト、参る」

「烈火の将・シグナムと炎の魔剣・レヴァンティン。その勝負、受けて立つ」

オレ達は互いににらみ合い、

「ウチは最後の夜天の「開始ッ……」」 ちよう言わせて……」

その言葉を合図にオレとシグナムは間合いを詰める。ちなみには

やては置いてきぼりだ。

「はアアアアア！！！」

「セイツー！！」

シグナムはレヴァンティンを振り下ろし、オレはコンチエルトを振り上げる。互いに込められた力で腕の動きが鈍くなったが同時に足を着いて鏢迫り合いに持ち込む。もし僅かでも力を緩めたら相手に押されファーストアタックを奪われるのは間違いない。

だが力は互角。微妙な一進一退の膠着状態が続く。

（オレの場合2人相手だし、しょうがないからファーストアタックは譲るか）

はやてを警戒してわざと力を緩める。その隙を逃さずにシグナムは思いつきり力を込めてオレを切り裂く。

が、体をずらしていたからダメージは小さく済み、振り抜いて無防備になったシグナムに向かって剣を突き出し腹部を攻撃した。

「ぐっ！！」

「まだまだってマズッ！！」

追撃をかけようと思ったが、不意に危険を感じて後退した。避け

る前にいた場所には真紅のダガーが通り過ぎ、もし危険を感じてなかつたらシグナムに与えた以上のダメージを負う羽目になっただろう。コレばっかしは気付けて良かったよ。

シグナムには剣術オンリーで戦うと言ったのでシグナムの相手をしながら砲撃魔導師の相手もというのは流石に不可能なので救援を呼ぶ。

「悪い、カノン。こっちに転移してはやての相手をしてくれないか？」

「そうだねー、この前買ってきた翠屋のチョコレートケーキで手を打つよ」

「分かった。いつかホールで買って帰る」

オレは食い意地の張ったユニゾンデバイスへの報酬に二つ返事で了承し、カノンが転移してきた。

いきなりの長距離空間転移に驚いて世羅以外全員カノンに驚いた。

「悠斗のユニゾンデバイス、静寂なる追復曲・カノン登場。……つて皆とは初対面だけだね。」

悠斗、その子の相手をしとけばいいの？」

「ああ、オレはこっちの方をする」

オレはカノンにそう告げて突然の登場に呆ほうけているシグナムに向  
かって蹴りを入れる。

カノンも適当に炎の魔法を組んではやての居る場所の一步手前に  
ぶつけ、ぶつかった衝撃と炎が立てた轟音ではやて達も正気に戻っ  
た。

ちなみにオレもカノンも一応手加減はしたぞ。

「呆けてる暇はないよ」

カノンはそう言って透明な刃、クリスタルダガーをはやてに向か  
って放つ。

はやてもブラッディダガーを放って対抗しようとしたが、強度が  
違うのかブラッディダガーはクリスタルダガーに直撃しても砕け散  
る。

「なっ！！！」

「主はやて！！」

「余所見は危ないよ。蒼燕流剣術・風雅」

はやての心配をして気を逸らしたシグナムに向かってオレは非情  
にも不意打ちをかける。飛ぶ斬撃は意識を逸らしたシグナムには避

ける事が出来ず、バリアジャケットが裂けた。

(ふむ。やっぱり古代ベルカ式な分バリアジャケットが硬いな。魔力なしだとかなり厳しそ)

「そうだな。気を逸らして悪かった。ここは主はやてを信頼して目の前の相手に集中すべきだな」

シグナムはそう言って刀を鞘に戻した。シグナムの行動の意味が分からず静観しているといきなり動き出した。

ガシャン

『エクスプロージョン』

「飛竜、一閃!!」

抜刀された剣が伸びたように見えて急いで後退した。だが剣はまだまだ伸び続け、オレは向かってくる剣に横から強い衝撃を与えた。

衝撃によって剣は伸びるのをやめ、戻っていく。

「セカンドフォームは連結刃ってことか。ここまで離れてなかったら絶対食らってたな」

「ふん、防いでおいてよく言う」

「結構ギリギリだったよ。こんな風に、ね」

「ッ！！」

オレは瞬動でシグナムの正面に移動し、コンチエルトを振り下ろす。シグナムはオレの動きが見えたのか鞘を頭上に掲げ、コンチエルトを受け止めた。

オレはすぐにコンチエルトを引き、体を捻って遠心力を加えた横なぎをする。それに合わせてシグナムも体を捻ってオレと同じことをする。そして互いに刃を交え、大きく跳躍して後ろに下がった。と思わせて着地した瞬間に瞬動でシグナムの背後を取り、

「蒼燕流剣術・烈火」

右手だけでコンチエルトを振り下ろす。シグナムはオレの行動に気付いて剣を鞘の中に直し、背後を振り返ってオレの攻撃を受け止める。

（だけど甘い。烈火は2連技だ）

右手にもっているコンチエルトを一度手放して左腕で掴み2連衝撃を与える。この技は攻撃タイミングをずらして力づくで相手の防御を突き崩すと言う力押し技。

「ぐあああつ！！」

シグナムの剣は押し退けられ、コンチェルトを使った一撃が袈裟切りに入った。

「負けるものか！！ レヴァンティン！紫電、一閃！」

ガシャン、ガシャン

シグナムはカートリッジをロードして炎を纏った一撃をオレに当てようとした。オレは咄嗟にしゃがんでコンチェルトを斜に構え、紫電一閃の衝撃を地面に受け流す。

「おお、いつてえ。斜めに構えたのに手が折れるかと思ったよ」

受け流しきれなかった衝撃で軽く手を痛めたが、手をブラブラさせる事で痛みを逃がす。

わざと緊張感の無い空気を出して隙を見せているのだが、畏だとは分かるのかまったく攻めて来ようとしなない。

（普通のバトルマニアでさえここで攻めて来るはずなのに。しょうがない、攻め続けて短期決戦で白旗揚げさせるか）

オレは何気に勝利を確信しているが、シグナムの後にはやてが待っているから総合的に負けるかもしれないとも思っていた。

「来ないならこっちから行くね。蒼燕流剣術・嵐風」

瞬動でシグナムとの間合いを詰め、何十回にもわたる斬撃を放つ。

流石のシグナムでも手数が多い攻撃は防ぐ事が出来ず所々傷ついていくが、嵐風の弱点に気付いて勢いよく後ろに下がった。

「確かに手数は多いが一撃一撃は非常に軽い。その技、一見完成されているように見えて、未完成なのか」

「半分正解。この技は1対多で想定されていて、意識を奪える程度の力があるんだよ。ただ魔導師・騎士戦は想定してないから目くらまし程度にしか効果が無いだけ」

「ならばなぜこんなッ!!」

シグナムは最後まで言い切ることが出来ずにレヴァンティンを横に払って悠斗の不意打ちを防ぐ。

悠斗は防がれたと分かるの間髪いれずに蒼燕流剣術・霧燕を放つ。

この技は先々代の師範が燕返しを見て思いついた技らしく、シグナムは霧燕によって逃げ道を塞がれ、悠斗の渾身の一撃が直撃した。

だが、シグナムはその行動が予測できたらしく鞘を楯代わりにして悠斗の攻撃を防ぐ。

ついでとばかりにレヴァンティンは炎を纏って振り下ろされた。だがレヴァンティンが当たる前に悠斗は咄嗟に後退することで避けた。

「ふ、危な」

「安心しろ。そこも攻撃範囲内だ 『紫電一閃』」

悠斗の言葉を遮ってシグナムは一旦レヴァンティンを鞘に直しこみ、またレヴァンティンを引き抜いた。さっきとは比較にならないほどの速さで。

「ッ！！！」

ほとんど守る暇が無かったのでその剣撃を体で受け止めてしまった。だが、蒼燕流剣術をなめるなよ。

悠斗は怪我の痛みを押し殺して瞬動で強烈な一撃をシグナムに当てる。

「まだまだあ！！ 蒼燕流剣術・春疾、はるやみ秋風、あきかぜ針鋼、はりはがね」

得意な剣術のコンボを入れて後3つはコンボ決めようと思ったが、はやての砲撃魔法であるクラウソラスが悠斗に向かって飛んできたので止めた。

「はやて、そんな暇ないでしょ」

はやてが夜天の魔道書の主である限り、カノンの勝利は決して揺るがない。天地が逆転しようと、“書”は“聖母”に勝てるはずがないのだから。

優斗はそう思っではやてに忠告した。

だが、あれは流れ弾だったらしく未だに2人の間で撃ち合いが続いていた。

はやてとカノンの戦いに気を逸らしていると復活したシグナムが悠斗の首に剣を突き立てて聞いた。

「なぜ本気を出さない？」

「出してるよ。出してないように見えるのはシグナムが強いから」

「ほう、ならば魔法を使うヒマさえないと？」

「『シグナムに対しては剣術オンリーで戦うよ』って始める前に言ったじゃん？だから魔法を使う気はないよ。」

ま、はやてにはそんな約束はしてないから使うけどね」

(だから魔法を使う隙があっても一切使わなかったし)

「今度は魔法も使ってこい。こっただけ優位な状態で勝つのは気に食わん」

一瞬シグナムに何を言われたか分からなくなったが、理解した瞬間に聞く。

「いいのか？なのはにオレの戦闘スタイルを教えてもらってるんだろっ？」

「ああ、本気だ」

なのはがオレの戦い方を話しているのを全員が聞いていたのだから意地でも魔法は使わせないようにすると思っただが、シグナムは短く答え、魔法を使う事を許した。

第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力（前編）

作者「というわけで！ 今回のゲストは悠斗とシグナムです！！！！」

悠斗「何がどうなって“というわけで”なのか説明しろ！！」

作者「はい、シグナムは自己紹介して」

悠斗「人の話を無視するな！！！！」

シグナム「えっと、ヴォルケンリッターの剣の騎士シグナムです」

作者「身構えなくていいよ。ここは常に無礼講だから」

悠斗「無礼講すぎる気がしないでもないがな」

作者「気にしないで、気にしないで」

ところでシグナムは気づいた？ 悠斗の自称

シグナム「一応な。今年のポケモン映画のサブタイトルだろう」

作者「ザツツグレエト!!!!!!」

そうです。二つ名を考えるのが面倒になってついパクッちやいました。」

悠斗「最低な作者、ここに極めまり。シグナム、ちょっと手伝って」

シグナム「了解した!!」

「紫電!!」

「蒼雷!!」

作者「今回はしゃーないから甘んじて受けますか」

「「閃!!!!!!」」

作者「ぎゃあああああああ!!!!!!」

悠斗「さて、今度はオレの本領発揮」

シグナム「もう手を抜くなよ」

悠斗「分かってるって。次回

『第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力』

嘘と幻の世界で2人に勝利はあるのか？ t a k e o f f

第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力（中編）

「じゃ、お言葉に甘えて。コンチェルト、いくよ」

『yes・my master・Illusion grav  
re』

オレはシグナムから距離をとって地面に触れて7匹の異形の蛇を作り出し、シグナムに襲わせる。

「これがお前の得意な幻影魔法か！！」

そう、オレが得意なのは幻影魔法。他人を欺き、騙し、裏切り、背後から狙う卑しい魔法。だから搦め手を使い、なのはやフェイトといった上位の魔導師でさえオレを傷つけることはできなかった。

シグナムはそう叫んで異形の蛇を迎え撃つためにレヴァンティンを構えた。

1、2、3匹目とシグナムに切り裂かれた蛇は一瞬で消滅するが、4匹目のときはレヴァンティンが実体をとらえた感触を持ち、容易には切り裂けなかった。

シグナムはすぐに力を込めて4匹目も切り裂き、残りの蛇も切り裂く。

だが、

「油断大敵だ！！ 雷電一閃！！」

ソニックムーブでシグナムの背後に移動し、電気を纏ったコンチエルトを大きく振り下ろした。

「はああああああ」

「ウツソオツツ！！！！」

だがシグナムはレヴァンティンを連結刃のシユランゲフォルムに変え、刀身を回転させながら自分を包む。オレの雷電一閃はシグナムの周りを回転するレヴァンティンに防がれ、まともなダメージを与える事さえ出来なかった。

ダメージを与えられなかった事とそんな防ぎ方があったことに悠斗は驚いたが、すぐに自分を取り戻してシグナムから離れてイリュージョングレイブを使う。

またしても出てきたのは7匹の蛇。

「ふん、バカの一つ覚えか！？」

シグナムはそう叫んでまた蛇をかき消そうとしたが、今度は1匹

目で実体を捉えた感触がした。シグナムはまた力を込めてその蛇を切り裂こうとしたが、その前に8匹目の蛇がシグナムの頭上から降ってきて切るうとしていた蛇からレヴァンティンを離し、降ってきた蛇を切り裂いた。

その蛇は簡単に消えたが、他の蛇がシグナムの足に絡みつく。そして2匹だけはシグナムの体を上ろうとする。

「この程度で慌てるものか！！レヴァンティン！！」

『ヤー、エクスプロジョン』

シグナムはロードカートリッジしてレヴァンティンに炎を纏わせ、蛇を燃やす。炎はすべての蛇を燃やし、シグナムの体の上ろうとした2匹だけ燃え続けている。

「ここまで精巧な幻術なのか。高町たちに聞いていなければ召喚魔法と思っただかもな」

「もう召喚魔法に近いと思うけどね。実態を持つ幻影なんて」

シグナムの呆れたような言葉にオレは苦笑しながら返した。

オレが使う幻術魔法は実体、というより質量を持たせる事が出来る。NAR TO風に言えば影分身の術が使える状態なので普通の幻術みたいに一撃で消えることなく、その幻影に攻撃させる事も出来る。たとえ一対多の状況でも多対多に持ち込む事が出来、幻影に

こめた質量が大きいほど強いのが出来る。

ただ、オレは徹底した嫌がらせスタイルで全部に質量を持たせる事はなく、殆どが実体を持つ幻影と普通の幻影が混ざった状態で使う。それは長期戦になればなるほど相手の感覚を狂わし、最後には自分が攻撃したものが何なのかさえ分からなくなるほど追い込むためだ。

そして自分の行動に呆れながらもイリユージョングレイブで4体の悪魔を作る。悪魔は曲がった2本の角と赤黒い筋肉質な肉体、鋭い爪を持っている。

「確かに召喚魔法に近いな。それも実体を持つ幻影か？」

「内緒。教えたら幻術の意味ないし」

オレはそう返してから悪魔たちにシグナムを襲わせる。悪魔Aはシグナムに向かって大きく右腕を振り、弾き飛ばそうとしたが、シグナムは実体だと思い紫電一閃で切り裂く。悪魔Aはシグナムの勘通り実体で腕が切り落とされた。が、悪魔Aは執念深く残った左腕で殴ろうとする。

シグナムはレヴァンティンをシュランゲフォルムに変え、悪魔Aに止めを刺そうとする。

グルルルルアアア！！

が、悪魔Bがシグナムに向かって殴りかかる。シグナムは咄嗟に悪魔Bの攻撃を避けたが、避けた先で悠斗が剣を振り下ろした。

「烈火一閃！！」

「うわああああっ！！」

シグナムは悠斗の烈火一閃に対応できず直に浴びて、悪魔Aがラリアットをかました。そして悪魔C、Dがドロップキックをしようとしたがシグナムは2匹の足を連結刃で捕まえてはやてのほうに放り投げる。

「はあああああっ！！」

思わぬ反撃から啞然としているとシュランゲフォルムのレヴァンティンがオレの逃げ道を塞ぐように動き続け、ギリギリで反撃するためにコンチエルトを構える。

「飛竜、一閃ッ！！」

「風雅、一閃ッ！！」

オレは隙間を狙って風の刃を飛ばし、シグナムはレヴァンティンを一瞬で狭めて、上から剣先が落とした。互いの攻撃が直撃して2

人のいた場所は煙に包まれる。しかも、示し合わせたかのようにはやての砲撃がシグナムに、カノンの砲撃が悠斗に追撃をかける。

さすがに誰に直撃したのか分かってはやてとカノンは動きを止めた。

気まずい雰囲気の中、煙から哄笑が響き渡り、空気を払拭した。

「ふはははは！　やっぱり強いな」

煙が晴れて普通に立ち尽くしているシグナムが先に口を開いたのだ。それに答えるように悠斗も呆れたように返した。

「シグナムも十分強いよ。いかげん幻術の本領を使ってしか勝てないと思えるぐらいに」

「まだ本領じゃないというのか」

「本当に優秀な幻術師は時間さえ欺くからな。カノン、しばらくの間オレひとりやっていい？」

シグナムと会話しながらカノンにちょっとだけお願いしてまたコンチェルトを構える。

カノンが文句を言うかと思ったが、オレの予想に反してカノンは

適当な声援を送って観戦しに外れた。

「無様な格好するんじゃないよ」

「いいんけ？ 2対2やないとかかなり苦戦するで」

「大丈夫だろ。カノンはどっちかって言うと砲撃魔導師に近いし、オレも本気を出し始めるし」

はやての問いにオレはイリユージョングレイブを使って一匹の竜を作りながら返し、はやてとシグナムも心を入れ替えたように本気の眼をしてオレに勝つ意思を見せる。

「走れ、幻想竜!!!」

そう言っただけでオレは2人に向かって竜を飛ばす。2人は跳躍して空中に浮いて避けたが、この竜は当てるために作ったわけではなかったから興味はなかった。というか、この竜に実体なんて与えてないし。

竜は地面にぶつかりと爆発し、魔力を飛び散らせた。

「なっ!!!」

2人は驚いた顔をしたが、容赦なく2人に近づいた。

経験の差かシグナムはすぐに驚きから抜け出してレヴァンティンで切り裂いたが、悠斗の姿は一瞬でほどけた。

（まさか殺したのか？いや、それにしても人を切った感触ではなかった。どちらかというと、空気を切ったような………まさか！）

「気付くのが遅い！！風嵐連撃」

悠斗は幻術を解除してシグナムに近寄り嵐のような斬撃を繰り出した。完全に不意打ちだったせいでシグナムは反応する事ができず悠斗の連撃をくらって吹き飛ばされた。

シグナムは吹き飛ばされながらも体勢を立て直そうとしたが、シグナムが動くより速く悠斗は空気を蹴ってシグナムに駆け寄り追撃をかけた。

「風雅一閃！！」

（くっ、まずい……！）

「レヴァンティン……！」

『ヤー。パンツァーヒンダネス』

今度は反応できたから防ごうと思ってシールドを前に構えるが、

飛ぶ斬撃はシールドを一撃で砕いた。悠斗は鞘で防いでくると思っていたので若干驚き次の一閃を構えようとした。

が、シグナムがそんな露骨な隙を見逃すはずもなく、反撃に出た。

「紫電一閃!!」

炎を纏ったレヴァンティンが悠斗を切り裂こうとした。だが、悠斗は一閃系を使うのを止め、コンチェルトを楯にして防ぐ。しかし衝撃までは防ぐ事が出来ず、悠斗は地面に叩き付けられ粉塵を上げた。

「この程度な訳ないだろう。さっさと立ち上がって来い」

「じゃあ遠慮なく行くよ」

シグナムの挑発的言葉に悠斗は笑って返し、またシグナムに向かって跳躍する。

シグナムも迎え撃とうと悠斗に向かって行こうとしたが、

「シグナム!! それは幻影や、本体はまだ煙ん中におる!!」

「バレるの速ッ!!」

はやてが悠斗の幻影を見破り、シグナムを止めた。悠斗はバレたと分かるとすぐに幻術を消し、8匹の大蛇をシグナムに向かわせる。

「これは避けれる!?!?」

「そこ、そこ、その3体が実体をもつとる。それ以外は無視してええ!! クラウ・ソラス」

はやてはまたしても一瞬で幻術を見破り、実体を持つ2体に砲撃魔法のクラウソラスを当てた。直撃したせいで爆風が発生し、悠斗の幻術だった大蛇は実体化した奴を除いて全部消えた。その実体化している大蛇もクラウソラスの直撃を受けポロポロで無傷だった大蛇もシグナムの剣蛇で切り裂かれた。

「あの幻術は結構自信あつただけど、ねっ!」

オレはそう言いながら幻術を放った。今度は鋭いくちばしをもつた鳥を縦横無尽に100羽ほど。

「くくくくなっ!!」「くくく」

シグナムや観戦している人たち(世羅とカノンは除く)は驚いた声を上げたが、はやては驚いた顔をしながらもシグナムに指示を飛

ばす。

「見た目に惑わされたらアカン!!!この鳥全部普通の幻術や」

「なっ!!!」

ほやての指示に今度はオレが驚きの声を上げた。

(在り得ねえよ。自分で言うのもなんだがオレの幻術はかなり精巧に出来てるのに、なんで虚偽が分かるんだ!!!?????)

オレは内心かなり焦り、邪魔になりそうなシグナムを倒すために、幻術をさらに作り出す。

「シグナム、2秒後にクマがシグナムの正面に来る!実体をもつてるから自分で対処してや!!!」

「クマ!!!?????」

なのは、フェイト、ヴィータは不思議そうな顔をしてシグナムの方を見、シグナムは困惑しながらもほやての言葉通り2秒後に備えてかまえた。

ほやての予言通り鳥の幻術の中から4メートルはありそうな現れ、腕を大きく振り上げてシグナムを切り裂こうとしたが、シグナムの方が圧倒的に速く動いた。

「紫電一閃!!」

クマは防ぐことも反撃する事もできず、大きく袈裟切りされ絶命した。

「これは!!」

シグナム、そのままシュランゲバイセンを頭上に放って自分の身を守ってや」

はやては悠斗が作り出したものが分かってシグナムにそう言つて自身もバリアバンツァーヒンダネスタイプの装甲を纏つた。その瞬間、シグナムのレヴァンティンに何かを切る感触がして、シグナムが恐怖を覚えると見えない存在がレヴァンティンが刺さつたままで噛み付いた。

「ぐああああつ!!!!」

「キヤアアアアツ!!!!」

同時にはやては装甲ごと地面に叩き落とされた。そしてはやてを叩き落とした存在は不可視の魔法、オプティハイドを使っている状態で追撃をかけようとはやてを追いかける。

(くっ、この蛇を早く何とかしなければ)

シグナムは自分を攻撃した存在は蛇だと中りをつけ、レヴァンテインを見えない存在に突き刺した。

ギャオオオオオオオツ！！！！！！

シグナムが刺した場所は急所だったのか見えなかった存在は姿を現した。

「「「「「なっ！！！！」「」「」「」

その姿にはやてと悠斗、そしてカノン以外驚きの悲鳴を上げた。

シグナムに噛み付いていた存在は爬虫類だったが、蛇よりトカゲに近い生き物で、10メートルはある体に赤い体、大きく強靭なあごを持つ絶滅動物。ティラノサウルスだった。

「何で古代の生き物！！！？？」

「というかどうやって召喚したんだ！！」

「……お兄ちゃんの幻術ってここまで出来たの！！」

流石に悠斗でも無理だと思っていたからフェイト、ヴィータ、世羅は悠斗たちに聞こえない程度で叫んだ。

そして全員で驚いている間にはやてが地面に激突し、追い討ちがかけられた。

「これで終わりだ！！ 蒼雷、一閃！！！」

悠斗は自分が使っていたオプティハイドを解いて電気を纏った剣での一撃・蒼雷一閃を放った。だがはやては背中の羽を使って地面すれすれで飛び、蒼雷一閃を避けた。

（流石に避けられたか。でも、簡単にノックアウトされても困るから助かったよ）

はやてがどうやってオレの幻術を見破っているのか気になっているから悠斗は手を抜いて戦おうとしていた。

「まだまだ行くぜ！イリユージョングレイブ、げんぶちようちよう幻舞蝶々」

「くっ、刃以て血に染めよ。ブラッディダガー」

今度は即効性の麻痺毒を持たせた蝶を幻術で無数に作ってはやてに向けて飛ばす。蝶はひらひらと舞うように飛び、不規則な飛び方をするせいでブラッディダガーは殆ど避けられはやてはどんどん追い詰められていく。

「やっぱり使うしかないか。来よ、白銀の風」

はやてはいきなり冷静になり出して呪文を唱える。それと同時に手に持っている魔道書も開かれ、はやての前に大小5つの魔法陣も現れる。

(あの本は夜天の魔道書の模造品? でも何すんだろ?)

オレははやてが何するのか期待して新しい幻術を作ろうとせずはやての様子を見守る事にした。

「天よりそそぐ矢羽となれ フレース、ヴェルグ」

「こ、広域殲滅砲撃!!!!!!????」

流石にこの魔法は予想できなかったからすぐに効果範囲から逃げようとした。だが、オレが逃げ切るよりも早くはやてから放たれた白い閃光は途中で拡散し蝶達を一斉に殲滅させた。ついでに蝶達を消す時間も惜しかったので蝶達に持たせた即効性の麻痺毒も四散し、オレとはやてが直に浴びた。

「いや、人を呪わば穴二つだったな」

「それ冗談になってないで」

オレはこの毒には慣れてるから軽く痺れる程度で済んだが、はやては毒が直ぐに回り、はしたない姿で地面に寝っ転がっている。

「いつの間に毒なんて持たしたん？」

「最初っから。あの蝶、幻舞蝶々って言うんだけど羽についている燐粉が即効性の麻痺毒になってね、幻術だったら何も問題ないんだけど実体化させたらご覧の有様にするんだよ」

「毒まで創造出来るなんて、何でもありやな」

「全然。毒といっても幻覚作用の影響だし、意志の力次第で抜けるのが早くなるし」

そんな風に毒が抜けるまではやての質問に答え、時間を潰した。

そしてある程度痺れが抜けた後はやてを抱きかかえて部屋の隅にいた。理由は、幻術で作ったテイラノサウルスがやつと倒され体の一部がオレ達の許もとに落下してきたのだ。実体を持つてる幻術は、幻術を解くより避けるほうが手っ取り早かったりするから避けるほうを選んだのだ。

「大丈夫か、はやて？」

「うん、悠斗君のお陰で怪我は一切ないんやけど、放してくれんか」

はやてはもじもじして顔を赤くしながらそう言い、オレは不審に思っても言われたとおりお姫様抱っこから下ろした。

「なあ、ほんとに大丈夫か？顔が赤いぞ」

あまりにも顔が赤いからはやての額にオレの額をくっつけて熱を測ってみたが、はやては若干微熱だとは分からなかった。

「ゆ、悠斗君、顔近い」

「あつ、悪い。イヤだったよな」

「べ、別に嫌ではないけど……………（ボソツ）」

「悠斗ッ！！主ははやてに何をやってしてる！！！！」

顔を真っ赤にしているはやてを心配していると、シグナムが遠くから怒ってきたので悠斗は幻影も織り交ぜて大蛇を作りまたシグナムに向かわせた。

第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力（中編）

作者「と言っわけで！ 悠斗にフラグを立ててみました！！」

悠斗「フラグって何のことだよ？」

作者「それはいずれ分かりますとして。

実体を持つ幻影って、シグナム置いてかれてたな」

シグナム「う、うるさい！！レヴァンティンの錆びにしてやる！！」

作者「うわっ、危険信号上昇！！ にげるわ」

そして作者は脱走し、シグナムが追いかけて行った。

なのは「あれはしょうがないんじゃないかな？」

悠斗君の幻影ってかなり精巧だったし、わたしでも置いてかれた

と思うよ」

悠斗「そりゃもう猛練習しましたから。逆に追いついてくるはやて

の方が凄い。

にしてもホントになのはの言うとおりだったな。はやてほどオレの天敵に

なりそうな人はいないだろ。

オレの幻影が実体を持つてるか分かるし、広域殲滅で全部に当てる事も

出来る。いや、二度と戦いたくないね」

作者「大丈夫！！ もう一回戦わせる予定だから！！！！

今度はヴォルケン全員と一緒に」

悠斗「お前、そんな暇あるのか？」

シグナム「掛ける！！隼！！！！」

『シユトルムファルケン！』

作者「あんぎゃああああああ！！！！！！！！！！」

なのは「あっ！！同じ悲鳴」

悠斗「ネタが尽きたらしい。まあいつか次回

『第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノン

の謎の能力（後編）<sup>『</sup>

ついにカノンの能力、ロストログリア殺しのオレの  
最強の切り札を切る<sup>シヨーカー</sup>」

シグナム「悲しみしか生まなかつた事件を思い出して、  
o f f t a k e  
」

第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力（後編）

すみません、今回ははやてとシグナムのキャラが壊れたかもしれませんが。

先に謝罪しておきます。

今回で悠斗たちの模擬戦は終了です。こんな駄文に付き合ってください。誠にありがとうございました。

一番長いですが、もう少しお付き合いください

第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力（後編）

「さて。シグナムを蛇と戦わせてる間にこっちも試験を続けますか。オレの幻影を見破る方法も聞きたいしね」

「それはバラさへんで。ウチが優位に立てる絶対の条件なんやから」

「それでは、意地でもバラしてもらいましょうか。幻影の覇者の一世代の曲芸さえ使って。

コンチェルト、イリユージョングレイブで暴風を」

『illusion grave mode：thunders  
torm』

オレの言葉にはやても不敵な笑みを浮かべ、互いに距離をとった。おまけでシグナムと戦わせていた大蛇も消し、暴風雨の幻想を作り出す。

なのはの視界にはいきなり雨雲が発生して雨が降り出したように見える。そして雨はどんどん激しくなり嵐とも呼べるほど強い風も吹く。

顔に張り付く雨水が痛みを与え、髪が濡れていき、雷鳴のような音も聞こえる。

「なっ！！！天気まで自由に操れるのか！！？？」

暴風雨の風を強く感じるのか前かがみになりながらシスコン2号がそう呟いた。他にも飛ばされそうになっていて、カノンだけが平然としていた。

(さっすがカノン。この程度の幻影じゃ何も感じないか。それに比べて、他のメンツはかかりすぎじゃないか?)

呆れたため息をつき、答えてやった。

「この暴風雨も偽物。風だってそよ風位しか吹いていないよ」

そう答えると全員が驚いた顔をした。悠斗が言っていることは痛みさえ幻覚だということだ。

「エイミィ、そっちのカメラはどうだ!!!??」

「こっちも同じ。雨で視界が分かりづらいし雷の音も拾ってる。これで幻術ってかなりすごいよ」

「ちっ!!」

クロノの質問にエイミィは驚きながら答え、クロノも舌打ちした。

悠斗が起こした嵐は元の環境に依存してないほどに強く荒んでいくから嫉妬して舌打ちしたのだ。

「じゃあ精神的にも削っていくね。無理だって感じたら教えて。  
コンチエルト、2ndフォルム」  
『了解 シュトルムフォルム』

悠斗はコンチエルトを大剣ふたつに変えてシグナムのいる場所を見つめた。

「セイツ!!」

「くっ!!」

そして一瞬で間合いを詰め右の剣を振り降ろそうとした。視界が悪  
い状態でシグナムはぎりぎりのところで気づき鞘で防いだ。

はずだった。

コンチエルトが鞘を通り抜け、シグナムの体を切り裂く。切り裂  
かれた傷口は勢いよく血を吹き出しシグナムに激痛を与える。

「うわああああああ!!!!!!」

「次は腕でも切り落とすか」

悪乗りしてそう言ってみたらシグナムはこっちが非殺傷設定を解除していると思ったのか自身も非殺傷設定を解除した。そしてオレももう一回コンチエルトを構える。

だがはやてがオレがやった事の答えを言った。

「シグナム！！惑わされたらあかん！！ 通り抜けたように見えるのも、血の吹き出した傷跡も、すべて幻影や！！！！」

「ですがっ！！ この痛みは本物ですよ！！」

「はやて、ネタバレすんな。こっちがツマンないだろ」

はやての言葉にシグナムとオレで別々な事をツツコんでシグナムがオレに疑いの視線を向けた。じつははやてが言ったとおりシグナムは一切怪我を負っていない。コンチエルトだって普通に鞄に止められたし。通り抜けたように見えたのも、吹き出した血もすべてオレが見せた幻影ニセモノだ。

シグナムははやての言葉のオレの言葉も信じられないようで未だに怪我を押さえている。その様子について観念してオレもネタ晴らしする事にした。

「感じた痛みもニセモノに近いよ。ただ、信号が脳に来るんじゃないよ。脳から信号が送られているけど」

「どういことだ？」

「これは心理学で有名な実験結果だけど、

一人の男性に一度赤く光るまで熱した鉄棒を見せて、目隠しをする。そしてその男性に『今からさっきの棒を当てますよ』と言って何の変哲もない鉛筆を当てました。そしたら凄惨な事に苦しそうな悲鳴を上げながら鉛筆を当てた所がどんどん火傷を負っていったんだよ。

つまりその男性は鉛筆を棒だと思ってるから自己暗示でその場所に火傷を作ってしまったんだ。オレも似た様な事をして精巧に血が飛び出すところを再現したからその人の脳に切られたという信号がいつ切られた場所にもいない痛みを感じる。

この嵐だつてそうだよ。激しい雨が見える。強い風が吹いてる。濡れて当然だ、飛ばされそうになって当然だ。なんて無意識に思っているから前かがみに立ってないと辛い。カノンは幻影だと分かっているから平然としてるんだよ。はやてもね」

シグナムは予想をはるかに上回った原理にポカンとして動きを止め、悠斗の使う幻影の恐ろしさを間近で思い知った。

「よし、今度はヒグマで行こうか。ついでに大鷲も追加だ」

悠斗はそう言って新たな幻術を何十体も作る。

「ちょー！多過ぎやでー！」

流石のはやてでも今度の数には悲鳴を上げ、広域殲滅魔法の準備をする。

が、あいにくオレは悠長な性格はしていないからはやての魔法をつぶしにかかった。実体化していながら見えなくした大鷲を数羽はやてに向けて飛ばし、はやては大鷲の攻撃を避けながら詠唱を続ける。

だが、逃げた先おいこんだに透明化と実体化をしたヒグマを10体ほど配置して罠にかける。はやては気付かぬままヒグマの中に突っ込んでいった。

「なんてな。罠にかけられたフリをして罠に嵌めたんや！！ 遠き地にて闇に沈め ディアボリック・エミッション！！！」

はやてはヒグマの群れの中から広域空間攻撃魔法を使った。

はやての出した黒い球体はオレが作りだした幻影、つまりヒグマや大鷲、そして空に広がる暴風雨もすべて呑みこみ、オレにさえ手傷を与えた。

だけど、油断している今ならばやてを背後から討ち取れる！

オレはそう考えてミラージュハイドを使い、はやての背後に回った。

「甘いで。悠斗君の居場所は把握しとる」

はやてはそう言って自身の背後にブリューナクを撃つ。連続で放たれる白い光弾にオレは押され、しかたなくまた距離をとり、あたりに幻影の霧を発生させる。

一時凌ぎにもならないだろうが、これでごまかされてくれよ

さすがにここまで相性が悪い相手と戦ったことはなかったので滅多にやらないことを、霧に実体をもたせることをしてみた。

霧に実体を持たせることで、霧が壁の役割を果たしある程度まで守ることができる。

筈だった。

「今度は霧に実体をもたせたんか！ あかん、悠斗君の反応見失ったわ」

「大丈夫ですよ。主はやての策は成功しています。この霧の中からは出てないでしょう。出てきた時にまた捉えればいいです」

はやてとシグナムのそんな会話が聞こえて悠斗ははやてがやっていることのある結論に至った。

そして、その結論が正しいか確かめてみることにしてみた。

「悪い、待たせた!!」

一瞬で霧を晴らして大蛇600匹を仕向ける。ほかに自分の背後に10匹も仕向ける。

「悠斗、それは多すぎだ!!」

「大丈夫や、シグナム。ほとんど幻影、実体は1匹、いや、2匹だけや!!」

シグナムは悠斗君の背後の右から3番目を頼む！ クラウソラス  
「!!」

オレが作りあげた幻影にシグナムが文句をつけてきたがはやてが言葉で制し、600匹の中から本物を見つけて的確に打ち抜く。シグナムも飛竜一閃で背後にいた実体をもつ幻影を破壊した。

オレの心境に驚きはなく、むしろ自分の予感が正しかったことを嬉しく思った。

「魔力をソナー代わりに使ってたのか。たしかにそれなら的確だな。実体の有無は余裕で分かるしどこにいるかもわかる。オレにとってこれほど厄介な技術はないだろうね」

「もうバレたんか。そやで、ウチの中にある膨大な魔力を使って悠斗君の反応をずっと見とったんや。

まあウチならではの方法や」

オレが推測を言うとはやてが呆れたように答えてくれた。

これは幻術師にとって致命的な弱点になりそうだ。

「そんなことを簡単にできる人がポンポンいてたまるか。

でも、苦しめられた分お返ししてやるよ。 カノンッッ！！

「！

「やっと？待ちくたびれて死にそうだったよ。 ユニゾン・イン」

カノンがそう言うとカノンはオレの体の中に溶け込み悠斗のからだに変化が起こった。

灰色の髪はなめらかな黒髪になり、長さも悠斗の伸長を軽くこし

てる。瞳は黒から血に染まったような紅に変わった。

「カノン、いつもの頼む」

『はいはい、お任せなさい。空間遮断』

カノンは一冊の魔道書の力を使ってオレとはやてとシグナムを閉じ込めた。ちなみにこの空間、中が誰にも見えない、というか認識できないようになっていてサーチャーにも映ることはない。

そしてオレはカノンから2対の魔道書を受け取る

「その魔道書、どこかのデータベースで見た気が？」

はやては不思議そうに魔道書のほうを見つめるが、シグナムは逆に強張った顔でオレを、いや、オレとユニゾンしてるカノンを睨むように見る。

「その力は、まさか、《万巻の聖母》なのか」

「あれ？シグナム、何か知ってるん？」

「って思いだした！！！！ ロストロギアの情報が乗ってるデータベースや！！確か名前は《聖騎士の書》と《黒騎士の書》で……って、………なんで悠斗君が………持つて………るん？………」

「あのロストロギアは本物であって本物ではありません！！！！！！」

悠斗が持っているのはロストロギア登録を受けてない最強のロストロギアです！！！」

シグナムは怒りをこらえながらオレに剣を構える。

「黒騎士の書、ドライブ」

『イグニッション』

オレの言葉に反応して黒騎士の書から機械音が出て黒騎士の書がオレに侵食する。侵食した直後に右腕が黒ずみ、バリアジャケットの上に黒い騎士甲冑が装備され、背中から黒い翼が生えた。

『聖騎士は起動しない？』

「ああ、対人だし、そこまで大袈裟にしなくていいだろ」

カノンとそんな会話をしているときいきなりシグナムが襲ってきた。だが、黒騎士の書の力、空間消滅を応用してレヴァンティンの刃を消滅させる。

だがシグナムはお構いなしにレヴァンティンを再生させてもう一度切り裂こうとする。



アという名はもう捨てたの。夜天の書の管制人格がリインフォースという名前をもらったようにね』

「なんで夜天の書のこと知っとるん？」

「今から言うことを誰にも喋らないって約束するなら教える。カノンもそれでいいね？」

『悠斗がそう決めたなら納得する』

話についていけなくなったのはやてがさらに疑問符を浮かべたので、オレは助け舟を出した。

「内容による」

「どこかの政治家かよ。まあいいや。カノン、あとで《不存の書》を出して。

カノンは元々《万巻の聖母》って言って、ロストロギアでありながらその存在をあまり知られていないんだよ。それはカノンの能力に理由があるんだ」

「能力？」

「そう、能力。カノンは魔道書系ロストロギアの支配、管理、修復、破壊をするんだ。簡単に言ってしまうえば、夜天の書が闇の書に身を落とした時に、元の夜天の書に戻したり、修復不可能と判断して闇の書を存在しなかったことにしたりすることが出来るってこと。

まあ闇の書は直すことが出来たらしいけどね」



オース？が詠唱して三角形の頂点に光をためる。よく見たら空気になつていたシグナムも弓のボーゲンフォームに変えてシュトルムファアルケンを放とうとしていた。

「はあ、軽く消し飛ばすか。

我、求むは神の審判 咎人に裁きの鉄槌を下せ……」

オレは深いため息をついて上空に手を向け呪文を唱えた。詠唱が進むにつれてオレの頭上に巨大な漆黒の魔法陣が展開される。

「ラグナロク……！」

「駆けよ、隼……！」

『シュトルムファアルケン』

はやてとシグナムはオレの向かって魔法を撃つたが、

「ジャツジメント」

黒騎士の書にのっている絶対破壊魔法・ジャツジメントを放つて、ラグナロクとシュトルムファアルケン、そして今はやてとシグナムが持っている魔力、オレが閉じ込めた空間を完全に消滅させた。

「い、一体なのが起こつたの!?!?!?」

「いきなり三人が消えたと思ったら突然現れてはやてとシグナムは倒れてるし、悠斗は右腕が黒ずんでるし」

「……お兄ちゃん、あとでじっくりとO H A N A S H Iさせて」

元の空間に帰るとなのは、フェイト、世羅がそう言った。

てか世羅はカノンの力を大まかに知ってるじゃん

そう思ったが、口には出さなかった。

ちなみに悠斗が世羅に教えていることは、ごく一部の魔道書を呼び出して使えるというだけ。ロストログリア云々については一切教えていない。

「そうだった。カノン、チェーンバンやっつくよ」

「オツケー。その為の《不存<sup>コレ</sup>の書》だったんだね」

「ああ。チェーンバン発動」

他人の記憶・行動を支配する魔道書型ロストロギア《不存の書》  
に載っている魔法の一つをはやて、シグナム、ヴィータ、シャマル  
にかけた。ザフィーラには後でかけておくか

そして掛け終った直後にヴィータがグラーフアイゼンを振り下ろ  
してきた。オレはとっさに黒騎士の書の空間消滅で消した。

「いきなり危ないことするな」

「ウツセー!!! を渡せ」

オレは愚痴を言ってみたが、ヴィータはキレたまま何かを渡せと  
言っている。まあ何を渡せと言ったのかだいたい想像はついたが渡  
すわけにもいかないので正論を言ってみた。

「いや、発音できてないから何を渡せって言われても分らん」

「そつだよヴィータちゃん!!! 思いは言葉にしないと」

なのはがオレのフォローに回ってくれた。その言葉にヴィータは  
さらにキレ、グラーフアイゼンを再生させて振り回す。

「ああ、もう!!! カノン、詠唱よろしく」

一方的に用件を言ってしゃがみこんでグラーフアイゼンを避け、タツクルをかます。体の小さいヴィータはタツクルを受けて簡単に飛ばされてしまった。

それでもヴィータは飛ばされながら体勢を立て直し、グラーフアイゼンをギガントフォルムに変えて頭上に構え、

「ギガントシュラークッ！！！！！！」

叩く部分の面積が増させながら振り下ろした。

だが、ヴィータの攻撃が届く前にカノンの言葉が聞こえた。

『詠唱完了。いつでもいけるよ』

「ありがと。アクセルブリッツ…ディザスター……ッッ！！！！！！！！！！」

暴風と竜巻と雷雲を集束して砲撃魔法とし、ヴィータに向けて放った。

放たれた砲撃はギガントフォルムのグラーフアイゼンを簡単に飲み込んで、逃げる方法の無くなったヴィータを飲み込み、吸い込まれた鉄板も飲み込み、最後には飲み込んだものすべてを壁にたたき

つけた。

アクセルブリッツディザスターを受けたヴィータは中で全方向から攻撃を受けたせいでそのまま意識を手放す。

「さて。終わりだけど、どこに行こうか？」

「その前に《黒騎士の書》を渡してくれ」

オレが逃げようとする前にクロノが目聡く気づいて渡すよう言った。

シスコン2号め、気付くんじゃねえよ。しょうがないか

「黒騎士の書って何のこと？」

「カノン、本物の100億分の1にまで抑えて黒騎士の書を作って」

「別にいいけど、そこまで抑えたら意味ないんじゃない？」

オレは表ですっ惚けながらカノンに頼んだ。カノンはあまり乗り気じゃないのか軽く作っただけでタヌキ寝入りした。

「お前の手にある魔道書のことだ」

「はいはい、これでいい？」

オレは手に嵌めていたものをカノンに返して新しく用意してくれたものを差し出した。

「ああ、十分だ。それじゃ結果は期待しておいてくれ」

クロノはそう言って試験場から立ち去り、オレは自己回復に努めた。といっても自己暗示みたいなもので自身に幻術をかけて痛覚を排除していくだけだが。

そして数時間後、なのはとフェイトを相手に談笑して時間を潰し、やっと試験結果を届けにクロノがやって来た。

「結論から言えばふたりとも嘱託魔導師試験は合格だよ。世羅の希<sup>アスキル</sup>少技能も危険ながら認められ、悠斗が保有していた黒騎士の書はニセモノだと言ったことが判明、返すことになったよ」

「それは良かったよ。アレはオレの攻撃の要だからね」

「ただまあ、ニセモノとは言えロストロギアと融合するなんて無茶は控えたほうがいいぞ。絶対に体を壊すからな」

「シスコン2号は心配性だな。6年前から使い続けてるんだから、

体が慣れたよ」

そういえばカノンと初めて会ったのが中規模次元震が起こった時だからもう6年だったな。

その後もいろいろうるさく言ってきたが、軽く返して無視した。

「合格おめでとッ！！！」

「これからも一緒に頑張ろうね！！」

なのは、フェイトはそう言って祝ってくれたが、はやてとヴォルケンリッターの皆はオレを恨めしそうな目で見ていた。いや、実際恨んでいるのだろうか。何も出来ないオレとカノンを

第8話 悠斗対シグナム・はやて 苦戦する悠斗、カノンの謎の能力（後編）

作者「はあ、やっとカノンの能力を出せた。コレで一安心」

悠斗「ありえないほどチートだけだな」

カノン「いいじゃん！その分悠斗を強く出来るし」

作者「さて。今回は《不存の書》の力で誰も喋れなくなったのでこの3人で話

を進めます」

悠斗「とりあえず《不存の書》について説明だな。

この書は本文にあったとおり他人の記憶・行動を支配する魔法<sup>トログキア</sup>道書です

今回使ったチェーンバンと言う魔法は設定した言葉とそれに関連する言葉を

喋れなくする魔法だ」

カノン「ちなみにこの《不存の書》は相手に無理強いするから逆らう事は出来ま

せん。例外はあたしと悠斗のみ」

作者「いや、他人に強盗だつてやらせ放題だよな」

悠斗「お前にかけて強盗させようか？」

作者「それは勘弁。それと、夜天の魔道書を修復しなかった理由ってまだ喋ら

ないでね。いずれバラすつもりだから」

悠斗「ああ。もとよりそのつもりだったからいいぞ。だけど、続くといいな」

カノン「案外作者の精神が燃え尽きて続かなくなるかもね」

作者「ははは、努力します（汗）」

悠斗「それと蒼妃様、《聖騎士の書》と《黒騎士の書》をこんな駄文に貸して

下さってありがとうございます！！！」

カノン「それでは次回

『第9話 囑託魔導師としての初任務（前編）』

明日に向かって take off!!」

作者「言う場面が分かりませんでした。万巻の聖母の名は

『漂う書庫のヴェルテ・テラ』から抜ってきました」

悠斗「またこの作者はパクってきたのか。ぐだぐだに終わってすみません

今回はカノンの力がかなり分かりづらいと思うので疑問があったら感想に

書いてください」

## 第9話 囑託魔導師としての初任務

試験に合格して10日後、オレに任務が言い渡された。

それは、ロストロギアの護送だ。簡単な任務で護送対象がロストロギアな分なのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッターが共に行くことになっている。

だから、オレと一緒になのは、フェイトも教室を出る。

「じゃ、行ってらっしゃいフェイト。授業のノートは取っとくからね」

「うん！ありがとうアリサ」

「なのはも気をつけてね」

「はぁーい！」

「悠斗もまた明日ね」

「おう、由紀ゆきもまた明日」

アリサはフェイトとなのはに挨拶をして、オレは井上由紀と挨拶する。

由紀はなのは達と知り合って数週間後に友達になった。そこらの女の子より女の子らしい男（つまり男の娘）で、本人も徹底した女装好きだったりする。

オレ達ははやてを待つて、屋上でバリアジャケットを纏い、転送装置で任務地にまで飛ぶ。

「ほう、ずいぶんと荒れた大地だな」

『ロストロギアが眠ってるくらいですから一度滅んだのでは？』

荒野が広がる世界。その光景を見たオレの感想にシンフォニーがまじめに返してくれた。

早速、北部定位置観測基地から古代遺物ロストロギアが発掘された場所を聞くために空を飛ぶ。

しばらく飛び続けているとエイミーから通信が入った。

『分かると思っけど任務の確認をするよ。』

その世界にある遺跡発掘先を二ヶ所回って発見された古代遺物ロストロギアを確保。そしてモノを受け取ってアースラにまで護送することだよ。』

「平和な任務だな。ま、楽しそうだからいいか」

『護送対象は古代遺物ロストロギアなんだから油断は禁物だよ!!』

「こんな体制では緊張感を持つなんて無理だよ。こつちにはAAA以上が4人、しかももう一か所には夜天の書の守護騎士3人+天災1人。多少の天変地異も何とかできてしまいそうだし」

『まあ気持ちは分かんなくてもないけど油断はないようにね』

エイミィはそう言って通信が切れた。

それからしばらく飛び続けていると、あるものを見つけた。

「あ、アレじゃないかな？基地って」

たしかにフェイトが指した場所に立派な建物があった。

「だね。じゃあ降りようか」

なのはがそう言ってオレ達も高度を落とし、着地する。

「遠路はるばるお疲れ様です！本局管理補佐官グリフィス・ロウラ  
ンです！」

「シャリオ・フィニーノ通信士です！」

「ありがとう」

出迎えてくれた二人の局員になのはは敬礼を返す。

「ご休憩の準備がしてありますので、こちらへどうぞ」

「あ、平気だよ。すぐに出るから」

「ウチらがこれぐらいの飛行じゃ疲れたりせえへんこと、グリフィス君も知っとるやろ？」

グリフィスの言葉になのはとはやてが軽く返す。

「はい……存じ上げてはいるのですが……」

？ 何を焦っているんだ？

なのはとフェイトも頭に疑問符を浮かべ、はやてはやつとそれに気づいて紹介した。

「あつ、2人は会ったことなかったな。こちら、グリフィス君。レティ提督の息子さんや」

「はじめましてー」

「「あー！」「」

はやての紹介になのはとフェイトは大きな声を上げながら納得した。

「あの若づくりのおばちゃんか。あの人まだ現役だったんだな」

「あれ？悠斗は知ってるの？」

懐かしい名前に郷愁感を感じていると、フェイトが質問してきた。

「だいぶ昔に父さんに協力を要請しに来たことがあって、その時に会ったことがある。その時に息子さんもいたからこの人とは初対面じゃないと思うけど」

「すみません、忘れました」

「別にいいよ。結構古いし、あれはトラウマになりそうだし」

むしろ逆に忘れてくれた助かったって思いだし。

「でもフィニーノ通信士とは初めてだよね？」

なのはの警戒するよつな質問にオレが答える前にシャリオさんが口を開いた。

「はい！！ でも皆さんのことはすごく知ってます！！」

本局次元航空部隊のエリート魔導師フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官！！ いくつもの事件を解決に導いた本局地上部隊の切り札八神はやて特別捜査官！！ 武装隊のトップ航空戦技教導隊所属！不屈のエースの高町なのは二等空尉！！

陸海空の若手トップエースの皆さんとお会いできるなんて光栄です！！！！！！」

もしかしてこの人、時空管理局マニアみたいなものか？

さすがの3人も困ったようにしか笑ってない。

「リインフォースさんのことも聞いてますよ！とつても優秀なデバイスだって！」

「ありがとうございますです！」

へえ、なのは達はある程度予想してたけど、あんなにちっさいのにリインフォース？も有名なんだ。

「むっ！ いま何かバカにされたような気が」

「気のせいだろ」

リインフォース？め、意外と鋭い

リインフォース？の言葉に間髪いれずそう言い、話を進めた。

「えーと、どちらさまでしょうか？」

「こらシャーリー、失礼だろう！！」

「あ、すみません！私ったらつい！！」

「別に構いませんよ。数日前に入局しただけですから。囑託魔導師の日向悠斗です。どうぞよろしく」

「えっ……………囑託の日向悠斗って、あの！！！？？」

あのって、なんで噂になってるの？

「なあ、なのは。オレ、何かしたっけ？」

「してない……………と思う」

その間は何か聞きたいんだがいいか？

そう言う前にシャリオさんが口を開いた。

「別に悪い噂ではないですよ!! 囑託魔導師試験を満点でクリアし、サーチャーでさえ誤魔化すほどの幻術を使ってはやて特別捜査官捜査官やシグナム三尉を倒したという話題で持ちきりなんですよ」

このメンバー、そんなに有名どころが多いのか。とりあえずこっちが恥ずかしいから話を逸らそう!!

「そういえばシャーリーって呼んでたけど、仲良し?」

「す、すみません! 子供の頃から仲良しだったもので……………」

別に謝らなくていいと思うけど…………アレの件もあるし。

「幼馴染だ!!」

「いいね、わたし達も幼馴染なんだよ」

「幼馴染の友達は貴重なんだから……………大事にしてね!!」

「はい!!!!」

そんな会話をしてオレ達は基地から飛び立ち、ロストロキア古代遺物のある遺跡へ向かった。

『皆さんの速度ならポイントまであと15分ほどです。古代遺物の受け取りと艦船への移動までナビゲートします』

シャーリーとの通信はそこで切れ、3人は雑談を始めた。

「しかしわたし達も 6年目か」

「中学も今年で卒業だね」

「卒業後は今より忙しくなるかな」

なのは、フェイト、はやての順にそう言い、俺は会話に参加せず黙っていた。オレのような偽善者がこの3人の会話に参加する資格はない。

「わたしは長期の執務官任務を受けることになるし」

「わたしも教導隊の一員としてあちこちを回ることになるね」

「ウチは卒業の少し前にミッドの地上に引っ越しや」

へえ、ミッドチルダにねえ……………いつその事オレ達もミッドに引っ越そうかな

「ミッド首都の南側で家族6人で暮らせる家、エー感じのところを探し中や。決まったら遊びに来てな」

「うん！」

「行く行く！！」

「そういえば、悠斗君はどうするん？」

「ん？」

「中学卒業したら、どないするん？」

オレが考え事をしているとはやてが聞いてきた。

ま、言っただけか。

「高校までは通つつもり。そのあとは分からない。もともとは世羅の元から去るつもりだったけど、世羅が魔法と向き合い出したから。最近地球から去る時は世羅も連れて行くかどうか考えてる」

「その時は悠斗君のデバイスさんたちも一緒？」

とりあえず今考えてることを言つと、はやてはオレに冷たく問う。

「悠斗君、あの時のことって」

「ああ、修復出来たよ」

オレははやてが何を言いたいのか察し、そう返した。そして、カノンの気持ちを考えて、はやてが言い出す前にオレが言う。

「ついでに『何で修復してくれなかったの？』なんて聞くなよ。そんな願望、自分勝手すぎる」

“聖母”の存在を知らなきゃ、こんなに傷つけることもなかったんだよな。やっぱり、カノンの力は使うべきじゃなかったのかも。ま、今更後悔したって遅いか。

オレは深い後悔を抱きながら飛び続ける。

「あ、見えてきたよ……でもあれって……」

なのはがそう言い、オレ達もなのはの視線の先を見た。そこには遺跡が見えるのだが、黒い煙がもうもうとあがっている。そして、その先には人がカプセル型の機械に襲われていた。

「現場確認、機械兵器らしき未確認体が多数出てきてます!!」

「ん!!」

「フェイトちゃん!救助にはわたしが回る!!」

「じゃあオレは、未確認を全部破壊するか」

「わたしは遊撃する。はやてとリインは上から指揮をお願い!!」

「了解!!」

リインフォース?の報告に頷いてからなのは、オレ、フェイト、はやての順に喋ってやるべきことを考え、散開する

「この程度の相手にユニゾンするまでもないな。ライティング」

細い電流を流してカプセル状の機械を壊そうとした。

「何っ!?!」

電流は機械を避けるように回り込んで消え失せた。

「あれは、フィールドエフェクト!!???」

「悠斗君、下がって!!」

なのはオレにそう言ってディバインシューターを放つ。オレはなのは言う通りに従い、機械から離れた。その直後にディバインシューターは機械に当たろうとして、無効化された。

「やっぱりAMFか」

「AMF!!??.....なんでAAAランクの魔法防御が機械兵器に!!??」

オレの独り言にフェイトが鋭く反応したが、気にせずコンチエルトを抜いて

「蒼雷 一閃!!」

蒼い雷を纏わせ、機械を切り裂いた。

「悠斗(君)、避けて!!」

へ?

頭に疑問符を浮かべ、空を見上げるとその言葉の意味を理解した。

「うおおおおお!!!」

なのはのスターダストフォールと、フェイトのサンダーフォールがオレと機械の頭上から降り注ぎ、攻撃してきた。オレは無傷で、機械たちはほとんどが直撃を受けて壊れた。

「なのは、フェイト、いきなりは危ない」

「ちゃんと避けてって言ったよー？」

まあね〜。それに突貫したオレも悪いし。……………て、あら？

オレは不意に気付いた物があつてはやてに声を掛けた。

「はやて、アレの捕獲できる？」

「アレ？ ああ、リイン、お願いできるか？」

『ハイです!! 捕らえよ凍フリーレン・フェッセルンてつく足枷』

はやてが頼むと、逃げ出そうとしていたカプセル状の機械はリインの魔法によって氷漬けにされた。

さて。古代遺物は無事かな？ 確認しているフェイトの様子を見

る限り古代遺物は無事らしい。

「じゃ、古代遺物の無事を確認したところで、本番と参りますか。そうだろ、コルギア？」

オレはなのは達が気付いてないであろう背後に向かって声をかけた。すると蜃気楼が現れるように一人の男が姿を現す。

手には一DNAのようなデバイス（ギャラホルン）を持ち、数日前になのは達のリンカーコアを奪おうとした男のコルギアだった。

「いつから気付いてやがった？」

「オレ達が基地を出発してからだな。この古代遺物が欲しいのかと思っただけで放置しておいた」

「気付いてたんならばよ言わんかい！！」

「いや、仲間がいる可能性も否定出来なくて」

はやてのツッコミにオレは不甲斐なさそうに答えた。

「おかげで仲間ももう3人いることが分かったよ。」

「ふん、そこまでお見通しか。ああ、確かにもう片方に2人行って

るぜ。もつとも、助けに行かせはしないがな」

「もう片方？ シグナム達の所か！！」

はやては『もう片方』の言葉の意味を理解し、コルギアは肯定するよつにニタニタ笑いを続ける。

「じゃ、コルギアの相手をよろしく。オレは未だに隠れてる女の方を倒してくるよ」

オレはなのは達にそう告げて飛んだ。

着いた先はさつきと殆ど変わってないが、一つだけ変わったものがあった。それは、その場に出ている気配の濃さだった。

「さてと、いい加減出て来い！」

気配のする場所に向かって叫ぶと強風が吹き、その女性が現れた。

女性は眼は紫色で、ピンク色の髪（シグナムの髪より赤に近い）で、甲冑のようなものを纏い、手には普通そうな双剣、背中に2メートルはありそうな大剣を背負っている。

「コルギアの誇張かと思ってたのだけど、かなりの実力者のようね」

「お褒めに預かり光栄ですよ。ですが、そちらもかなりのてだれの用ですね。名前を教えてもらって良いですか？」

「ふふつ、面白い子ね。カリーナ・グランチエアよ。貴方は？」

「日向悠斗。こっちはユニゾンデバイスのシンフォニー」

女性はゆつたりとした立ち方をしているが、纏う空気も隙の無さも一流だった。

近接戦闘で勝てるかな？ いや、勝つしかないな

女性が見せる偽の隙を無視して本当の隙を待つ。が、女性が唐突に終わりを告げた。

「互いに隙を窺いあっても時間の無駄ね。コイントスで決めましようか」

カリーナはそう言って胸の隙間から光を反射するコインを取り出した。

どっやって入れてたの？

一瞬そんな疑問が頭に浮かんだが、すぐに振り払った。余計な事を考えて勝てる相手じゃないのは見た瞬間から理解していたはずだ。気を抜くな!!

自分に喝を入れて隙だらけの状態からコンチェルトを構える。

「それじゃ、いくわよ」

カリーナはそう言ってコインを打ち上げ………  
小さな金属音を奏でて地面に落ちた。瞬間にオレ達は駆け出した。

「セイツ!!!!!!」 「やあああああつ!!!!!!」

「じゃ、コルギアの相手をよろしく。オレは未だに隠れてる女の方を倒してくるよ」

悠斗君はわたし達にそう告げて飛んでいった。

「カリーナの方に行くとは、あの餓鬼死んだな」

「勝手に人を殺すな！！悠斗君には聞きたいことがあるんやから死なれたら困るんや！！」

コルギアの言葉にはやてちゃんが食って掛かった。

「無理だろ。カリーナは俺達シャードキヤスターの中でかなりの強さを誇ってるからな、」

「シャードキヤスターって！！構成員にアストンって名の男はいる！！？」

コルギアの問題の一言に反応してフェイトちゃんが問い詰めるように質問した。

「アストン？ いるぜ。語尾に意味不明なもんつける奇人だろ。もう片方の襲撃をしているが、何であいつの名を知ってたんだ？」

「家族を殺された人がいるから。それで、強行突破する理由がひとつ増えたから全力で行くよ」

コルギアの質問にはわたしが返してレイジンググハートを構え、

『アクセセルシューター』

「シューーッッ!」

8個の桜色の光球、アクセルシューターを放った。

「前に俺が勝った事忘れたのかよ。今度こそリンカーコアを奪ってやる!」

コルギアはそう言ってギャラホルンを振るい、アクセルシューターを壊すがその隙にわたしはエクセリオンバスターを撃つ。コルギアは咄嗟にわたしの砲撃に気付いて避けた。だけど、

「わたし達も忘れたらダメだよ」

フェイトちゃんがコルギアの先回りをしてバルディッシュを右に振りぬいた。しかしコルギアはその攻撃にも気付いて体をそらして避ける。が、ブラッディ・ダガーがコルギアに命中し爆炎に包まれた。

「はやてちゃんナイス!!行くよ、レイジングハート!!デバイス  
イイインバスター!」

「ぐっ!」

わたしの自慢の砲撃が爆炎に包まれているコルギアを撃ち抜き、コルギアの苦悶の声が聞こえた。

ちょっとやりすぎちゃったかな

そう思っていると不意に危険と感じ、防御する。

『プロテクション』

「アメエ！！！！ バウフアング！！！！」

わたしのデイバインバスターを受けても平然と立ち上がったコルギアは叫びながら黒い光をわたしに放ってきた。だけど、特性がわかってる以上、対処するのは容易い。

すぐにプロテクションをもう一枚追加して、一枚目のプロテクションは通り抜けたが2枚目のプロテクションでぶつかつた。

あれ？なんか予想してたのと違う

本当は2枚目を通り抜けた時点でバリアブレイクをして相殺させるつもりだったのに、予想に反して2枚目を通り抜ける事が出来なかったのだから驚いて動きを止めてしまった。

「戦時に考え事とは余裕だな！！」

コルギアはそう言いながら槍で突こうとするけどその前にフェイ

トちゃんがプラズマランサーを落としてコルギアの邪魔をする。

そのちょっと前、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、世羅はもうひとつの発掘現場に来ていた。

「それでは古代遺物<sup>ロストロギア</sup>、確かに受け取りました」

シグナムが研究員の人にそう言い、古代遺物<sup>ロストロギア</sup>を受け取った。

「そのロストロギア、奪っていくZE」

不意にうしろからそう言われて全員振り返ってそっちを向いた。

「誰だお前は？」

「俺の名はアストン・マーティン。お前達を消す者DA」

男の名前に世羅が激しく反応し、顔を俯かせて男にひとつ問う。

「……………モミジ・ランスター。この名前に聞き覚えは？」

「聞いたことはあるGA、どうでもいいNA。殺した奴の名前なんていちいち覚える気はないNA。……………いいYA、思い出しTA。あのブスは俺に『フォールダウン』させた人間のひとりだったNA」

「……………そうなんだ。良かったよ、思い出してくれて。忘れてたら、一瞬で殺しそうだったから」

世良の纏う空気が一瞬で冷たいものになった事に気付いたシグナム達は世羅から距離をとった。

「……………コイツとは、ひとりでやらせて」

世羅は穏やかなように頼んだが、シグナム達には脅迫と感じて迷い無く何度も頷いた。

「……………良かった。殺るよ、ゼルダ」

『yes, sir. charging form』

そして歴戦ヴォルケンリッターの戦士達は世羅が気配を抑え組む事を放棄した瞬間に世羅の纏う空気がなんなのか理解し、恐怖を抱いた。世羅が纏って

いたのは歴戦の戦士であるヴォルケンリッターでさえ体験したこと  
の無い重たく、濃密な殺気だった。

「氷牙一閃」

世羅は不意打ちでゼルダを振り、螺旋型の白い光で攻撃する。  
アストンはその魔法の危険度を直感的に感じ取り、自分のデバ  
イスとパイクを取り出して組み合わせる。

「デバイス重複『エルスパイク』」

アストンは三叉の突撃槍を出し氷牙一閃と打ち合った。エルスパ  
イクとぶつかり合った氷牙一閃は相殺されたが世羅は気にした様子  
もなく5メートル大の氷槍を12本作り、アストンに向けて飛ばし  
た。

アストンは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに避けようと氷槍の隙間  
を縫うように動いた。が、氷槍はアストンの周辺で碎け散りアスト  
ンに氷の破片を当てる。それは数が多すぎて避ける事は叶わなかつ  
た。

「動きは止めた。これで苦しんで。 氷弾閃」

世羅は目の前に小さな氷を作り、弾丸のように尖らせて撃った。

水弾閃は一直線に進んでアストンの腹部に入り込んで、体温で温められて水蒸気爆発を起こした。

本来ならここで体が砕け散ってるはずだが、世羅はまだ殺す気がないから体が上下に分かれるだけで済んだ。

「この程度じゃ殺さないよ。お母さんはもっと苦しんだんだから、その分苦しめてあげる」

世羅が浮かべたのはとても冷酷で、残忍で、悲鳴と人殺しを楽しむような笑みだった。

ちょっと時間を戻して世羅がアストンに攻撃した頃、ヴォルケンリッターは邪魔しないよう念話で会話していた。

「これ、手を出したら殺されそうだ」

「いや、間違いなく殺すだろうな。そんな生易しい殺気じゃなかった」

「こんな殺気を出せるなんて、囑託魔導師試験のときは手を抜いていたってことか」

「だろうな。こんな殺気を放てる奴が相手を殺せないはずが無い」

ヴィータ、シグナムは念話でそんな会話をし、ヴィータは落ち込んだ。その様子を見てザフィーラがひとつ提案した。

「……ではあの子を置いて先に護送するか」

「それはダ・メ・よ」

念話だったはずなのにドコからか声が聞こえた。3人は声のする方を向き、40代前半の男？を見つけた。

そいつはムキムキの肉体をしているのだが、女物のビキニに黒マントと見るにおぞましい姿だった。

そんな奴にヴィータが声をかける。

「おい！変態！……！」

「だーれが変態よん……！」





「ヴィータ！！！」

「貴様、何者だ！！！」

シグナムはヴィータを心配して声をかけ、ザフィーラは変態に問い詰めた。

「私はね、ギャラン・ハント。盗賊団シャードキャスターのひとりよ。ちなみにこの槌はコニー、そしてこの銃がグッピー、両方とも私のデバイスよ」

変態、もといギャランはいつの間にか持っていた拳銃をシグナムに見せた。

シグナムはレヴァンティンをギャランに向けて警戒しながら聞いた。

「お前らの目的はなんだ！？」

「世界を支配することよ。だけど、私達は弱いから、消えた存在を復活させてこの世界に混乱を招くの」

「そんなこと、させるわけには行かない！！！」

「意地でもさせてもらおうわ！！！」

シグナムが切り裂こうとするとギャランは不吉な笑みを浮かべて返す。

シグナムはレヴァンティンを横に振ったが、高く跳躍する事で避けた。

「今度はこっちの番よ。メタルスプレッド！」

ギャランはコニーで何百と言う鉄球を叩き、地面に落とした。その数は防げるものではなく、まさに『数うてば当たる』を体現したような攻撃だった

「くっ！！レヴァンティン、甲冑を！！！！」

『パンツァーヒンダネス！！！！』

「守れ、鋼の軛」

シグナムとザフィーラは互いに身を守るために防御魔法を使った。

「ほらほら、もう手詰まり！！！！？」

ギヤランはシグナム達を挑発しながらメタルスプレッドという鋼鉄の雨を降らし続ける。その雨のせいでシグナム達は迂闊に動く事が出来ず、防戦一方にならざるを得なかった。

が、しばらくしてその雨は止んだ。空を見上げるとかなり押されながらもギヤランと戦っているヴィータがいた。

ヴィータ side

ム力つく事にあの変態の一撃を喰らって気を失っていた。しかも威力が大きかったせいでまだ頭がフラフラする。

「もう、いい子はお寝んねしなくちゃだめよ!!」

「ウルセエ!!!」

あたしはがむしゃらにグラーフアイゼンを振り回すが変態にはまったく当たらなかった。

「なら、さっきのお返しだ————!!!」

アイゼン、フルドライブ!!!!」

『ギガントフォーム』

「轟天爆砕　ギガントシューラー……クツ……!!!!」

あたしは攻撃が当たらないことに痺れを切らし、あたし自身が誇る最大魔法で仕掛けた。が、その行動はあまりにも早すぎると知ったのはその後だった。

変態はギガントシューラーの一撃に叩きのめされ、地に落ちていく。

「やっぱり鎚同士やることは似るのね。いい暇つぶしになったわ」

「暇つぶし、だと?」

変態は悠然とした態度でそう言い、更に一言足した。

「10秒だけ本気になってあげるわ」

その瞬間変態の姿が消えた。すぐにアイツの姿を探した、が先に横から衝撃が来た。飛ばされながらそこを見ると変態がコニーを振り下ろした状態で立っている。

「10」

「貴様！！」

シグナムとザフィーラが変態ギャランに向かって駆け出してくるが、何か嫌な予感がした。

「シグナム！来るな！！」

シグナムに向かって叫んだが、その前に変態ギャランが拳銃で乱射した。魔力弾はシグナム達を追いかけて防御に回らざるを得なかった。そしてハンマーを片手で振るいあたしを飛ばさないギリギリの力で叩く。

「9 / 8 / 7 / 6」

シグナムがダメージ覚悟で防御を捨てて突っ込んで来て、

変態ギャランはわざと射撃の手を緩めた。シグナムは不審に思いながらも好機と見たのか飛ぶ速さを上げる。

「5 / タイタンフォーム / 4」

あたしを叩くハンマーが大きくなって連打し、最後にあたしを打

ち飛ばした。

抵抗しようの無かったあたしはシグナムとぶつかってシグナムの動きを阻害してしまった。

「3」

そして変態<sup>ギャラン</sup>はハンマーを小さくして、シグナム達に当たった鋼鉄<sup>メタルスプレ</sup>の雨<sup>ツト</sup>をあたしとシグナムだけに集中させて降らす。

「2」

またハンマーをタイタンフォームに戻し、直径2メートルぐらいの鉄球をあたし達に打ち付けた。受けた衝撃であたし達は墜落させられ、地面に落ちていく。

「1、これで終わりよ」

変態<sup>ギャラン</sup>の持つハンマーは異常なまでに大きくなり、地面に突き刺さる。ハンマーの下にいたあたし達はそのハンマーに押されるがまま地面に叩きつけられ潰される。

ヴァーサイドアウト







「だからつるさい」

あまりにうるさかったからアストンの体に刺している取っ手の形をした氷を何個か捻った。

「ちょっと非道すぎるんじゃない？」

「貴方誰？」

話しかけてきた筋肉オカマに世羅が冷たく聞いた。復讐の時間を邪魔されて若干キレ気味なのだ。

「その人の仲間でギヤランよ」

「あつそ。邪魔したらコレと同じ眼に遭わせるよ」

「あら。意外と残忍な事言うわね。で・もおん、そういうわけには行かないから返り討ちにしてその人を助けてみせるわ」

「そう、同じ眼に遭いたいよね」

そう言い残して世羅が氷牙一閃を放った。ギヤランは一瞬で気付いて避け、

「メタルスプレッド」

何百と言う鉄球を放ってきた。　　だけど、私の敵じゃない。

「天災を舐めないで」

氷柱（ラン）を足元から発生させて鉄球を防ぐ。ついでに氷柱を出す範囲を広げてギヤランの足元からも出す。ギヤランは範囲が広がっていることに気付いて上空に飛んだが、その程度で避けられるはずも無く、氷柱は他の氷柱を飲み込んで巨大化し、更に成長を続け、氷の森が出来上がった。

「くっ！！　危険にもほどがあるでしょ！！！！」

ギヤランが何かつぶやいたようだけど、無視して私は氷柱を伝えて駆け上る。

「これはまずいわ！！！！　メタルキャノン！！」

ギヤランは2メートルぐらいの鉄球を出してハンマーで打ち付け、氷柱を破壊しようとした。

「なっ！！！！」

「残念だけど、その程度じゃ私の氷は砕けないよ」

鉄球は氷柱に小さなヒビを入れるだけに止まった。

「今度はこっちの番。スノーストーム」

氷を小さく砕いた暴風雨を発生させて攻撃する。だがギヤランは高速飛行でスノーストームを避けた。スノーストームはそのまま進み、氷柱を削る。

「まるでヤスリね。当たったら痛いじゃ済みそうもないし、反撃しましょうか」

ギヤランは気持ちを入れ換え正面から挑むことにした。

そしてギヤランが先に仕掛け、グツピーで魔力弾を撃った。私は氷柱を作って魔力弾を防いだが、魔力弾がいきなり爆発したせいで煙が舞い、姿を見失った。

「メタルスプレット!!!」

すると上からギヤランの声が聞こえて鉄球の雨が降ってきた。

「ゼルダ、モード2」

『yes sir . but tle fierce form』

「氷牙障壁」

私は氷の楯じゃ防げないと思い、氷らせて捕らえる一撃を放った。鉄球は私の思い通りに氷り付いてひとつも氷り付く領域を越えることはなかった。

「コレはどう!! メタルキャノン」

ギャランはまた大きな鉄球を打ってきたが、私は無意味だと思って攻撃するために備える。だけど、

「キャツ!!」

その鉄球は氷らす領域を乗り越え私に直撃した。

そこから反撃しようと思えば、背後から頭に強い衝撃を受けて打ち落された。

朦朧とする意識の中、打ち落した人物を見ると、礫にしていたは

ずの男・アストンが体に三叉の突撃槍を刺した状態でした。

そして、私は意識を失った。

世羅 side out

アストンは世羅を打ち落したのを確認するとギャランに話しかけた。

「何でデバイス重複を使わなかったんDA?」

「じゃあこっちも聞いわ。なんでフォルダウンをしなかったの?」

アストンの質問にギャランが質問し返し、先にアストンは答えた。

「それHA!!! それはやる条件が揃わなかったただけだYO」

「私もあの氷を砕く自信が無かったのよ。メタルキャノンで砕くことが出来たのは本当に僥倖うしろさだったわ」

2人は忌々しそうに答え、落ちた世羅を見る。



悠斗 side

カリーナと切り結び合ってしばらくした頃、邪魔者が入ってきた。その時に息抜きとして気配を探ってみると、オレ以外全員負けていたことに気付いた。

あれ？気配の数が3人足りない。死んだのか？

「自分の仕事はどうしたの？」

オレが気を抜いていることを知って、カリーナが割り込んできた。邪魔者のコルギアに尋ねた。

「大体終わらせてきた。ロストコルギア古代遺物もちゃんと貰ってきたぜ」

「殺してないよね？」

なんとなくそう尋ねてみたが、殺してないとは言いつれなかった。

「心配ないぜ。怪我は大したことはないし、リンカーコアを蒐集したから数日は病院だろうが後遺症はねえよ。」

敵の言葉を信用するのは愚かな行為だが、コルギアが相手なら安心できた。

「ならコルギア、下がってなさい。悠斗は貴方の手に負える相手じゃないわ」

「カーリーナも同じでしょ。オレと長時間切り結ぶことが出来たのはカーリーナが初めてだよ」

「ふふっ、ありがとう。じゃあ、次で最後にしましょうか」

カーリーナはそう言って背中にある大剣を握り締める。ただ、大剣は背中に差したまま抜こうとしない。

多分次はカーリーナの最強攻撃だろうな。

「コンチエルト、2ndフォームを」

『了解 シュトルムフォーム』

オレは最大魔法を使うためにコンチエルトをシュトルムフォームに変えた。

「そつちも準備オツケーね。行くわよ」

「ああ」

カリーナの質問に生返事で返して神経を研ぎ澄ませる。カリーナも次の一撃に魔力を込めている。

そして、オレとカリーナは同時に足を鳴らして互いに駆け出した。

「至近距離・サンダー（ストーム）ブレイカーーーーーーッ  
ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

自分達のデバイスに収束砲撃を溜め込んで、オレはサンダーブレイカーを、カリーナはストームブレイカーを、至近距離で放った。互いの一撃は相手の魔法を削り、呑み込み、ぶつかり合う。そんな状態が続くはずもなく、呑み込まれて膨れ上がった魔力は周囲を壊して吹き飛ばし、最後には中心となったオレとカリーナで大爆発を起こした。

オレ達は大爆発に巻き込まれ、剣を杖代わりにして立つ。

「な、なかなかやるじゃない」

「カリーナこそ、よくやったよ。この勝負、引き分けた」

「納得いかないけど、それしかないわね」

オレとカリーナはそんな会話をしてコルギアがカリーナを連れ去って行き、オレはコンチェルトを手放して地面に倒れた。

「マスター……こんなところで寝たら死んでしまいますよ……!!」

シンフォニーが何か叫んでいるが、眠たくて気にすることができず、そのまま意識を手放した。

結局オレは初任務を成功させることは出来なかった。

## 第9話 囑託魔導師としての初任務（後書き）

作者「というわけで、今回は最長を目指してみました!！」

悠斗「長すぎだろう。これ何文字行ったんだ？」

作者「えっとね、14000字。まあ悠斗の試験に比べると短いよ」

悠斗「あれは18671字だっけ？」

作者「そうそう。よく覚えてたね、偉い!！」

悠斗「さすがに覚えるだろ」

作者「ま、そんな事はどうでもいいから流すとして。

世羅もいたのに任務失敗したな」

悠斗「別にいいよ、後で取り返せばいいんだし。

それよりなのは達は大丈夫なのか？」

作者「心配しなくても大丈夫。なのはとフェイトは一度蒐集されるから」

体が慣れてるよ。半日もしたら意識を取り戻す」

悠斗「裏返せば半日は目覚めないってことか。」

作者「まあそうなるね。と、ほかの4人も目を覚ましたみたいだな。気分はどう？」

なのは「最悪の一言に尽きるの。」

はやて「ははは、あの子達なのはちゃんとフェイトちゃんにこんな苦痛を

与えてたんやな。止めることが出来んですまん」

フェイト「別に気にしなくていいよ。あれは夜天の書を改悪した人達が悪い。」

はやてやシグナム達は巻き込まれただけだよ」

はやて「|||||……………」

やっぱり喋れへんな。筆談も無理やったし強力すぎるわ」

悠斗「いや〜そうじゃなかったら古代遺物ロストロギアの名は名乗れないよ」

フェイト「ロストロギアって黒騎士の書のこと？」

はやて「いや、それより上等な物やな」

なのは「ところで作者さん、ヴィータちゃん達って大丈夫なの？ なんか消え

たつてあるんだけど」

作者「全然大丈夫じゃないよ。ヴィータ達は死んだからここで場外に移動」

はやて「クラウドソラス!!!!!!!!!!!!!!」

作者「ひゃああああああああああああん!!!!!!!!!!!!!!」

作者は息絶えた。

悠斗「何くだらないポケかましてんだ？ それより新キャラについて紹介しろ」

作者「まったくも~~~~!! 人使い荒いよ!!!」

## 井上由紀

父親がいなくて、母の虐待を受けながら育った。そのせいで女性として依存する面が大きくなって最終的に女装少年に変貌。

今、母は死んでいるから親戚の家に住んでいるけど、それでも女装癖は治っていない。悠斗達と仲良くなったのは親戚に引き取られるから。

## ギャラン・ハント

年齢 46歳

身長 194センチ

握力 130キロ

魔力値 A A A ランク

性別 男 (ニューハーフ)

オカマ口調でマッチョなのにビキニのバリアジャケット。本人は変態なことを否定。

## コニー

槌型の非人格型アームデバイス。ヴィータのグラーフアイゼンと同じフォルムを持つが、カートリッジシステムは搭載してない

## グッピー

拳銃型のストレージデバイス。カートリッジシステムは搭載してるが、変形することは全くない。

作者「ほい終了。というか二人ほど性別を超えたな」

なのは「片方は気持ち悪いんだけど……」

作者「それは俺も同感。ちなみにギャランのモデルはEX!の月嶋です。性格

はこれでもかかってぐらい違うけど」

フェイト「それ、マイナー過ぎない？」

作者「だろうね。俺もこいつを書くのためらったし」

なのは「長くなりそうな話は後にして、そろそろ締めよっか。

『第10話 敗北のあとの日常』 希望に向かってtak  
e off」

作者「今度ギャランに露出狂の設定を入れようかな？」

悠斗・なのは・フェイト・はやて

「するな!!!」

## 第10話 敗北のあとの日常 墜落した少女の独白

悠斗side

それから数日後、やっとなのは、フェイト、はやて、世羅の体調は全快し、学校に登校してきた。ちなみにヴォルケンリッターの3人は体の再生ができず、そのまま死んだ。

そして今の時間は昼休み15分前。授業の真つ最中の時間にオレは屋上にいた。ホントは遅くてもいいが、これ以上延ばすのも面倒なのでそろそろやることにしたのだ。ちなみに授業には幻術で作ったオレ自身が行っている。

はい、幻術君がいるお陰で出席率100%と無遅刻無欠席を刻んでいます。

「それじゃカノン、お願いしていい？」

オレは背後から抱きついているカノンに聞いた。

「モツチロン！！行くよ、ユニゾン・イン」

カノンの体がオレの体と重なり、オレ達はひとつになる。

「夜天の魔道書、守護騎士プログラム再構成開始」

『聖母の権限により、パターンエンドレスを承認。そのまま守護騎士プログラムの修復開始………修復完了。リファリス再構成』

オレ達が力を使うと屋上に一3色（紫・真紅・白）の三角形の魔法陣が現れた。更にその魔法陣の中から人が出てきた。出てきたのはもちろん黒いスウェットスーツに身を包んだシグナム、ヴィータ、ザフィーラだ。

『まったく、再構成してあげたんですから、ありがたく思いなさいね』

「カノン、そういう事言わない」

オレはカノンを注意し、そのまま早弁出来る場所を探した。

「待て!!!!!!」

いきなりヴィータがオレを呼び止めたので、オレはヴィータのほうを振り向いた。呼び止めたヴィータは言い辛そうに指いじりして、ようやくしどろもどろに喋った。

「えっと、その、生き返らせてくれて、ありがとう」

「どづいたしまして、……………なんてな。カノンの義務だから別にいいよ」

「“|||||”の義務か。管制人格は生き返らせることは出来ないのか？」

『その管制人格が余計に「カノン、そのことは黙ってて」「はいはい』

カノンの言葉を制して余計な事を言われるのを防ぎ、カノンは結論だけ言った。

『管制人格を生き返らせることは出来ないわ』

聞いてきたシグナムに対してカノンはそう答え、オレとはユニゾンアウトした。

「それじゃ、シグナム達は先帰れ。学校にいてもやれることはない。なら家ではやてたちを驚かしてやれ。あつ、勿論“聖母”のことは喋るな、つて念を押さなくても喋れないか」

「くっ、分かったよ。総合管理者の命に従います」

オレの言葉にヴィータが悔しそうに言い放ち、オレは弁当を広げた。ちなみにカノンが弁当のおかずをいくつか食べていった。

それからしばらくしてなのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、世羅、由紀の7人がやってきた。

「悠斗！！先に行かないでよ！！！！」

開口一番にアリサが文句を言ってきた。

「悠斗ってたまに足速いよね」

「ほんまや。チャームが鳴ったらいつの間にか消えとるんやもん」

やっぱりアレはオレと間違えるか。

「言っておくけどオレは4限目には参加してないぞ」

「参加してない？」

「え？ でもちゃんと悠斗の姿を見たよ」

「姿は、だろ。ヒントはオレの得意魔法」

なのはとフェイトが頭に疑問符を浮かべているのでヒントを教えてください。

ヒントを教えた瞬間オレが何やっているのか理解したのかなのが聞いてきた。

「まさか悠斗君、幻影作ってそれに授業受けさせてるの?」

「そうじゃないとバイトなんて出来ないからね」

自分だけ自由に動く楽しさを思い出して、笑顔で言い放った。

「アンタは何やってんのよおおおおおおおおお!!!」

「ぐばあああああああ!!!」

アリスのコークスクリューブローがオレの鳩尾に突き刺さり、打ち飛ばされた。

「まったく、誤魔化して授業をさぼるなんていい度胸ね!!!」

「これは流石に擁護出来ないな」

「魔法ってそんな使い方するためのものじゃない気がするんだけど？」

朦朧とする意識の中、アリサの憤懣した声、なのはの呆れた声、由紀の疑問と呆れが混じった声が聞こえた。

そのあと、アリサに殴り起こされた。ちなみに起こされる時に一回だけ赤い河が見えたが幻だと思っことにした。

「バイトやってたって言ったけど、どんなバイトやってたん？」

「きかないことをお勧めするよ」

やりこなしたバイトの数とレベルが異常なのでそう返してみたが、

「悠斗君、逃げたらあかんで」

はやてが黒いオーラを放ちながら言った。そのあともしばらく喋ろうとしなかったが、結局納得しそうになかったのでいくつか教えることにした。

「新聞配達、建築、電気工事士、高級レストラン、ファミリーレストラン、和菓子屋、洋菓子店、その他諸々。大雑把に思い出せたのはこれだけ」

「悠斗君って本当は何歳？」

「普通に15歳だよ。なのははなんでそんなこと聞くんだ？」

「いや、働けるのって法律で決まってる、最少でも12歳からだっただよね？」

「あゝ、そう言うこと。みんな常識に囚われ過ぎ。幻術使えば5歳の子供でも30歳に化けられるよ」

老獺に笑いながらフェイトの質問に答えるといきなり全員（世羅除く）が灰になった。

オレ、なんかまずいこと言ったっけ？

「お兄ちゃん、さすがにそこまでは頭が回らないと思うよ。それに、ふつうは5歳から働かない」

オレが疑問を抱いたことが分かったのか、世羅が答えてくれて、その言葉にオレも納得した。

確かに普通は化けるってことを思いつかないよな。って仕事の話で思い出した。

「そういえばみんなは今度のGWはどうやって過ごす？」

純粹に気になったから皆に聞いてみた。3日後のことなのに今から聞くのは気が早いとも思ったけど、まあいいか。

「ウチは陸士104部隊に一泊二日の派遣研修や」

「わたしなのはははやてに合わせてミッド地上で休暇」

「わたしとアリサちゃんはそれぞれ用事があるよ」

「ボクは最近忙しくなった親戚の手伝いだよ」

オレの質問にはやて、フェイト、すずか、由紀の順に答えた。

「あつ、ちなみに休暇のときは2人も連れて行くよ」

…………… ナンデスト？

初耳の事に呆けていると世羅がとんでもない事を教えてくれた

「…………… そついえばお兄ちゃんがいないうちに決めたんだった」

「世羅、そつゆう事は早めに言つて。高級レストランのバイトがG Wにあるんだから」

「そんなもんアンタが得意の幻術で何とかなさい！」

オレの言葉にアリサがツツコミ、オレはなくなくと幻影に働かせる事にした。高級レストランってまだ学べる事多かつたんだけどな。

その夜、高級レストランのバイトを終え、町の夜景を空から見ていると桜色の円形の光が見えた。

不審に思って幻影で燕を作り、感覚を接続してその光の場所に飛ばしてみた。幻影な分鳥目という言葉は存在しないから偵察なんかにはうつってつけの子だ。

燕が桜色の光に近付き、視界に納めるとそこには……………魔法

の練習をしているのはがいた。

「オーバートレーニングは程々にしとけよ。しすぎると影響しか残さないから」

トレーニング内容がかなり濃かったので急速に着地してからなのはに話しかけた。

いきなり話しかけられてびっくりしたのか練習の手が止まり、オレの姿を確認してふっと息をついた。

「悠斗君、こんな夜中にどうしたの？」

確かにこんな夜中だな。もう1時回ってるし。

「バイトの帰りに不審な光を見つけたから降りて来た」

「バイトってこんなに遅いの？」

「いや、スーシェフ副料理長が特別に早くあがらせてくれた」

「こんな時間で早いって、普段どれくらい？」

「ミサン・プラスアン・トル翌日の下処理や片づけで大体3時くらい」

あー、無意識に専門用語で言ってたけど、通じるかな？

(作者が翻訳したから大丈夫！)

「そんなに遅くまで働いているのにあんなに強いんだ。分かっているけども自身無くすなア」

なのはは空を仰ぎ見るように顔を上に向け、しずかにつぶやいた。

練習してたのってそういう理由か。シスコン2号に見せてもらったなのは達の戦闘記録を思い出して、なのはに話しかけた。

「数日前のことなら気にしない方がいいぞ。コルギアは近接型で、懐に入られたら一気に不利になるのはしょうがない」

「だけど、負けたのってコレで2回目なんだよ。わたし、最初に戦った時から進歩してない！！」

オレの言葉を逃げ道だと感じたのか、なのはは泣きながらオレに強く言う。

「してるさ。ただ、嘱託試験の練習があったから練習できなくて、強くなる時間が少なかっただけ」

「そんなことないよ。だって、わたしは一度限界を超えた無茶のせ

いで墜ちてるんだから」

その言葉になのはの悲しみが詰まってる気がして、迷った。聞いてみたいと思っただけど、深く立ち入ったらいけないとも思い、結局聞くのをやめた。

だが、話をそらそうと思っただけ矢先になのはが先に口を開いた。

「わたしは、9歳の時に偶然の出逢いから魔導師になったの。」

なのははそう前置きしてから手元にウィンドウを開き、何かの映像を見せた。

そこには赤い宝石レイジングハートを掲げて魔力を溢れさせている小さい頃のなのはがいた。そして場面が変わり、街中でなのはとフェイトが青い宝石にレイジングハートとバルディッシュをぶつけたシーンになった。

「わたしは魔法と出会ってからわずか数ヶ月で命がけの実戦を繰り返してきた。フェイトちゃんはむかし、ある特別な家庭環境からわたしとロストロギアを巡る敵同士だったの」

オレはただ何も言わずなのはの言葉を聞き、ウィンドウを見続けた。

そしてある程度場面が進むとフェイトがなのはにバインドを掛けて千はくだらない雷槍をぶつけたシーンに変わり、最後になのはが

収束砲を撃つシーンに変わった。

「9歳でこんな大きな収束砲を撃つとは。フェイトも凄いがなのも凄いな」

「それから大した時も置かずに、次の事件が始まった」

ウィンドウはなのはがヴィータにプロテクションを砕かれるシーンに変わり、ビルの中に叩きつけられるシーンにまで変わった。

「襲撃事件での撃墜未遂と、敗北。それに打ち勝つために得たのが、当時はまだ安全性が危なかったカートリッジシステムの使用」

そして場面はかなり変わって夜天の、いや闇の書の管制プログラムと戦うのがいた。そのなのははレイジングハートを槍に変え、管制プログラムに突撃していく。

突撃する時の魔力は驚嘆したが、明らかになのはの限界を超えているのがすぐに分かった。

「体の負担を無視して自身の限界値を超えた力を無理矢理引き出すフルドライブ・エクセリオンモード」

自分で言うのもなんだけど、わたしは誰を救うため、自分の思いを貫き通すための無茶を続けてきた。だけど、そんなこととして体が持つはずがなかった」

なのはの声が震えていることに気付いて無意識になのはの手を握って肩を抱き寄せた。なのはは驚いた顔をした後に安心したような顔をして続きを話し始めた。

「入局2年目の冬、異世界でのロストログア輸送任務の帰り、ヴィータちゃんや他の皆達と出掛けた場所、不意に現れた未確認体。いつものわたしなら、何の問題もなく、味方を守りながら墜とせただけの相手。だけど、溜まっていた疲労、続けてきた無茶がわたしの反応をほんのちよっとだけ鈍らせた」

ウィンドウは雪景色に変わり、中央には泣き叫びながらなのはを抱き抱えるヴィータと、真っ白なバリアジャケットが自身の血で赤く染まったなのはがいた。

「余計なものを見せてごめんね。ホントはこっち」

なのははそう言って画面を切り換え、別の映像を写した。そこには、酸素注入機を取り付けられ、上半身が裸の死んだように眠っているなのはがいた。どう見ても、このときに意識は無さそうだった。

なんか、いやってほど体験した光景だな。無茶して大怪我したのはコレだけだろうから、少し愚痴らせた方がいいか。

既視感にとらわれながらそう思ってひとつだけ聞いた。

「二度と飛べなくなるかもとか、立って歩くことすら出来なくなるかもって聞かされてどんな気持ちだった？」

「な、なんでそのこと」

「まっとうな方法で、こんなに強くなれるわけないだろ。オレも無茶するタイプだから、怪我の度合いでどんな後遺症が残るかも大雑把に把握できる」

小さい頃は過剰なマルチタスクと限界超えた魔法を連発をメインにやっていたからなのは似たような目に遭ったことも4回ぐらいあったな。最後に宣告された言葉は『もう二度と足を動かすことが出来ない』だっけ？まあ忘れたからいいや」

「いやいやいやいや！！！！ 何でそんな事言われて歩いてるの！！！！？？」

「あれ？聞こえた？」

「うん、途中から洩れてた」

「それはミスった！！ まあ歩いてる理由だけど、幻術で自分の体を誤魔化して電気で無理矢理体を動かすと言う強制的なりハビリを行って……………ごめん、コレオーバートレーニングが原因じゃなかったや」

「いや、どっちにしろそんな状態になったことがあるんだね」

なのははいきなり老けたように言い、オレは首を縦に振った。

「まあそんな経験があるから、無茶した反動に関してはかなりの知識があるよ」

「魔法が、怖くなかったの？」

なのはの声はいきなり落ち着いてそんな言葉を紡いだ。  
オレはなのはから一步離れて向き合い、言葉を返す。

「怖くないって言ったら嘘になるかな。でもそれ以上に空から見る夜景が綺麗だと思えたから魔法を使ってる」

「悠斗君もおんなじなんだ。でも、」

なのははため息をついてそこで止め、オレに抱きついた。

「わたしも、怖かった。たって歩けない事がじゃない。二度と、空を飛べなくなることが！！他の誰もがわたしの体の心配をしたのに！当のわたしだけ、空のことだけ」

オレはそこでなのはが次の言葉を喋れないようになるのはの体を強く抱きしめた。

「悪い、気持ちが悪ければと思って聞いたんだが。そんな、苦痛になるようなこと喋らせて」

「うっ、うっ、うわあああああああ!!!」

その後、なのはから撃墜のときに感じた不安や寂しさを愚痴られ、オレは同意しながらなのはの話をいちいち聞いた。

「なんかごめんね。こんなに遅くなって」

「別にいいよ。なのはだって同じだろ。だったら両成敗、ね？」

「両成敗って。悠斗君らしくていいのかな。それじゃこんな時間だけどオヤスミ」

なのははそう言い残して自分の家に帰って行った。オレは、もう少し夜景を見てから帰ろっか。っと、その前になのはに『時止める<sup>タイムス</sup>眼<sup>アイ</sup>』を使って時間を延ばさないとな。

こうして、オレ達の夜は更けて言った。



第10話 敗北のあとの日常 墜落した少女の独白（後書き）

悠斗「今日はえらく更新が遅いな」

作者「予定が立て込んで更新する目処が立たなかった。こればかりはどうしようもないな。先方にも悪いし」

悠斗「課題の方は終わったのか？」

作者「まだDEATH。言わないで……………」（涙）

悠斗「ウザいからどっか行って泣け」

はやて「作者さんホンマにどっか行ってもうたな。

ところで悠斗君、一発殴らせてくれへん？」

悠斗「why？」

はやて「シグナム達が帰ってきたことを黙ってたことと、なのはちやんを抱き占めたことと、今回あまり活躍できへんかったやつあたり」



はやて「そう言えば作者さんアンケートやるっていうとったな。内容なんやっただっけ？」

悠斗「この話、急ピッチで進めるか、いろいろな話を混ぜて少しずつ進めていくかってアンケートだったな。」

まあできたら参加してくれ。展開を早くした方がいいなら？を、遅くていいなら？を感想に書いてくれるって。ちなみに？だったらはやてたちの登場が多くなるらしい」

はやて「絶対？に入れたってな！！！」

ちなみにこのアンケート、2週間後の21日に締め切ります。

## 第11話 買い物

なのはside

そしてあつさり3日経って、ミッドの首都・クラナガンに来た。はやてちゃんの仕事に行ってるから今はわたしとフェイトちゃん、悠斗君と世羅ちゃんの4人でウインドウショッピングを楽しんでいる。特に世羅ちゃんが一番張り切って楽しんでいる。

悠「なのは、コレなんていいんじゃないか？」

フ「なのはにはこつちも似合うと思うよ」

世「……お兄ちゃん、コレ着てみて」

な「え、悠斗君にはこつちを着せたい」

え、選ぶのはカオスな状態になってるけどね。

それからしばらくして……

「いや、いっぱい買った！」

「……うん、結構良い物もあったね」

買い物中断してわたし達は休憩した。荷物は悠斗君が全部持っていて5メートルぐらいの山を築き上げている。ちなみに実体化する幻術で紐を作って荷物を縛って持ち上げていた。

「そういえば悠斗君達ってミッドのお金はどうやったの?」

「……お母さんの残してたお金を使ったの」

ふえ〜。悠斗君のお母さんって準備いいね。

世羅ちゃんの答えにわたしは舌を巻いた。その後も楽しく談笑しながら休んでいると、

「みんな〜!送れてゴメンな〜!」

はやてちゃんもやってきた。そしてはやてちゃんも交えてウィンドウショッピングを再開した。

服は大体見てきたから今度は雑貨品を見に来ている。しばらく歩いていると悠斗君が不意に立ち止まった。

「悠斗君、どうしたの?」

「ああ、いや。これちょっといいな〜と思って」

悠斗君はそう言つて木箱オルゴールを見せた。

「なんて曲？」

「水 奈々の『PHANTOM MIND』だつて」

「あー、その人な。そういえばフェイトちゃんと声質似とるな」

「言われてみればそうだよな。もしかしてフェイトちゃんが歌つたら同じ感じになつたりして」

「……こっちの方もいい曲じゃないかな？『MY Wish・My Love』つて」

「それはわたしの声に似ているね」

「この植田 奈さんははやて似だな」

フェイトちゃん、悠斗君、はやてちゃん、わたし、世羅ちゃんです。そう言い合い、いろいろ誰似ているかなんて言い合つた。

でもこの会話、いいのかな？

観光スポットを回つて、夜になった。ショッピングの時の会話は省くよ。だって、更に力オスな状態だったから。

日がかなり傾いた頃、リニアの手配をして温泉地に向かうとき、

「ん？ あれって何の音？」

突然悠斗君が足を止めてそんな事を言い出した。

「音？ フェイトちゃん、何か聞こえる？」

「うっん、聞こえないよ。悠斗の気のせいじゃない？」

わたしの言葉にフェイトちゃんも肯定するとはやてちゃんのとこに通信が来た。

「……………なんやて！！場所は！！？……………ふんふん、それならここから近いです！！……………了解、すぐに現場に向かいます！！」  
悠斗君の言つとおりやった。近くの空港で火災が起きたらしいんや

「火災！！ 私も行く！！！」

世羅ちゃんはそう言い残すとすぐにワンピースのようなバリアジヤケットを纏って空港の方に向かった。

「はやて、オレ達も急ぐよ」

悠斗君はそう言うと荷物を転送魔法でどこかに送ってはやてちゃんとなたしを抱かかえた。

「ちよっ!!まさか!!!!」

「喋ると舌嚙むよ。コンチエルト、アクセルムーブ」

『all right・accel move』

「きゃあああああああ!!!!!!!!」

悠斗君はそのまま移動魔法で空港の方に跳んでいきました。悠斗君の後を追ってフェイトちゃんもソニックムーブで来る。

フェイトside

悠斗はなのはとはやてを近くの救助隊の居る場所に下ろして火の中に突っ走って行った。

一体どうしたんだろ?

悠斗の奇行に首を傾げるとなのはが何かつぶやいた。

「そういえば悠斗君の両親って、火事で遺体を焼かれてるんだよね」

「そうか！世羅ちゃんが独断専行したんも同じ理由か！！」

「なら急ごう！！2人も助けに行かなきゃ」

わたしがそう言うと火災現場から一人の少女が飛び出して氷を落としました。

### 悠斗 side

世羅の体調を心配して、早々に見つけた世羅には消火をしてもらうことにした。オレは火の中救助者を求めて空港の中をうろつき回る。火事の中にいるせいかわ、怨嗟と恨み、憎しみ、悲しみの幻聴が耳を劈く様に響くが聞こえないフリして足を無理矢理動かした。

まったく、こんなことになるならシンフォニーも連れて来れば良かったな。家に置いて来たのが本当に悔やまれる。

『「ないものねだりをしてもしようがないですよ。それより、付近に要救助者を発見しました」』

「そうか。案内してくれ」

『「了解」』

コンチェルトの案内に従って飛ぶ。

しばらく飛び続けると青色の短い髪をした小さな女の子の姿が見えた。

良かった、無事か。

なんて事を思って安心していると近くにある像が倒れて少女を押し潰そうとしていた。

「コンチェルト!!」

『リンググバインド!』

空色の光の帯が像を捕らえ、落下を防いだ。

「ギリギリだったが無事だな。いま転送魔法で」

「お姉ちゃんがないの」

「分かった。じゃあ後で救出に行つてやるから安心しろ」

少女に向かってそう言い、転送しようとした矢先になのはが現れた。

「悠斗君、大丈夫!!?」

「なのはか。丁度いい!!この子を安全なところまで運んでくれ」

「悠斗君も一緒に…」

なのはが渋っていると天井が崩落した。すぐに気付いて少女の腕を引っ張ってオレに近寄せ、なのはに声を掛けた。

「なのは、手伝ってくれ!! コンチェルト、ダークリミットリリース」

『all right, my master. Dark Limit Release』

「了解!!行くよ、レイジングハート!!」

『all right. my firing lock can cell』

「ダークネス」

「デイバイン」

「バスターーーー!!!」

オレとなのはは天井に向かって砲撃魔法を放った。

空色の光はくすんだ空色に変わり、光の柱となって落ちてくる瓦礫を消滅させ、桜色の光は瓦礫を砕く。ついでに天井には綺麗な大穴を開け、空の見晴らしがよくなった。

「なのははその子を運んでくれ!!!オレはその子の探している人を探す!!!」

返事は聞かず、と言つか聞こえないので急いで救助者探しに戻った。

「コンチェルト、要救助者を見つけるまでダークリミットは解放しててくれ」

『「了解! ですが耳が聞こえないって素直に喋られたらどうですか?」』

「喋ったら五月蠅そうだから却下。それに、炎に包まれている時限定の障害なんて、誰が信じると思う?」

『「少なくとも親友達全員は信じてくれそうですよ。何年も続いている仲ですし」』

「そうなんだよな。それが一番困った事だ」

『「それと救助者発見。ナビゲートします」』

コンチエルトの道案内に従うとさっきの少女に似た髪の長い少女が階段を上っているのが見えた。するといきなりその階段が崩落し少女も落ちていく。

「ここでもギリギリかよ!!!?」

『accel move』

「ダークネス…バスターー!!!」

移動魔法を使ってオレも崩落に巻き込まれ、少女の体を掴むとダークネスバスターで瓦礫を消滅させる。

「コンチエルト、ダークリミットをもう掛けて。 君は怪我はない?」

「は、はい!」

少女が頷いたのを見てから自分でも怪我がないか確認した。

あれ?この子、あの人に似てる気が。よく考えたらさっき助けた

子も似てるし、あの人の家族かな？つてそんな事思い出してる場合じゃないか！！

自分に喝を入れて、また転送魔法を使おうとした矢先に人が来た。

「悠斗！！大丈夫！！」

「タイミングが良いんだか悪いんだか、なんか分かりづらいな」

救助に来たフェイトに向かって乾いた笑いを浮かべ、コンチエルトに残りの生命反応を確認してもらった。

『「生命反応は少ないです。ですが、火災の原因そうな人がこっちに向かってきています」』

「フェイト、その子を安全なところまで。早く！！」

「う、うん！行くよ」

「させるかああああああああああああ！！！！！！！！！！」

フェイトがこの場から離れようとすると音叉みたいな杖を持った少年が光弾を撃ってきた。オレが咄嗟にコンチエルトで切り裂き、その少年に剣を向ける。

「何のつもりだ？」

「何って、くだらない塵<sup>ゴミ</sup>達を処分しようかと思って」

オレの質問に少年はそう返してきた。にしてもゴミ扱いとはいい度胸だな。

「オレ達がゴミならお前は埃だな」

「達にアンタは含んでないよ。僕が言ってるゴミはプロジェクトFの残骸と人の形をした兵器のことだよ」

まずい、早口で何も聞き取れなかった。フェイトがいるのにどうやって誤魔化そうか。

火事の中で会話を選択した自分に後悔しつつ、どうやって話を繋ごうか考えているとフェイトと助けた少女の顔が真っ青になっていることに気付いた。

「オレのフェイトに変なこと言うな!!!」

なんとなく気分ですら言ってみて少年に切り掛かった。少年は持っている杖でオレの攻撃を防ぎ、

『ブレイクインパルス』

別の魔法を放ってきた。

「フェイト、大丈夫か！？　ツてあれ？なんで顔を赤く染めて別世界に旅立ってるの？」

『「マスターが会話をぶった切るためとは言え、変な事を言ったせいですよ」』

コンチエルトの言葉にオレは更に疑問符を浮かべ、衝撃波が顔の近くを通り過ぎて少年の事を思い出し、少年と向き合った。

「僕の名はレガシー！シャードキャスターいちの魔導師だ！！」

「エイーって変わった名前だな」

「レガシーだ！！なんで母音だけ抜き出すんだ！！！」

「レオチー？」

「レ・ガ・シ・ー！！！！！！」

『「いい加減可哀そうになったので言います。その子の名前はレガシーです」』

なんだ。レガシーだったのか。ちゃんと口を開けば伝わっ



「ぐっ!!」

飛ばされながら幻術魔法ファントムシルエットを使って自身の分身を作って、レガシーに向けて走らせた。が、

「この程度の幻影に負けるわけないだろ!!!」

レガシーは叫ぶように言った後マシンガンのように魔力弾を連続して放ち、オレの作った分身を撃ちぬく。

だけどオレは実体化させていた分身を楯にしてレガシーに近づく。

そして十分近付いたところで持っていた分身をレガシーに向けて投げた。

「なっ!!!」

さすがにオレの奇想天外すぎる行動は読めなかったのか、レガシーは上に跳んで分身の突撃とつてきを避けた。

「甘いッ!!! 蒼雷一閃ッ!」

「ぐああ!!!」

レガシーが上に飛んだ瞬間にタイミングを合わせて電気を纏った一撃を振り下ろした。

蒼雷一閃はレガシーに直撃してレガシー自身を軽く弾き飛ばした。そして間髪いれずに

「地龍一閃！！！」

間合いを詰めて切り上げた。が、薄皮一枚で済んだらしくオレが振りぬいて無防備になった瞬間を狙ってレガシーが杖をバットのように両手で振った。

オレは剣を振りぬいていたせいでその一撃を止めることが出来ず直撃を受ける。

「これで終わりだ！！！ ヴォルカニックストライク！！！」

レガシーは噴火を連想させるような、大きい魔力弾を散弾銃ショットガンのように放ってきた。

背後には少女とフェイトがいるから避けるわけにもいかず、デイフェンサープラスと自身の体で受け止め、

ドドドドドッ！！！！

「ぐあああああ！！！！！！！！！！」

なんとか攻撃が止むまで耐えきった。正直今にも倒れたい気分だったが、フエイト達がいるからそういうわけにもいかず一瞬で痛みを消せる幻術魔法を自身にかけて激痛を消した。

応急処置程度にもならないけど、ひとまずこれで頑張るしかないか。

痛みを消すとすぐに大蛇と大鷲の幻影を100体ずつ作り、半分に実体を持たせる。

「手数が増えても無意味だよ!!」

レガシーはそう言い放つと魔力弾をかなり生成し一斉に放った。

幻影たちは魔力弾の直撃を受けて半分が消え、残りの半分は全員実体を持っている幻影だった。

それでも諦めずオレは残ってる幻影をけしかける。

「お前、召喚士だったのか!!!」

いや、幻影士

オレがくだらない事に返していると大蛇と大鷲がいつせいに襲い掛かり、レガシーは上に飛んだ。

そこで大鷲の4体を見えなくして追撃を掛けさせる。ついでに幻

影のヒグマと大鷲も作る。

「数が増えても無意味だって言ったよね!!」

レガシーはそう言い放ったあと、300発近い魔力弾を生成して大蛇やヒグマに降らせた。今度は魔力を圧縮したのか実体の有無に関係なく消えて行く。まあ困に使ってるから気にしないけど。

レガシーが魔力弾の雨を降らせている間に見えなくなった大鷲がレガシーの背後に近付き、

「そんな幻術、見破れる!!!」

レガシーが操作している魔力弾に両翼を撃ち抜かれた。

「なっ!!!!!!??」

「完全に風切り音を消したつもりだろうけど、甘いよ。わずかに残ってた」

相変わらずレガシーが何を言ってるのか分からなかったので無視して剣を構えると、コンチエルトが念話で話しかけてきた。

『「通訳します。」完全に風切り音を消したつもりだろうけど、わ

「ずかに残ってた」、です」』

「ッ！！！！」

その言葉にかなりの不利を感じた。リアリティーを出すために風切り音まで再現するようにしたのが自らの首を絞めていた。音を完全に消そうにも耳が使えないんじゃない微妙な音を聞き分けることが出来ない。

しかもはやてほど高威力じゃないとは言え、広域攻撃はオレの苦手なタイプ。時間を掛ければ倒せないこともないが、炎がそれを許さない。もう厳しい状況だった。

「じつとしてると蜂の巣だよ！！！」

レガシーは考える時間すら与えずオレに魔力弾を放ってくる。オレは急いでレガシーの方に近寄りながら、魔力弾を避ける。

なんとかレガシーの魔力弾をギリギリで避けたり防いだりしてレガシーに近付き、後一步のところまで背中から衝撃が走り、その衝撃に負けて墜落した。

「な、にが？」

何とか絞り出した声でつぶやき、自分を墜落させたものを見ようとする。レガシーの魔力弾が殺到してきた。おそらく先に撃つていたものを消さずにこの瞬間を待って待機させていたのだろう。

て、何冷静に分析してるんだろう？

『 protection 』

コンチエルトは無駄な足掻きと分かりながらも無差別に障壁を張った。そして魔力弾は障壁に着弾し、次第にプロテクションにヒビが入る。

オレとコンチエルトは防御魔法は得意じゃないし当然の結果だ。自分の愚かさに呆れているとついにプロテクションは砕け、阻まれていた魔力弾もオレに迫ってきて、煙を上げてオレに命中した。レガシーの魔力弾は重たくて174発受けたところから意識を失った。

フエイトside

激しい爆発音がしたからそつちに意識を向けるとバリアジャケツトが解除されながら悠斗が墜落していた。

「なっ！！！ 悠斗！！！！」

「ふう、時間掛かったな」

「掛かりすぎだ。ま、あの餓鬼を倒したんだから褒めてやるか。この間はカーリーナのことと蒐集が出来なかったからな」

少年のつぶやきにいつからいたのか背後から男の声がした。すぐに警戒して女の子を連れ悠斗を受け止めに行く。

「あっ！コルギアさん！！ロストロギアは見つかりました??」

「いや、密輸途中に不手際があったらしくて消えてたよ。この火災はロストロギアの影響らしい」

少年の質問にコルギアはそう返してわたしもひとつ聞いた。

「まさかこの空港火災って貴方達が起こしたの？」

「直接じゃないけど関わってるのは確かだな」

コルギアは偉そうに言い、わたしの心をイラ付かせた。

「コルギアさん、ロストロギアの回収は失敗しましたし、魔道生物

を解き放って帰りましょう」

少年がそう言うところ、コルギアが頷き何かのカプセルを三つ地面に落とす。

そのカプセルは辺りにある炎を吸い込み、成長して、最終的にライオンとヤギの頭にトラの体、鷲の翼、爬虫類の尾を持った炎の怪物になった。しかも3体。

「じゃあ頑張れよ」

「ま、助かるとは思わないけどね」

コルギア、レガシーはそう言い残して怪物を置いたまま消えた。

「お姉さん、大丈夫ですか？」

悠斗が助けた女の子がわたしの服を引っ張って聞いてきた。わたしは不安を隠すように笑顔を浮かべて答える。

「大丈夫だよ。お姉さん強いんだから」

なるべく狭いところで戦って一体ずつ倒すしかないか。そう考えていると念話が飛んできた。

「フェイトちゃん、そこ退いて」

「……巻き込むよ」

はい？

なのはと世羅の念話に危険を感じてすぐに少女と悠斗を抱えて後退した。すると強力な氷結魔法エターナル・コフィンが炎の怪物を瞬く間に氷り付け、空から桜色の破壊閃光デイベインバスターが降ってきて氷った怪物を砕いた。

なのはと世羅って攻撃相性かなり良さそうだなー

「……お兄ちゃんは大丈夫？」

「大丈夫だと思うよ。それより火災の方は大丈夫？」

現実逃避していると世羅に話しかけられたから頷いて炎の方を聞いた。

「……大丈夫。みんな消えたし、お兄ちゃん達もいなくなったら凍土に変える」

「「……了解」」

世羅の言葉に恐怖を覚えながら、なのはが悠斗を背負ってわたしが少女を抱いて、空港から脱出した。

「ゼルダ、詠唱始めるよ。」

「悠久なる凍土 凍てつく枢の地にて 永遠への静寂を与える  
それが答えるは昇らぬ太陽の静の世界 いと小さき雫は眠れる大地の  
果てで大いなる結晶へ変わり 静寂を破るものに永遠の眠りを与え  
よう」

「コキユートス・ゼロ・フォール」

氷は大地を侵食し始めて瞬く間に空港を氷らせ、炎もその氷に包まれて氷り付いた。

それは、美しい白銀の大地とも言えたけど、その眩しさと冷たさが心に恐怖と言う圧迫を与えた。

## 第11話 買い物（後書き）

作者「というわけで、ふだんよりポケを多くしてみました!!」

悠斗「前話のシリアス空気がブチ壊れたがな」

作者「そこは悠斗に頑張って貰ってシリアスにしてもらおうとして・・・  
・・・敗北お疲れ様!!」

悠斗「……そんなに死にたいのか？あれは調子が悪かったただけだ」

作者「だよね」。悠斗ツて裏設定では目が見えないし、味覚が壊れてるもんね」

悠斗「……聴覚だけじゃないのか？」

作者「聴覚に関しては表立ってやるよ。だけど視覚と味覚が使えなかった事に関してはもう出てくる事はない。

その二つは君の過去の傷跡に触れますから。だから感覚を失った事を知っているのは本人とそのデバイス、そしてカノンだけです。世羅にも誤魔化して振舞ってたから知らないよ。

ちなみに今回あとがきに來たのが僕と悠斗だけなのもそれに起因します」

悠斗「そんな重要な事あとがきで言っただけで良いのか？」

作者「ちよつちマズイ。だけど、悠斗も人間だって証明したかったから」

悠斗「……………作者、ちよつと齒ア食いしばれ」

作者「あんれ〜？どこかに怒る要因あつたっけ？」

悠斗「まず一つ。オレをそんな存在に作ったのはお前が原因だろ。」

2つ目に、そんなことをしたいためにあんな五感が壊れてるなんて面倒な設定を作ったのかよ。」

作者「五感は壊れて当然だと思うよ。本編にもあつたでしょ？『幻聴が響く』って。あれは小さい子供が背負うにはありえないくらい重たいものだから自責の念が異常に膨れ上がって耳を聞こえなくしたんだよ。」

だって普通ありえない？肉親、しかも親を見捨てて逃げる、って。そんなことしたらどんなに頑張っても精神に異常がくるよ。あげくホテルで逃げ遅れた人も見捨ててるからその事への後悔もある。ついでに言えばその事を知らないまま両親の居場所を聞いてくる妹と、無神経に聞いてくる報道陣と警察たち。

もうプレシア並みに狂ってもおかしくない筈なんだよ！！な

のに普通に生きてる。だから、精神的ではなく感覚に異常が来てる設定にしたんだよ」

悠斗「つまり戦災孤児みたいな精神状況だから無駄な設定をしたのか？」

作者「まあね。厨二病全開って言われるかもしれないけどフラッシュバックを起こす人の気持ちも考えてほしいなって思って裏設定した。ま、文才ないからちよっとしか顔を出せてないけど」

悠斗「そうか。それなら」



## 第12話 創られし少女の独白（前書き）

すみません、来週は単位の関係で休載します。

シンフォニー「なんでも危ない科目が8科目、15単位あるそうです。」

カノン「バツからしい理由だね。普通落としても6単位ですよ。15単位って普通の2倍以上じゃない!!」

「ご、ごめんなさい!!ゆるして!!!!!!」

シンフォニー「無理ですね」

カノン「ムリ」

ずびばぜんじだあああああああああああ.....!!

!.....!!

## 第12話 創られし少女の独白

悠斗 side

空港火災の翌日、空港火災の報告書や事情聴取で遅くなって結局温泉地は一泊分キャンセルして書類仕事に着手した。余談だが、世羅がオレの体を心配してかジロジロ見てきて、さつさと終わらせると思われと世羅が泣きついてきた。囑託なんだからそんなに仕事は多くないはずなんだけどな。

自分と世羅の分全部と、なのはとフェイトの分の半分を終わらせて火災現場の近くをうろついていると白髪の中年の男性がいた。オレは懐かしく思っただけでその男性に話しかける。

「ゲンヤさん、どうかしたんですか？」

「ん？お前さん誰だい？」

「ああ。こっちの姿じゃ分かりにくいですよ。今変えます」

こっちにいるときは別の姿を使っていた事を思い出して幻術でその姿に変わった。

オレの姿は20代後半のがっしりした体型の男性に変わる。その姿を見て思い出したのかゲンヤ・ナカジマさんは驚いた顔した、

「まさかお前さん、セダン・セドリックかい？」

「ええ、偽名でしたけど。クイントさんは元気ですか？」

オレが聞くとゲンヤさんはいきなり顔を伏せて答えてくれた。

「女房はお前さんが消えてから数週間後に死んだよ」

「そうでしたか。変な事聞いてすみません」

「別にかまわねえよ。ゼスト隊のメンバーと仲が良かったんだ。元気が聞くのは当然だと思うぜ」

「ありがとうございます。じゃあ今度クイントさんの墓の場所を教えてくださいですか？さすがに挨拶と帰京報告はしておきたいので」

「おう、いつもどおりシンフォニーの方に送っておくよ」

「ありがとうございます。それで、クイントさんって娘はいましたか？」

「おう、いるぞ。2人娘だ」

やっぱり昨日助けた子達か。道理で似てたわけだ。

「それでは娘さんたちにお大事にと伝えて置いてください。それで

は失礼します」

オレはそう言い残してその場から立ち去り、散歩を続けた。ちなみに幻術はこの時思い出して解いたよ。

散歩から戻ってくるとフェイトが部屋で待っていた。

「フェイト、どうかしたのか？」

「悠斗はわたしの事、聞こうとしないの？」

「へ？何か聞くことってあったっけ？」

「あの時、レガシー君はわたしの事をプロジェクトFの残骸って呼んだでしょ。聞こうと思わないの？」

まったく身に覚えのない話に混乱し、コンチエルトに詳細を聞くか迷っているとそのコンチエルトから念話が入った。

『「あの子はフェイトさんを確かにそう呼んでましたよ。もう一人の子を人の形をした兵器とも。」

それ以外とくに知りませんから普通にしていますよ」』

コンチエルトの言葉にオレは了解とだけ返してフェイトとの会話に戻った。

「これっぽちも。オレはそう言ったことに拘る主義はないし、それはフェイトがフェイトじゃなくなる、なんてことにはならないだろう。………ついでに言えば、オレはそんな顔をしている子から無理矢理聞き出すほど厚顔な性格はしてないよ」

オレにそう言われてやっと気付いたのかフェイトは自分の顔に手をやって窓ガラスに写る自分の顔を見た。

そこには気丈に振舞いながらも怖がるような表情で、目元を赤くしながら涙を流している顔があった。

「別に過去がどうか気にしないから無理矢理言おうとしなくていいよ」

「……ううん、だからこそ悠斗には聞いてもらいたい」

さっきまでの怯えるような表情は一瞬で消えて、フェイトの眼が輝きだしたのでオレは何も言おうとは思わず聞き役に徹した。何の事だか知らないけど、覚悟を持って言わないときつい事のようにだな。

それからフェイトは自分の事を語りだした。

自分は本来生きてない事、アリシアと言う少女を元にプロジェクトFによって生み出された人造魔道師だということ、そして、母に失敗作だと言われ捨てられた事。

「ふうん、プロジェクトFってのがなんなのか分かったよ。それで？」

「それでって、…わたしは人間じゃない」

「どう考えたって人間でしょ」

フェイトが言い切る前に遮ってオレも口を開いた。

「ひとつ聞くけどフェイトにとって人間の定義って何？」

「えっ？ そ、それは……」

「言っておくけど親が生んだ普通の子供って答えは無しね」

フェイトが言いそうな言葉を前もって言ったら、フェイトは言葉を詰まらせた。

「冗談だよ。人間はたくさんいるんだからそんな事を考えてもおかしくないよ。でもオレにとって人間の定理って、生きてるモノだって考えてるよ。」

たとえフラスコの中から生まれたとしても自我を持って、自分の

意思で動く人をオレは人間だって思ってる。フェイトだってそう  
だろ。自分の意思で過去を喋る決意をして今行動に移して喋った。そ  
れはオレから見れば立派な人間のする事だよ。

それともフェイトが喋ったことはフェイト自身の意思じゃなくて  
そのアリシアって子の意思でやったの？」

「違うよ！これは自分の意思でやった」

「それなら人間だろ。その証拠に、なのははやはやて、アリサとすず  
かもそれを聞いてフェイトへの態度を変えてないだろ」

オレがそう言うとフェイトは沈黙した。生憎オレは、シスコン2  
号も含めてそんな程度のことでも色眼鏡で見る奴を知らないし、いさ  
せる気もない。

「そんなことでグチグチ言う奴がオレが消してやるよ。 フェイト  
はもう、過去から別れて幸せになるべきだ」

カノンのこともあったから自分に言い聞かせる為にもそう言った。  
するとフェイトはまた泣き出して、オレに抱きついた。だけど、さ  
っきの恐怖からくる涙とは代わって、今回は嬉し涙な気がした。本  
当に感覚的だったけど。

だから安心できるようにと思ってたフェイトの頭に手を置いてゆっ  
くりと撫でた。

しばらく泣き続けていると疲れたのかフェイトはいつの間にかオ

レの胸の中で眠っていた。

フェイトが眠っている事を確認するとある人物に通信を掛けてみた。なのはから大雑把に聞いた、フェイトの事件とはやての事件を知ってそんな人物に。

「夜分遅くにこんばんは〜」

『何がこんばんは〜だ。こっちも暇じゃないんだぞ』

「相変わらずシスコン2号は頭が固いね。まあいいや、こっちも単刀直入に聞きたいし。フェイトとはやて、ついでになのはの過去の事件の事を教えて」

通信の相手、クロノ・ハラオウンは一瞬驚いた顔をして真剣な眼をした。

『本人達に了承を得なくて良いのか？』

「なのはとフェイトの過去については本人達の口から教えてもらった。だけど、言葉だけじゃ分かりづらいところもあるから」

『そうか。後悔しても知らないぞ』

「もとより覚悟の上で言ってるよ。他人の過去の重たさは痛いほど分かるから」

いいながらカノンの事を思い出してだんだんと消極的になったけど、シスコン2号は気にせず教えてくれる事を約束してくれた。そこでクロノはKYっぷりを発揮したくなつたのか話題を変えようとした。

『ところで、さっきから気にはなってたんだが、そこで寝ているのは誰なんだ？』

「フェイトだよ」

『なっ!!!??? おい、悠斗!!!!フェイトに手をだ』

五月蠅くなりそうだったからそこで通信を切ってついにて着信拒否に登録した。

そしてレガシーとの戦闘での疲れが取れてないのかオレにも睡魔が襲ってきたからフェイトが寝ている事を忘れてオレも横になった。

翌日、目が覚めたらフェイトだけでなくのはとはやと世羅も一緒に寝ていた。

アレ？何で全員……いや、フェイトは先に寝ていたか。ってそんな事はどうでも良くて！！！！なんでなのは達がここにいるの！！！！？？？？

やっと現状を認識できるくらいまで意識がさめるとどんどんパニックになった。

それでも口に出さないのは4人に甘いからだった。

その後、なのは達が眠っている間にクロノが送ってくれた昨日頼んだことについての映像を見て、若干鬱な気分になりながらも早朝練習をはじめた。

今回は幻影魔法で影なのはを作り、カートリッジで封鎖領域を張ってオレの準備は完了だ。

ちなみに影なのはは、なのはのバリアジャケットが真つ黒に黄色のラインが入ったバリアジャケットを纏い、紫の宝玉が嵌っているレイジングハートを握っている。それ以外は本物のなのはと変わらない。

「それじゃコンチエルト、よろしく」

『分かりました、マスター。…感覚同調…操作開始…ボディチェック、オールグリーン』

コンチエルトが準備を完了させたのを確認してコンチエルトを双剣に変え、宙に3の文字が浮かんだ。その数字は次第に少なくなり、0になった瞬間にオレと影なのはは前に飛んで自分達のデバイスで打ち合う。

オレはすぐに影なのはの力を空振りさせるために後ろに下がった。

影なのはちよつとバランスを崩したが、操作弾を放つてオレが隙を衝いて来るのを防ぐ。

近づけない以上、体勢を立て直させてから捻じ伏せた方が良いな。

「蒼雷」

思考を一瞬で切り替え剣コンチェルトに魔力を込める。

影なのはが立ち上がった瞬間を狙ってコンチェルトを振り下ろす。

「一閃!!」

『divine buster』

蒼雷一閃は影なのはのバリアジャケットを傷つけたが、影なのはは咄嗟にデイベインバスターを撃って反撃してきた。

「くっ、プロテクション!!」

自分が使える中で最高の強度を持つ防御魔法でデイベインバスターを受け止めた。

さすがはなのとは言うべきか、オレのプロテクションはそろそろ限界に近く、悲鳴を上げている。だが、何とか持ち堪えて、桜色の閃光が止むまで耐えた。

「やっぱなしだときついな。どうするか考えないと」

『コレも練習です』

コンチエルトはそう言って、影なのはは複数の操作弾を放つてく  
る。

「負けるか!!」

オレは操作弾の中に敢えて突っ込む。影なのはは畏に掛けたと言  
いたそうな不吉な笑みを浮かべ、オレに操作弾を集中させてきた。

1発目は体を捻って、2発目は体を回転させて、3発目はコンチ  
エルトで逸らして着実に影なのはとの距離を詰め、……全部潜り抜  
けて

「烈火双閃!!!」

コンチエルトを振った。

影なのははレイジングハートで烈火双閃の一撃目を受け止めたが、  
レイジングハートはその時に両断された。影なのはは驚いた顔をし  
たが無情に二撃目を振るう。影なのははその力に押されて飛ばされ  
たが、飛ばされながらにエクセリオンバスターを撃ってきた。

「そんなのアリ？」

ついそんな言葉が口をついてエクセリオンバスターを避けた。

影なのははその間にリカバリーでレイジングハートを修復しアクセルシューターを自分の周りに待機させる。

「セイツ！！！」

魔力を足場にして影なのはに近付き剣を振り下ろす。今度は影なのはがプロテクションで防御に回り、オレはもう片方の剣も振り下ろそうとした。

が、その前に影なのははプロテクションを爆発させて、爆風でオレとの距離を離れた。そして間隙をいれずにディバインバスターが飛んでくる。

落ち着いて対処すれば大丈夫だ。行くぞ、アクセルムーブ！！

オレはアクセルムーブでディバインバスターを避け、影なのはの背後を取って全力で影なのはに切りつけた。反応が遅れた影なのははじかに攻撃を受けふき飛ばされる。

が、そのあとに思わぬ方向から思わぬ砲撃が来た。

「ブレイカーーーーーッッッ！！！！！！！」

「へ？」

ズドオオオオン！！！！

ほぼ真下から放たれた本物のスターライトブレイカーに撃たれてオレは墜落した。

なのは side

昨日の夜、フェイトちゃんが部屋に帰ってこなかったから、探しに行こうと思った。

はやてちゃんと世羅ちゃんもフェイトちゃんを心配してくれて探すを手伝ってくれた。でも、

「ダメ、こっちにはいなかった」

「こっちの方もダメや」

「……同じく」

フェイトちゃんはなかなか見つからなかった。

「……お兄ちゃんにも手伝ってもらおうよ」

念話で話しかけた時に応答がなかったから寝ているのは確認済みで、起こすのも可哀想だと思って伝えなかった。だけど

「そうだね。わたしが起こして来るからふたりは探してて!!」

「「分かった!」」

そしてわたしは悠斗君の部屋に来て、絶句した。

ベッドの上には力尽きたように倒れてる悠斗君と、悠斗君の腕に愛おしそうに抱きついていて満面の笑みを浮かべているフェイトちゃんがいた。

何でフェイトちゃんだけ!!!???

羨ましいと思ったけど、はやてちゃんと世羅ちゃんに念話を入れた。

「フェイトちゃん見つけた」

「ホンマか!!!??」

「.....ド」

「悠斗君に抱きついて寝てた」

「.....起きたらOHANASHIしよか(しよつね)」

ちよつと2人の声が怖いと思った。

「そ、それより、このまま悠斗君の部屋で寝ない？フエイトちゃんだけはするいしよ」

フエイトちゃんへの怒りを逸らすため、そう提案した。べ、別に下心があつたわけじゃないよ！ホントだからね！！

わたしの提案を2人は受け入れ、悠斗君と一緒に寝た。

翌朝、目が覚めると悠斗君だけ消えていた。

フエイトちゃんも悠斗君も失踪癖があるのかな

「3人とも起きとるか？」

「……うん」

「何、はやて？」

「あんな、ウチ、自分の部隊を持ちたいんよ。今回みたいな災害救助は勿論犯罪対策も発見されたロストロギアの対策も、なんにつけ

ミッドチルダ地上部隊の行動は遅すぎる。後手に回って証人ばつかりの動きじゃあかんし、ウチも今みたいにフリーで呼ばれてはあつちこつち回ってたんじゃちつとも前に進めてる気がせえへん。

少数精鋭のエキスパート部隊。それで、成果を上げていったら、上の方も少しは変わるかも知れへん。

それでな、ウチがもしそんな部隊を作ることになったら、なのはちゃん、フェイトちゃん、世羅ちゃん、協力してくれへんか？」

はやてちゃんの言葉にわたしとフェイトちゃんは顔を見合わせる。世羅ちゃんはなぜか自分の手を見つめた。

「勿論、2人の都合とか、進路とかあるんは分かるんやけど………」

「はやてちゃん、何をみずくさい」

「小学3年生からの付き合いじゃない」

わたし、フェイトちゃんの順にそう言い、わたし達は言葉を続ける。

「それに、そんな面白そうな部隊に誘ってくれなかったら逆に怒るよ。ね？フェイトちゃん？」

「うんー！」

「……わたしも怒るよ。シャードキャスターのこともあるから」

わたし達ははやてちゃんに微笑み、はやてちゃんは笑顔になった。はやてちゃんは目に嬉し涙を浮かべて言葉をつむいだ。

「ホンマ、ありがとな」

「……別にいいよ。でもお兄ちゃんにも言いに行かない？」

『彼なら空で模擬戦をしているようです』

世羅ちゃんの言葉にゼルダが悠斗君の居場所を教えてくれた。

それでホテルの屋上に来たら悠斗君とわたしが戦っている姿が見えた。

「なんでなのはがあそこにいるの？」

「アレは実体化させた幻影やで」

「なんでわたしなの？」

はやてちゃんはフェイトちゃんの疑問に答え、わたしは自分が相手にさせられている理由が分からなかった。

だけど、黒いわたしの持っているレイジングハートを両断した後に思いっきり黒いわたしを切りつけたからちよっと怒った。

「レイジングハート、スターライトブレイカー行くよ」

『イ、イエス、マイマスター（すみません、怖いので犠牲になってください）』

スターライトブレイカー』

レイジングハートが何か言った気がするけど気にする余裕はなかったから辺り一帯の魔力すべてを収束砲に注ぎ込む。

「全力 全壊 スターライトオオオオオツ!!!!」

悠斗君と黒いわたしの魔力すべてを収束できた感覚がしてから

「ブレイカーーーーーッッッ!!!!!!」

結果ごと悠斗君に向かって放った。

悠斗 side

「なのは、何かオレに恨みでもあった？」

「わたしの姿を使ってることと、思いつきり攻撃したこと」

あゝ、納得しました。

「模擬戦だから本気にならないと危険だからしょうがないだろ」

「悠斗君、一回 O H A N A S H I しようか？」

「いや、遠慮しときたいなゝゝなんて思ってたりして」

「行こっか」

分かりました、地獄にですね。

オレはなのはに引きずられて人通りの少ない場所に行き、地獄を見してきた。



## 第12話 創られし少女の独白（後書き）

作者「悠斗、オハナシフラグからの生還御苦労さま」

悠斗「……そう思うんなら加減してくれ」

作者「だが断る！！」

悠斗「O H A N A S H Iされる身としてはかなり辛いものがあるんだぞ」

作者「だってO H A N A S H Iはなのはの代名詞の一つだよ。加減なんて出来るわけないじゃん。最近影が薄いカノンはどう思う？」

ズザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ！

！！！！！！！！！

カノン「なんで影が薄いことを強調するかな？うん？」

作者「ず、ずびばぜん ぼう、勘弁」





悠斗「よし。4百万の雷撃終了。このまま帰る」

カノン「さんせーい！！今日は蕎麦が食べたーい」

悠斗「分った。じゃあ買い物して帰ろうな」

作者（ver・燃えカス）「（だれか、助けて。そうだ！！コピ―ロイドなら！！）」

コピ―「ゴミはちゃんと焼却炉に入れませんか（ポイツ）」

**番外編 去年のクリスマス(前書き)**

かなり遅いけど、ライトな話だから載せてみました!!

いつ載せるか分からない次回本編を掠めない伏線が入ってます

## 番外編 去年のクリスマス

中学2年生の時の12月

カノンと一緒に別の管理外世界に来た。その世界は何かに襲われた後が嫌というほど残っていて、元建造物だった瓦礫もいっぱいあった。

街にはその場しのぎのボロ布を着た人が殆どで綺麗な服や肌をしている人はまるっきり見ない。

「よくもまあこんなに壊せるものだね」

「まったくだな。お陰ですれ違う人全員に目に光が宿ってないよ」

さっきから見て回っていると、この街の人は絶望に染まっていて何もしようとしれない。子供ですら、他の子と遊ぼうともしない。

異常を極めたような待ちの状態だった。

1年前はこんな状態じゃなかったんだけどな。こんなことした奴は地獄に送ってやる！！

オレ達は1年前もこの世界に来たけど、その時はかなり活気があって、いろいろと楽しい思いもした。世羅を連れてくることはなかったけど、この世界にはいろいろと面白い道具があったり、食べ物があったりしてたまにそれをお土産にしていた。

だから、この現状が許せなく思っていた。

たしかあの人は……………？

自分の持ち物だった物を並べて売ろうとしている母親と、その母親にしがみついて離れようとする少女の親子を見つけて、去年はその親子と交流があったことを思い出したから、その親子に話しかけようとした。

「この現状ってどういうことなんですか？」

カノンが話しかけると母親の方はびくりした顔でカノンの顔を見て、オレの顔を見た。

幽霊でも見たような顔をした後顔を歪ませ、母親は泣き出した。子供も母親の様子を不思議に思ったのか顔を上げてカノンの顔を見た瞬間にカノンに抱きついた。

「あ、あんた達、生きてたんだね！！ うっ、うわあああああ！！」

「カノンお姉ちゃん！！生きてて良かったよ！！！！」

本当に何があったんだろう？

そんな疑問が頭の中に浮かんだけどひとまず親子の思うままに泣かせることにした。

やっと泣き止んでくると、手持ちにあったおにぎりを取り出して親子にあげた。

他の人が羨ましそうな目をしたけど、生憎手持ちがおにぎりだけだからあげる物がまっなくなかった。食べ終わると少女の方はカノンが拉致ツた。

「それで、あんなに活気があったのにこんなに静かなのは何で？」

「フェリシア、は知ってるよね？」

「うん」

この世界にはフェリシアという怪物が存在して、その姿は多種多様。２メートルのカブトムシ人間みたいなフェリシアもいた。

それでも街の人達が安心して暮らせるのは魔法が使える人達、通称『マジ』がフェリシアの出現を感知して倒していくからだ。ただ、マジは若い内にしかなれず、大人になったら魔法の力が小さくなつて最終的に魔法が使えなくなる。

「そのマジが一斉になくなったんだ」

「はっ！！！！？？」

それは一番不味くない？倒す方法が一気に無くなつたら死滅は当然だろ！！つか、逆によく生きてられたなって思いが強くなるよ！！！！



「フェリシアよーーーーー!!!!!!」

不意にそんなおぞましい雄叫びと甲高い悲鳴が聞こえた。

「その前に八つ当たりをしてくるよ」

目の前の人にそう言い残してさっきの聲が聞こえた方向に向かった。

さて、どうするか。

あたしが連れて行った子、エルルって言うんだけど、エルルと遊んでいたらフェリシアがウザッたい事に襲ってきました。派手に消すとエルルちゃんが怯えちゃうし、本当にどうしよう??

ギョアアアアアア!!!!!!

「しっしっ」

ダンッ!!!!!!

小さな空気砲を作ってフェリシアを貫き、50センチ以上ある穴を開けられてそのフェリシアは倒れた。

知能はあるのかその光景を見たほかのフェリシアはあたしに近付こうとしない。その勘は正しいよ。近付いたら血の雨を降らすからね。

そう考えたとき、あたしの考えが根本からずれている事に気付いた。

「エルルちゃん、ちょっとの間、そうだねえ3秒くらい目をつぶってて」

「分かった。カノンお姉ちゃんを信じる」

エルルちゃんはそう言って目をつぶってくれて、やっとあたしの本領を発揮できるようになった。

「断空、両断しなさい」

あたしが持つ中で高い攻撃力を誇るロストロギアの力を使ってフェリシアを切り裂く。いや、正確には両断した。

このロストロギアは全てを断つ能力をもっている。このロストロギアは常に微弱な波動を出していて、その波動だけでは何の効果も無くて、あたしが両断を命じた時だけ波動が刃に代わって両断する効果を発揮する。言ってしまうえば近くにいる限り絶対に逃げられない

い処刑道具だ。

フェリシアも一瞬で死んで、見事なまでに綺麗にずれた。

「カノンお姉ちゃん、もう目開けていい？」

あつ、まだ目をつぶってたんだ。本当に可愛いな。

「うん、目を開けても良いけど、もうちょっとだけ目をつぶって大丈夫かな？」

「分かった」

辺りの血の惨劇を見せたくなくて咄嗟にそんなことを言った。

断空でやりすぎて、周りには綺麗に二つに分かれたフェリシアの体と、切った時に体から噴出したフェリシアの体液があたしの体にもこびりついている。こんな状態を子供に見せたら卒倒されるのが簡単に頭に浮かんだ。だから、目をつぶっているエルルちゃんを抱きかかえてフェリシアを両断する。

「ってあらら？」

エルルちゃんを連れてこの場を立ち去ろうとすると、牛みたいなフェリシアに囲まれた。

困むなんて、それなりに知能も増えたって事か。

「フェリシアよー！ー！ー！ー！！！！！！！！！！」

そういえばこの世界じゃ戦う方法がほとんど無いから他の人に救援を求めるんだっけ？ いや、最後に来たのが去年のクリスマスだったからすっかり忘れてたよ。

フェリシアたちの包囲網を文字通り切り開きながら進んで行くと、のんきそうな笑顔なのに目が怒りに染まっている悠斗がいた。

「悠斗、何怒ってるの？」

「この街を壊したバカどもはフェリシアだそうだ」

あゝ、納得。……ってこいつら！！！！？？？？

「悠斗、それってどういうこと？」

すぐに問い詰めると悠斗はエルルちゃんのお母さんから聞いた話を包み隠さずに話してくれた。フェリシア達にはウエアウルフを向かわせたから今のところ襲われる心配はまったくない。

そして、全部聞き終わったときにはあたしも怒った。

そっか。フェリシア達があたしの楽しみを奪ったんだね。あたしを怒らせると、どうなるか身を持って知りなさい！！

「悠斗、ユニゾン行くよ」

有無を言わずに悠斗に抱き付いてユニゾンをする。

母親から聞いた話を全部カノンに話すと、カノンも怒って勝手にユニゾンしてきた。

楽だから別にいいけどな。エルルはどうしようか。

「短時間でけりを付けたら良いな。『感染の書』ドライブ」  
『イグニッション』

殺害特化のロストロギアを呼んで体の中に取り込んだ。取り込むと同時に額に目ができて視界が更に鮮明になる。いや、このロストロギアの場合細菌が見えるようになったと言うのが正しいか。

このロストロギアは自分を中心に色々なウイルスや細菌を撒き散らす能力があつて、人の病気を治す力もあるけど、殆どが人を殺すための力だ。

『それじゃ行こう。感染爆発』

アウトブレイク

カノンの言葉と同時にオレの体から大量の細菌やウイルスが撒かれる。撒かれたウイルス達は人間やフェリシアの体に入り込んでいき、フェリシアの命を蝕む。

そして、全てのフェリシアが一斉に血を吹き出した。その光景はある意味凄惨な地獄であり、綺麗な天国でもあった。

フェリシアは体から出て行った血を周囲に撒き散らす。まるで、舞踏会に参加する踊り子のように。血は粉雪のように舞いながら街にしんしんと降る。どんな人が見ても、繰り広げられる光景の美しさに目を奪われずにはいられないだろう光景だった。

目の前の光景をやらせた張本人であるオレでも、目の前の光景には目を奪われずに入られなかった。

『悠斗、終わったよ』

「ん、お、おう、助かったよ」

カノンに声をかけられて正気を取り戻したけど、生返事ではか返せなかった。

『体調どこが悪いの？』

「ぜんぜん、綺麗だなんてつい思っただけ。それより人は殺してないよね？」

『大丈夫。人に対してはワクチンもばら撒いていたから感染することはないよ。接触感染の心配もなし。比較的安全だよ』

何が比較対象なのか分からないけど、ツツコまない方が良さそうだな。

「それよりなのは達連れてこよう。驚かせる事になるだろうけど消せばいい」

『どうせだからこの姿のまま拉致してこない？したら消す手間も省けるし、あの子達にもいい思い出が出来るでしょ』

「そうするか。封時結界を頼むな」

『はいはい、任せなさい』

カノンとそんな会話をしているとエルルが目を開いた。もしかして今の会話聞こえたかな？

そんなことを考えているとエルルが寂しそうに口を開いた。

「カノンお姉ちゃん達またどこかに出掛けるの？」

「うん、でも今日はちょっとしたらまた戻ってくるよ」

「また来年？」

「違うよ。長くても、今日の夜ぐらいには戻ってくるよ」

「嘘、ついてない？」

「約束するよ」

オレはエルルを安心させるためにそう言いながら、エルルの小指とオレの小指を絡める。

「また戻ってくるって。」

指切りげんまん嘘ついたらハリセンボン飲めます。指切った」

「分かった。また戻ってきてね」

エルルに見送られながらオレ達は転移魔法で地球に戻った。まずははやての方にも行くかな。

そして、呆れるぐらいタイミングのいい時にはやてと出会った。いや、マジでどんなご都合主義？

そんなことを思った理由は、はやてがなのは、フェイトと一緒に魔法の練習をしていたからだ。しかも、周囲には誰もいないし、カノンのことを知ってそうな守護騎士達もいない。これ以上ない絶好のタイミングだった。

一応念のために幻影を発生させるロストロギアを体内に取り込んで、3人に話しかけた。

「八神はやて、高町なのは、フェイト・テストロッサ・ハラオウンの3人だよな」

「そう言うあなたは？」

「俺は……そうだな。ゾロアという名前だ」

「ゾロアさんですか。わたし達に一体何の用で？」

「ちょっと危険な街があつてね、その為に歌って欲しいんだ」

「歌か。せやけどウチ達は歌は得意やあらへんで」

はやて、さらりと嘘つくな。3人ともカラオケマシンで90点以下出した事一切なかっただろ。ま、それが頼みに来た理由じゃないんだけどな。

でもカラオケマシンのことを知っていると怪しまれるし、時官を理由にしますか。

「時空管理局の人だからその人達のことを思って歌ってくれと嬉しいと思っただけだから上手い下手は関係ないよ」

実際、歌が下手な人でも歌ったらしいからね。

オレの言葉に納得したのか3人とも思案顔になった。

「ついでに言えば、断らせる気はまったくない」

「「「どういこと?」「」」

「「「言う事。長距離転送・転移」

前もって発動しておいた転移魔法を使ってさっきまでいた世界に戻っていった。その時に3人の悲鳴が聞こえたけど、どうでもいいか。

でもせつかくだしシグナム、ヴィータ、シャマル、アリサ、すずかも呼ぶか。世羅を呼んだら問題になるから呼ばないけど。

そしていろいろと準備（と言ってもシグナム達を脅迫して、サンタ服を作って、防寒の魔法をかけるだけ）を終わらせて町の広場に全員立つてもらった。

順番は右からシグナム、ヴィータ、すずか、はやて、なのは、フエイト、アリサ、シャマル、リインフォースだ。

なのはが主なMCを務めて、他のメンバーが会話に交ざって来る感じで聖歌祭が始まった。  
クリスマスパーティー

「それじゃ歌うね!! 1曲目はマジックナイト」

白く輝く〜聖なる夜の奇跡〜

世界は変わるよ〜みんな暖かく〜

きらめく空に〜希望の鐘は響く〜

愛が降り積もる〜今夜世界中に〜

「今日初めて聞いてけど、聖歌みたいでいい曲だね」

「せやな。ほんなら次の曲に言ってみよか! 次は『S N O W R

a i n

雪が融けて〜 きらめく〜

風になる〜  
旅立ちを誘う風いそよ〜

祝福の風〜  
願いは〜  
離れえぬ絆へ〜

誰もが皆いつか〜  
旅立つ〜  
悲しみと傷跡を背負いながら〜

旅の彼方に出会える〜  
答えを探してる〜

雪が夜に融けて輝く〜  
風が今〜  
旅立ちを誘いゆく〜

祝福の風〜  
旅路を〜  
微笑み行けるように〜

「サビの部分だけやったけど、面ろかったな」

「それじゃあ、3曲目に行こうか！……フェイトちゃんの『翼』。どうぞー！」

「ふえ！？わ、わたしいいいいいいいい！！！？？」

今はまだ、小さなこの腕だけ

いつの日か、きっと何かをできるはず

大切な時を今生きている、大丈夫、少し空が冷たくても

飛べるから、あの日あなたがくれた翼が今、強く、高く羽ばたくから

「な、なのは、いきなりは難しいよ」

「大丈夫だって。フェイトちゃん、ちゃんと歌えてたよ」

「よし、ほんなら4曲目はなのはちゃんの『BRAVE HEAR TS』でいこか」

変わりゆく季節の  
狭間に今、同じ夢つなげてる  
BRAVE  
HEARTS

ぬくもりの数だけ  
強くなれる  
願い星眺めてゆく

響きゆくメロディ  
銀の絆  
いまそつと変わってゆく  
BRA  
VE  
HEARTS

やさしさと一緒に  
勇気の風  
胸の中舞い上がって

「それじゃ本日最後の曲、フルボッコの代名詞『BRAVE PH  
ONIX』と共闘の歌『don't be long  
』」  
二曲続けて、どっぞー!!

強さを求めて戦い続けて  
儂い弱さに気付く事  
remember  
r

信じて走って感じた孤独 頼れるものがどこにもなくて

いつでも近くで優しさをくれた 本当は憧れを抱いていた 1

o o k i n g   b a c k

上手くいえない事もあるけど 言葉じゃなくて伝えられるものがや  
っと 生まれてきた

D o n ' t   b e   l o n g   君との出逢いで胸に輝く勇氣は

思いがけないほどに大きく解き放たれた

運命に負けないように一生懸命動き出そう

計算違いの展開が未来を切り開いて行く

過ぎ去る景色が色あせてしまっ 弱さも受け入れ迷わない I

W i t h   y o u

狙い定めて逃げ道消して〜 心に誓おう怯えてしまわないように  
乗り越えたい〜

Don't ever 泣き顔見せずに諦めていた痛みも〜

隠し通してきたけどぐっと立ち上がる気持ちで〜

全てが終わらないよう向き合おう簡単な事〜

本気で戦えた日々誇れる喜びもある〜

願いは叶うものたくましくなった〜 僕らのチカラで現実を超え  
て〜

Don't be long 君との出逢いで胸に輝く勇氣は〜

思いがけないほどに大きく解き放たれた〜

運命に負けないように一生懸命動き出そう

計算違いの展開が未来を切り開いて行く

手と手の温もりが僕を強くする  
て  
積み重ねた想い空を駆け抜け

風になるこの願いが涙さえ乾かして  
き抜ける  
解き放つ力が剣になり突

きつと終わりは始まりの唄

羽ばたいた鳥の唄

戦う意味を見失わないで祈りよ星になれ

今は共に燃やした焔を明日への灯火にして

震えてもいいからぐっと前を見よう

この胸に小さな勇気と 奇跡を

気づけば傍にいるなんて暖かいの  
まるで花のようになんていつも寄  
り添って

本当の宝物が何なのか気づいたよ  
もう二度と迷わない君の為  
に僕の為に

きつと涙は虹に変わって

七色に煌めくでしょう

心と心の架け橋になり刹那でもいいから

そして大きな翼を広げあの丘の太陽より

とびつきりの顔で無邪気に笑うんだ

ただ空は光を待ってる 飛ぼうよ

やがて僕や君が大人になって夜に泣いてても  
ない歴史が未来の地図になるだろう

このかけがえの

さあ今生まれゆく新たな道をどうか惑わずに  
らん地平線から命が息吹くよ

ほら見上げて

きつと終わりは始まりの唄

羽ばたいた鳥の唄

戦う意味を見失わないで祈りよ星になれ

ぎゅっとぎゅっと繋いだ心を絶対に忘れないよ

確かなことは今旅立つ僕達が

夜明けより輝いている事 笑顔で

振り返らないで 行こうよ

「皆ア！！聴いてくれてありがとう！！」

歌い終わってすぐに大歓声が起こった。近くにいたら冗談抜きで鼓膜が破れそうなほど。なのは達もちよっと五月蠅そうにしてたけど、それでも嬉しさが勝ったのか終始笑顔だった。

なのは達は歌い終わるとステージから降りて、町の人達にわやくちやにされた。

若干ライブになっている気がするけど、楽しい聖歌祭を過ごす事が出来たよ。

わやくちやにされているなのは達に感謝しながら、様子を静観し

た。助ける気は全くない。

「ううう、セクハラされた〜」

なのはが開口一番にそうつぶやいた。

これは、あっちにO H A N A S H I Iするべきか？  
他のメンツも疲れたようにげっそりとしていた。

「ところでさ、この街には面白い風習があるんだね」

「ああ、あの話ね。聖歌祭では、」

「女の子だけがステージに立って、」

「魔法で着替えた赤い服着て、」

「マジックナイトを歌う」

「本当は誰でもよかつたんだア」

あ、あれ？なんか怖い空気があるんだけど、気のせいかな〜、な

んで、おもって、たり、して……………

「なに、言われれば普通に引き受けた事を、脅迫されて命令されたんだ。八つ当たりぐらいしていいだろう」

は、ははは。もしかしたら断られるかもしれないから拒否権なしに連れてきたんだけど、やっぱり不味かったか。

「長距離転送・地球へ」

「ちよっ！！逃げ……………」

ヴィータが何か言おうとしたが、その前に転送され、途中で切れた。

「ありがとうね」

不意に背後からそう話しかけられて、後ろを振り向いた。背後にはあの時の母親とエルルがいた。幻影魔法を解くと、また口を開いた

「あなた達のお陰で皆に生きる気力が湧いてきたよ。本当にありがとうね」

「お礼ならなのは達に言ってくださいよ。オレは何もしてないんですから」

「別世界じゃお礼を言えるわけないだろう」

呆れるようなため息をついてからそう言われ、確かにそうだった。思った。

「それに、あんたがあの子達を連れてこなかったら昨日と同じ生活が続いていたんだ。アンタに感謝しても問題ないだろ」

「ふふっ、じゃあその言葉、ありがたくいただきます」

「カノン、いつの間に来たんだよ」

「今さっき。今日もそろそろ終わるから、エルルちゃんにお別れを言いに来たの」

「カノンお姉ちゃん、またどこかに行くの？」

「うん、ごめんね。来るのはまた来年だね」

「行っちゃだだよオ!!」

「こら!エルル!カノンちゃんだって色々あるんだから我が仮言わない!!!」

「別にいいですよ。子供は我が俣を言った方が元気があっていいですから。」

ただ、元々オレ達にはこんな優しい世界に来る資格がないだけ」

「そうだね。今日だって、この手を血で赤く染めてしまったもんね」

カノンが背中からオレの手を掴んで苦しそうにつぶやき、

「あんた達には感謝しても仕切れないほど助けてもらったんだ！そんな事言っんじゃないよ！！！！！」

咎められた。

2人にとってコレは背負うべき罪だと思っていたから、その言葉に呆然として、笑った。

「とにかく、また来年来ますね。今度こそ、本当の聖歌祭を見に」

「じゃあね、エルルちゃん。また今度遊ば　その時はセイレーン  
マギとしての姿も見せてね　」

「それじゃまた今度」

名残惜しかったけど、オレ達はそう言ってその世界から離れ、自分達の住む世界に戻った。現実から逃げてても何も変わらないから、現実と向き合うために。

番外編 去年のクリスマス（後書き）

天ノ

「と、言うわけで分かる人は分かるネタ特集〜ドンドンパチパチ」

悠斗

「分かる人は分かるって、全然分からないんじゃないか？」

天ノ

「文才ないからね〜。ついでに言えば伏線と言える伏線じゃないし、3が2に変わるだけ？」

悠斗

「絶対混乱する人が多いよ。この小説って1月7日0時現在でPV44096アクセス、ユニーク7389人しかないんだから。その中でさらにそのネタを知っている人は1人いれば良い方じゃないか？」

天ノ

「あっはっは、否定はせん。でもちよつとやってみたかったてのもあるし、そこら辺は本当に自己満足だね。実際更新も止めてしまうから」

悠斗

「ホント、駄作者だな」

天ノ

「……………ねえねえ、悠斗。なにか悪いものでも食べた？」

悠斗

「いきなり何を言い出してるとんだ？」

天ノ

「だって、いつつも君は処刑役だよ！！なのに悠斗が駄作者呼ばわりした時点で攻撃が飛んでこないってありえない！！！！」

悠斗

「今回の処刑役はオレじゃないからな」

天ノ

「？じゃあ誰？」

悠斗、とある方向を指す

天ノ



## 番外編 人殺しの幻影師（前書き）

黒い鳥様、Baro様、感想ありがとうございます。

しかも黒い鳥様からは『悠久の魔導書』までいただいちゃって本当にありがとうございます

今回はダーク&グツダグツダな話なので、読まなくてもいいです。というか悠斗が真っ黒だし、闇孕む聖母の中で最悪な話かも。

あと、どうでもいいけどマイアはまた登場しますから、堪えてください。

## 番外編 人殺しの幻影師

シャードキャスターの中にアストンがいると分かってから世羅は次元世界を転々と渡り歩くようになった。間違いなくアストンの足取りを掴もうとしてるんだろうけど、そういった事は捜査官や執務官に任せた方がいいと思うのがオレの心境だ。

まあ、世羅は一切聞く耳持たないだろうけど。アイツにとって優先順位は母さん オレ>自分>父さんだからな。

なのは、フェイト、はやては任務でどこかに行ってるから遊びに行くことも面倒だし、もらい物のため試運転も兼ねてカノンと出かけてくるか。

「カノン、ちょっとあの場所に行かない？」

「あの場所？ああ、あの場所ね。アレしに行くんだ。そうだね、あたしもちよつと浴びておきたいな」

「……狂人になるぞ」

「少しは雨を浴びておきたいって乙女心が分からないかな？」

「……………まったくこれっぽっちも」

というか、普通浴びたくないと思う方が多いはずだが…………カノンに言っても無駄か。

「悠斗のイジワル。」

「まあいいや、じゃあそっちに移るね」

「いや、イジワルじゃないから。っておわっ!!!???」

カノンとの思念通話はそこで切れ、いきなり後ろから衝撃が走った。その衝撃のせいで前のめりに倒れそうになったけど、何とか根性で持ち直して衝撃の犯人をにらんだ。

「カノン、どういっつもりだ?」

「だって悠斗ったら最近あたしに構ってくれないんだもん。ユニゾンするのだってシンフォニーちゃんだし」

「ロストロギアを持つてて知られたくないんだ。それに、管理局にばれたらカノンが解剖されるのは目に見えているぞ」

カノンは魔導書型ロストロギア全部と同等の価値があるように見えるだろうからな。

大切な家族をまた失いたくないからそう言っただけでカノンを諫めた。

「分かってるよ。悠斗があたしのことを思って行動してるって。だけど寂しいんだよ。あたしに唯一触れられる人が、遠くにいて、強大な力を持つあたしは何もできないって」

顔をうつむかせて、悔しそうに口を歪め、哀しそうにカノンはつぶやいた。

その言葉にはカノンの悲しみの記憶が詰まっていたからオレは何も言うことができなかった。あくまで、記憶は記憶でしかなくて、経験じゃないから。

でも、いつまでもシリアス空気を出しているわけにも行かないから強引な話のすり替えをした。

「じゃあ行くのが。早くしないと壊れそうだからね」

転移魔法を使いながらカノンに向かって手を差し伸べ、カノンは嬉しそうに笑ってオレの手を、手に取った。

転移した場所の100メートル先には隠れるように建っている研究所があった。普通の研究所が隠れるように建っているわけが無く、当然違法研究所だ。

悠斗とカノンもそれを理解してここに来ている。いや、あえて来

たというほうが正しかった。

「それじゃ『悠久の魔導書』の力を試してみるか」

「その前に姿を変えないとね」

オレが魔導書型デバイスを取り出すと、カノンは背後から抱き付いてきた。

前から思っただけど、これって胸が当たってるからちょっと恥ずかしいんだよね。

変えようの無いことにクレームを付けながら、カノンの行動を待った。

「っていつまで抱きついてるつもりだ!!!????」

「だって気持ちいいんだもん。ごろにゃ〜ん」

バジッ!!!

「もう、短気はいけないよ。ユニゾン・イン」

「スタンガン並みの電流を流したつもりだったんだが、これでも甘かったか」

『あんなの蚊に刺されたほども感じないよ』

はあ、今度は電流上げよ。でも、どれぐらいあげるかは終わってからだな。

違法研究所をにらみつけ、自分を解放していく感覚で救世主<sup>メシア</sup>を解き放った。

その瞬間に空が一瞬で雨雲に包まれ、稲光<sup>いなびかり</sup>を起こす。その1秒後には雷が雨の如く連続で落ち始めた。

これで、通信妨害は終了。次は物理的に行くか。

『アクセルムーブ』

高速移動魔法で違法研究所に一瞬で近づいて、雷の力で壁を壊した。

当然のごとく警報が鳴って研究所の警備員達が駆け寄ってきた。目的は……まあ命を無駄にしに来たって事でいいか。警備員だろうと逃がすつもりはまったくないし。

「『《電腦の書》』《大祭の書》ドライブ」

『『イグニッション』』

この研究所に入り込んだ後は二つのロストロギアを体内に取り込んだ。

デバイスなども含めて全ての電子機器を支配下に置くロストロギア《電腦の書》を使ってこの研究所にいる人の居場所を全て割り出

して、転移装置などは壊し、自分の姿を機械には移さないようにする。そして、大自然を自由に操るロストロギア《大祭の書》で暴風域を研究所周辺に作り上げ、研究所を囲ませる。

これで、逃げ道は一切なくなった。

「キサマ、一体何しにきた!!?」

「見ての通り、この研究所を壊しに」

「させるか!!!」

警備員の1人がそう叫びながらオレに向かって駆け寄ってくる。

けど、本気を出せる今となっては無意味に近い。

コンチェルトを抜いて、その警備員の背後を取り、体を4つに切り分けた。

どの警備員も目の前で行われた光景を信じる事が出来なくて人間だった残骸を見続ける。しかし、じっと見つめていても結果は変わらず、残骸は無残な形で切り捨てられ、傷口からはおびただしいほどの血が流れ続ける。どんなに目を背けようとも、それは死んでいた。

「う、うわああああ!!!!!!!!!」

警備員の1人が悲鳴を上げながらその場から離れようとしたけど、後ろに下がろうとした瞬間に、文字通り首が飛んだ。

飛ばされた首は放物運動を続けてすこし離れた場所に落ち、首の

なくなつた胴体は力なく崩れ落ち、地面に伏せた。

「この研究所から、誰一人逃がすつもりはないからね」

《断空の書》で首をはねた悠斗は全員に向かってそう言い、その場にいる人全員が悠斗を、悪魔を見るような目付きで見た。警備員達にとっては、他人の命を呼吸するかのように奪う相手に出会ったことがなかったから、怯えるのは当然かもしれない。

「こ、こつちに来るな！！ バケモノ！！！」

1人が悠斗に向かって魔力弾を撃ち、他の人も我を取り戻して悠斗に魔力弾を撃ち込む。

複数の人間がやれば、軽い一発でも弾幕になって、悠斗の姿を煙に覆った。

その光景に死んだと思つて安堵した人がいた。しかし、爆煙が晴れるとそこにいたのは宙を浮いている魔導書と、煤一つ付いていない悠斗の姿だった。

また魔力弾を放つけど、全ての魔力弾は悠斗に当たる前に弾かれて悠斗には爆風すらかすりもしなかった。

「なんだよそれ」

警備員の1人が絶句しながらそう言い、悠斗は冥土の土産にとでも思っただけ答えた。

「《悠久の魔導書》って言って、擬似的なリンカーコアが入ってるから、自動で迎撃術式や防御術式や回復術式を発動させるんだ。しかも無理矢理な干渉をされたら相手の意識を奪って、壊れても勝手に修復する凄いやばいデバイスだ」

『あたしの思い通りにならないムカつく品だけどね』

「……………まだ拗ねてたのか」

いい加減諦めろよ。

悠久の魔導書はカノンの持つロストロギアではなく貰い物で、貰った時から自分の配下には出来ないことに脹れていた。でも閑話休題

警備員達は絶望に染まった顔をして、自分達の武器を取り落とし、た。でも、悠斗はその行動に気持ちの変化もせず、逆に躊躇いなく殺した。

その後も奥へと進んでいき、カプセルが横に並べられた通路を発見した。カプセルの中には10歳以上の子供は全くいなくて、所々異形な形に変貌していた。

ある少年は右腕が深い毛に覆われていて、ある少女は顔の6割が虫みたいになっていた。酷いもので、虫や鳥や蠍や蛇をグチャグチャに融合させて人間らしさが残っている所は顔の左だけ。こんなこととした人間の精神を疑う光景がそのカプセルの中にはあった。

『酷い』

「同感だ。もっと早く来るべきだったな」

『ヒーローを気取ってるつもりはないけど、こんな事までして力が欲しいの?』

「じゃなかったらこんな、常軌を逸脱しすぎた事はしないんじゃないか?」

自分で言っていてイラ付いた。こんな事した人にもイラ付くけど、こんな事をする人間と言う種族にもイラ付く。自分が上位種族だとか言うつもりはないけど、少なくとも人間性を失わせるようなことはしない。

人の業ごうを知っている者としての怒りに、若干自分を見失いながらカプセルの通路を通り、一番奥にあった扉を開いた。

そこには一番大きなカプセルに閉じ込められて眠っている5歳くらいの少女と白衣の研究員達20名、そして光が全く見えない目をした少年少女が3人。

「君が侵入者かい。人を殺す光景を見てたけど、映像で見るとより若いんだね」

何か代表そうな白衣の男が饒舌に話し出した。  
悪趣味な男だな。見てたなら助けようとは思わないのか。

「私の名はマイア・ディスケンス。この研究所の研究長をやっている者だよ」

ほう、この男がマイア・ディスケンスね。  
ちょっとした因縁のある相手の名前に軽く驚きながらこみ上げて来る怒りを無理矢理抑えつける。それでもしないと、一瞬で殺してしまいそうだった。

マイア・ディスケンスは違法科学者として裏ではかなり有名で、彼の実験体は全ての生物の子供を使う、外道な科学者だった。

「私のコレクションはどうだった？とても美しかっただろう」

「最悪な気分だったよ。アンタの後ろにいる奴らも共犯者か？」

「そうだよ。だったらどうするかね？」

「別に。ここにいる時点で全員殺すよ」

「ふはははは。ただの侵入者が面白い事言うね。05号、06号、07号、あの男を殺しなさい」

マイアがそう言うと3人の子供が襲い掛かってきた。一人は桃色の髪で左眼は普通の黒い瞳で右目が昆虫の複眼になっている少女。もう一人は右腕が鳥の鉤爪、左腕が犬のような体毛に覆われた爪の長い生物の腕になっている灰色の髪をした少年。最後の一人は背中から羽が生えていて、右の羽が鳥の羽、左の羽が虫の翅、左腕は水かきのついた爬虫類の腕、口には蛇の毒牙が生えている少女。3人とも姿は人間とはちょっと違っていて、力も強かった。

少年の鉤爪のついた腕を受け止めるのが精一杯で、衝撃までは殺す事が出来ずに吹っ飛ばされた。その隙を逃さずに、07号と呼ばれた少女が羽を器用に使ってオレの背後に回った。

「セイツー!!」

吹っ飛ばされながらも体を捻って乱雑な動きを加えて、少女を切り捨てた。非殺傷設定だったから本当に切れることはないけど、それなりに強烈な一撃だったからしばらくは動けないはずだ。そう思ってアクセルムーブでマイアに向かって飛んだ。

しかし、05号と呼ばれた少女が横からオレを掴んで、オレを別の方向に投げとばした。

咄嗟に受身を取って壁に着地し、電磁力で壁から立ち上がった。

「目を覚ませ！！！！クソ科学者達に道具扱いされたまま生きたいのか！！！！？」

「ふはははは。無駄だよ、反抗されるのを防ぐため、人格は完全に破壊してるよ。むしろ話しかけることさえ時間の無駄だ」

高笑いするマイアの言葉に、オレ達の怒りは限界を超えた。

『……悠斗、広域殲滅を詠唱するよ』

「分かった」

俺も撃ちたかったから、カノンの言葉に遠回しながら賛同した。狭い空間で広域殲滅魔法を使う事自体自殺行為だから、使う気は起こらなかつたけど、自分も多少喰らうだけだと割り切ったら使うことに躊躇いはない。

「どうしたのかね？まさかこんなゴミに同情でも覚えたのか？」

急に鈍くなったオレの動きに不審を抱いたのかマイアが嘲りの笑みを浮かべながら口を開いてきた。

少し黙れ。それ以上、口をきくな！



『悠斗、詠唱完了!! ぶっ放す……』

「……………コロシテ……………」

カノンが言い終わる前に小さくて、か細い声が聞こえた。一瞬誰が言ったか分からなくて動きを止め、その隙を狙って07号がもう片方の手で強烈な一撃をくれた。

受身を取ることすら忘れて壁にめり込むほど強く叩きつけられ、口の中に血の味がした。

だけど、そんなことより大切な事が頭を支配する。

『さっきの言葉……あの子が言ったんだよね?』

「たぶん。マイアの後ろの奴等がそんな何の意味も無いことしないだろうし」

カノンもオレと同じことを思ったのか、オレに確認を取りに来た。説得しようとはしてないんだから、わざわざあんな横槍入れても無駄にしか思えないし、やっぱり07号の言葉だよな?

『悠斗、神縛しない?』

あつ!! その手があったか!!! 全然思い出せなかった。

カノンに言われてその本のことを思い出して、勝機を見つけた笑みを浮かべる。



は存在しない。

《天獄の禁書》は天国と地獄を支配するために作られた魔導書。その中に収められているのは天国だと思える魔法と、地獄だと思える魔法の両極端な魔法が収められている。

「封印せよ、ルーンセイバー」

『詠唱完了。自分が呼び寄せた業火に焼かれて罪を償いなさい！！』

05号、06号、07号を決して老いることの無い空間に閉じ込め、他の科学者たちは空間に開いた大穴に強制収集して向こうに送り込んだ。

「他にも助けられそうな子供は助けに行くか。カノン、ユニゾンアウトを」

そう言つとオレの体は光りだして、光の珠が体から出て行くと同じ時にいつもの姿に戻った。

「じゃ、いつもどおり行こっか。コンチエルトが情報の収集と消滅あたしと悠斗が生存者の救出と人間じゃいられなくなった人の殺害」

『分かっています』

「コンチエルトは情報収集の前にもう一仕事な」

コンチエルトで大きなカプセルを砕いて、適当なコントロールパネルの上に置き、魔法で毛布を実体化させて、カプセルの中に入れられていた少女に毛布をかぶせる。

あとはカノンと別れて研究所内を探索し回って、外に出しても大丈夫な子供たちを救出して隠れ家の方に帰った。

そして隠れ家、というかどこかの組織から強奪したアジトに帰ってきた。元々いた奴らは人身売買を営んでいたから皆殺しにしておいた。

この場所は、オレ達以外誰も知らないから人に見つかる心配もないし、惑わせるロストログアを動力に感覚を狂わせる霧も発生させているから誰かが来ることもない。

「ここらでいいか。封印解除、捕らえた者を解放せよ」

そう言うと、《神縛の魔導書》が輝きはじめた。

《神縛の魔導書》から出てきた光の粒子は離れて行き、人の形を作り始める。その光は最後には05号、06号、07号の姿をした。

「さっきまで別の場所にいたのに？」

どういうわけか、人格を壊されていたはずの07号が口を開いた。まさかと思つて05号、06号を見たけど、まだ自分を取り戻した様子はなかった。

「どうやって自分を取り戻したの？」

「分からない。だけど、ワタシ達を実験動物にしたいの？」

「あたしも悠斗もそんなことに興味はないよ。ただ、人間が与えた苦しみの分救いをあげようって思っただけ。

死にたかつたら殺してあげる」

カノンは楽しそうに笑いながらそう言い、07号は殺すと言う単語が聞こえなかったような顔で、深く考え込んだ。

こんな子供に、死を考えさせるとは、オレ達は鬼だね。

そんなことを思つて、一つだけ助言してみた。

「不在コレの書で記憶を改変する事も出来るから、過去を忘れて生きる事も出来るよ」

「……………ううん、忘れない、忘れたくない。この記憶を持ったまま、ワタシは生きたい」

その言葉には固い信念が宿っている気がしたから、説得すること

をやめた。ただ、後でも変更できる事は言っておきたい。

「他の道を選びたくなったら、構わず言っつて。その願いに添えるようにするよ」

「分かった。……………だけど、その光ってる本って何？」

へ？本って、不在<sup>コレ</sup>の書しか持ってないよね？別に光ってないんだけど……………

わけが分からず不在の書を見ていると、カノンが07号の頭に手を置いた。

ちよつとするとカノンが口を開いた。

「この子、不在の書の適合者だ。原本を持たせたら、自由に使えるようになるよ」

適合者とは、そのロストログアを唯一使える人のことだ。つまり、夜天の書がはやてにしか使えなかったように、不在の書は目の前の子にしか使えないと言う事だ。

「フィオーレが、不在の書の適合者。意外な話だな」

「フィオーレ？」

「ああ、君の名前。適当に考えたんだけど、嫌だったら他の名前にするよ」

適当に考えただけだし、本人が好きな名前もあるだろうから。

07号ことフィオーレに向かってそう言い、フィオーレは顔を赤く染めて自分の名前を何度も復唱した。

その様子をなぜかカノンが面白く無さそうに見ているけど、なぜに？

「この子達の名前はワタシが決めていい？」

「うん、いいよ」

どうせ適当だったんだから。

「じゃあ05号をセレステ、06号をカーゴにする！！」

「うん、いい名前だ」

フィオーレの頭を撫でながらそういうと、フィオーレは更に顔を赤く染めて嬉しそうにはにかんだ。

その後、さつき襲撃した違法研究所から連れてきた子供たちを、このアジトの中に運んで寝かせた。

連れてきた子供の数がかなり多いから、時間が掛かったけど、なんとか全員寝かせる事が出来た。それが終わったら、フィオーレに  
ある程度のルールを教えて、このアジトに住むようにも言った。  
その時に渋られたけど、なんとか説き伏せてそのまま地球に帰  
た。

「あんな子が二度と出ないようにしたいな」

屋根から町の様子を見て、フィオーレのことを思い出したからつ  
ぶやいた。

誰にも聞こえないように言ったはずだが、聞いていた声が二つあ  
った。

「人間は愚かだから、何度でも同じ間違いを犯すよ。たとえ、その  
先に絶望があると知ってても」

『カノンの言うとおりですね。理性ある獣ほど、自分の力を過信し  
て、マスターのように滅びの道を行く』

コンチエルト、お前も言っようになったな。でも、いまさら道を  
外れるわけには行かないんだ。

カノンとコンチエルトの言葉を聞いてオレもそうつぶやいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7743n/>

---

魔法少女リリカルなのは 闇孕む聖母

2011年4月9日13時36分発行